
女鑑
第十六年
第九號


季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ注文御
案内書は御一報次第
呈上可仕候
三越呉服店
東京日本橋區駿河町

家庭に有益なる發明品

專賣特許

蒸氣こて

◎東京裁縫女學校、和洋裁縫女學校、日本女子大學校裁縫科を初め各裁縫女學校裁縫部に於て御好評を得、御用を蒙りたる和洋服安全湯のし器



家庭用中形金參圓八拾錢

●本器は蒸氣の力を以つてノスこと故霧を吹く面倒無く、いかほど薄地の絹ものに幾たび用ふるとも少しも地質を損するいわれなく、絹縮緬洋服地木綿の別なく最も完全に輕便にしわを直し折目を正しホコリ汗しみ等は蒸氣と共に發散す

●本器の構造は全體ニッケル製、高尚優美、御進物に好適、堅牢保險證附

●御一報次第御高覽に供すべく候

東京市麴町區二丁目

關東發賣元

虎屋號 **千歳商會**

各勸工塲陳列所及び有名なる金物店に有り

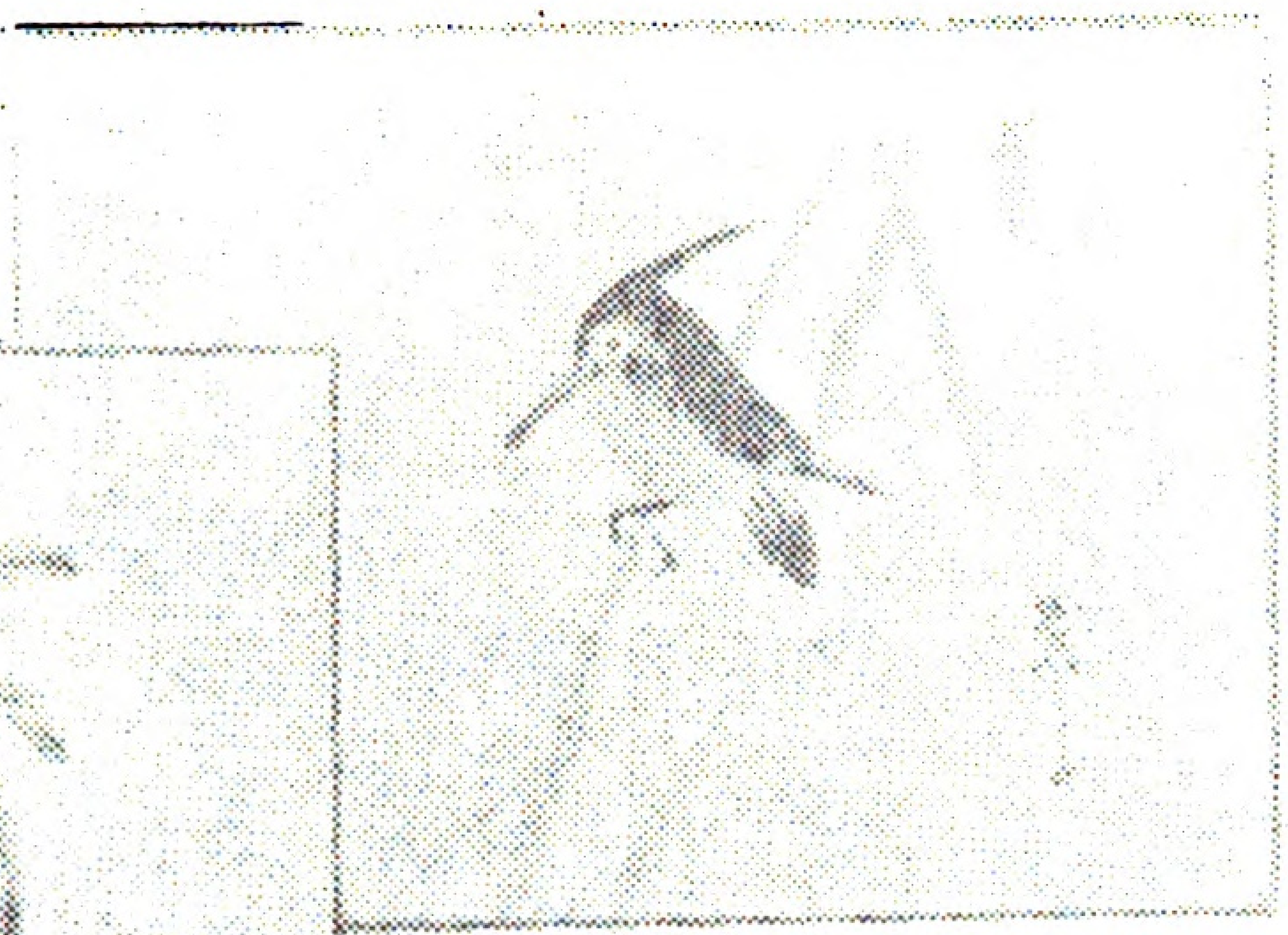
女鑑 第十六年 第九號 目次

朝顔



井伊直方君撮影

花と鳥









金子男爵
令孃
幾與子
彌惠子

岡田醫學博士の家庭

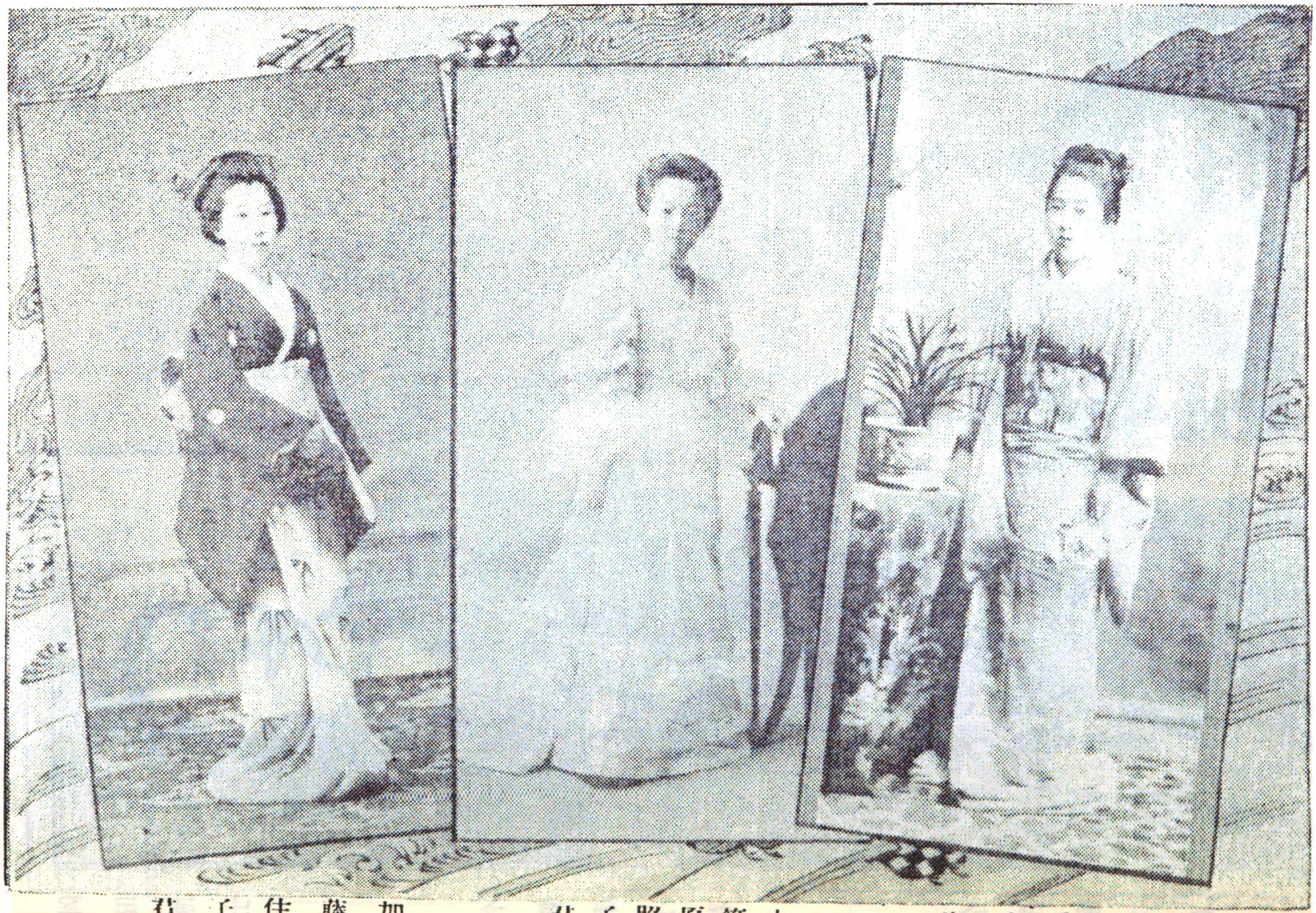


岡田博士

令孃和子君

令閨德子君

丹青界の三名媛



加藤佳子君　小笠原照子君　鈴木秀子君

各國皇室及ビ王家御用

ネッスレスミルクフウド



歐洲諸國及本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ。小兒、病者又平素不消化ニ苦ム者ニ適當ナル最良滋養食物ナリ。

最モ盛カンニ薬舗洋酒食料品店ニ於テ販賣ス

大好評毎號賣切れ再版三版眞價を知るべし

日本第一

婦人世界

實用專一

八月三日發行 毎月一回 第八號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九十錢 一年分一圓七十五錢

口繪

◎山階宮妃殿下の最近御尊影
◎名家の新婚寫眞品(珍三組)
◎三宅花圃女史の家庭と其書
◎蒙古女學生の書と河原女史
◎社交倶樂部の婦人喫茶會員

彩色石版 夏の朝……中澤弘光

繪手本 雁來紅……跡見花蹊
瀧……中澤弘光

婦人の日常生活法

村井弦齋

▲何の運動が婦人に適するか
▲散歩は如何にすべきか
▲精神の運動は如何にすべきか
▲足の運動は如何にすべきか
▲手の運動は如何にすべきか
▲接客は如何にすべきか
▲交際は如何にすべきか

▲言語は如何に遣ふべきか
▲笑ひ方は如何にすべきか
▲訪問は如何にすべきか
▲土産物は如何にすべきか
▲お八つは如何にすべきか
▲氷は如何に使ふべきか

見よ 日本婦人必讀の大文字 これを讀まぬ人は大不幸なり

◉弦齋夫人の料理談

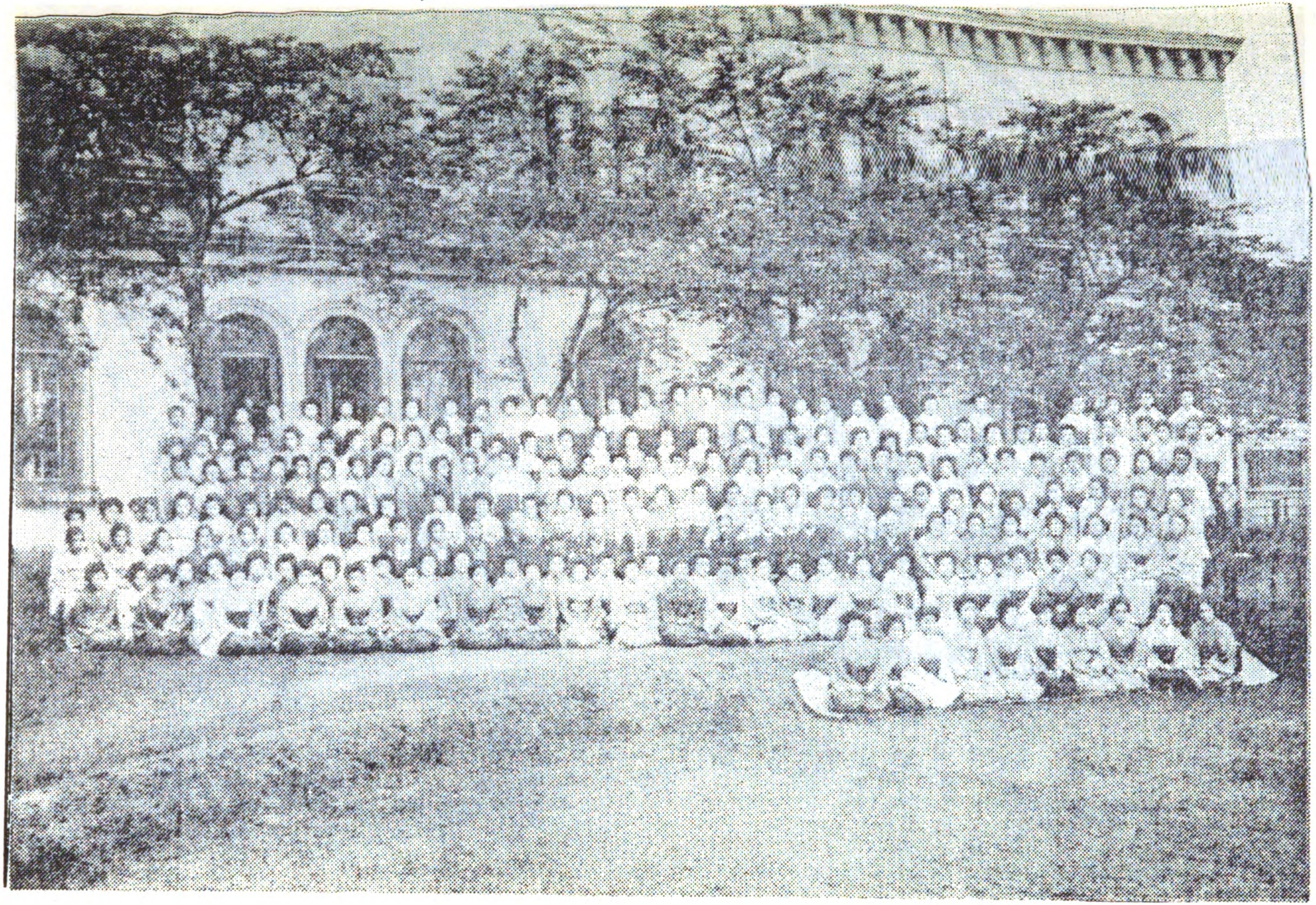
△冷し咖啡は如何にして造るか
△氷箱は如何に使ふか
△レモナードは如何にして造るか
△桃は如何に料理するか
△玉子の淡雪とは何か
△唐茄子は如何に料理するか
△赤茄子は如何に料理するか
△イチボ肉は如何に使ふべきか

小兒汗もの豫防及治療法 ドクトル加藤照麿

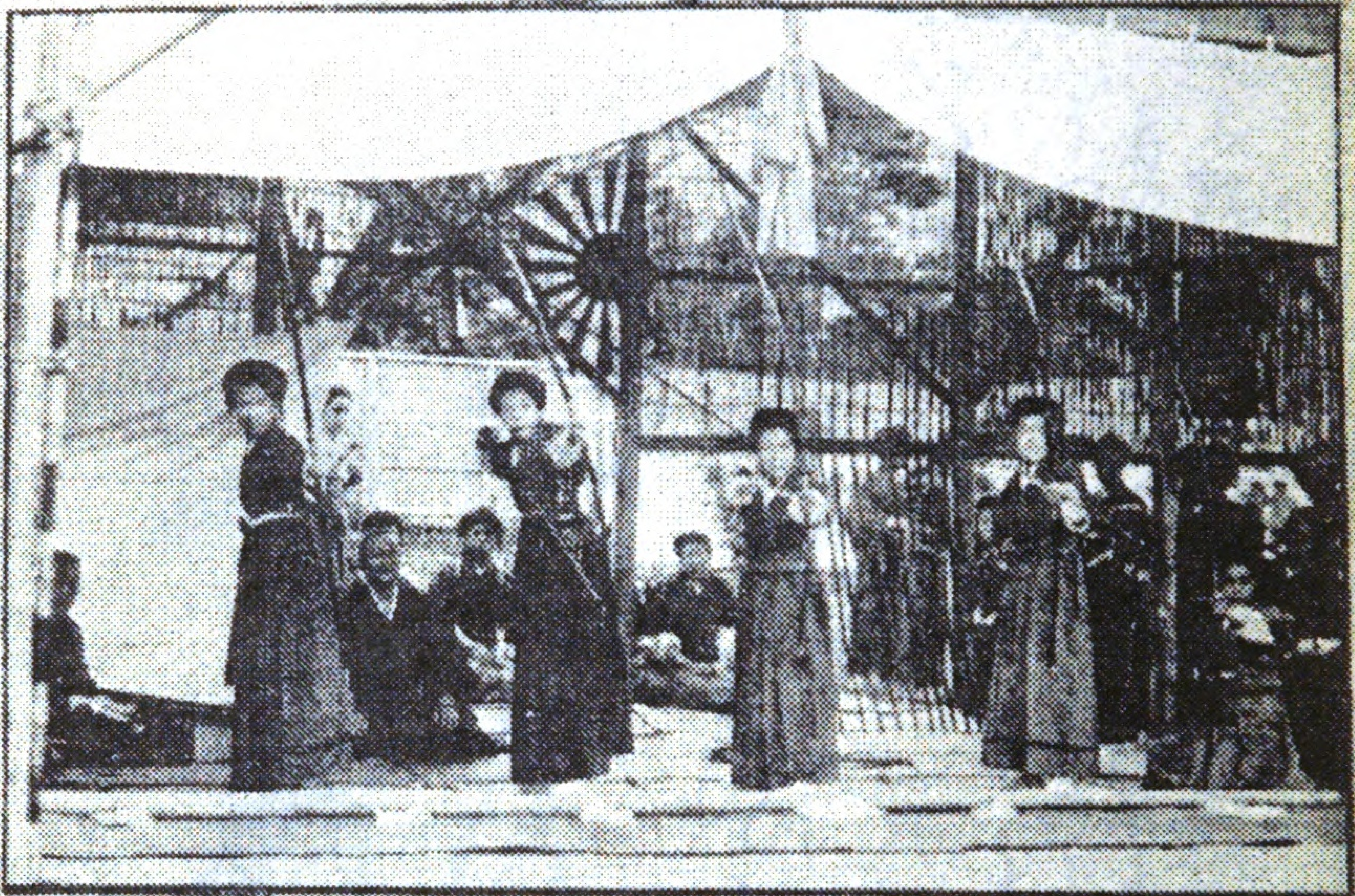
◉暑中休暇と子供……大村仁太郎
◉夏の我家……有島幸子
◉家庭用ラムネ製造器……鶴田博士
◉アイスクリイム製法……嘉悦孝子
海水浴と温泉……醫學士伊庭秀榮
◉上海までの船中日記……河原操子
◉三宅花圃女史の面影……樂石生
◉買物案内……近藤蕉雨
◉妊娠中の心得……西尾京子
◉婦人と寫眞……石塚月亭
◉大人菊(小説)……河井咀華
◉暑中休暇と子供……後閑菊野

發兌元 東京京橋西紺屋町十二番地 實業之日本社 (郵便振替貯金口座三二六番) 賣捌 全國書店

常磐會員の會合



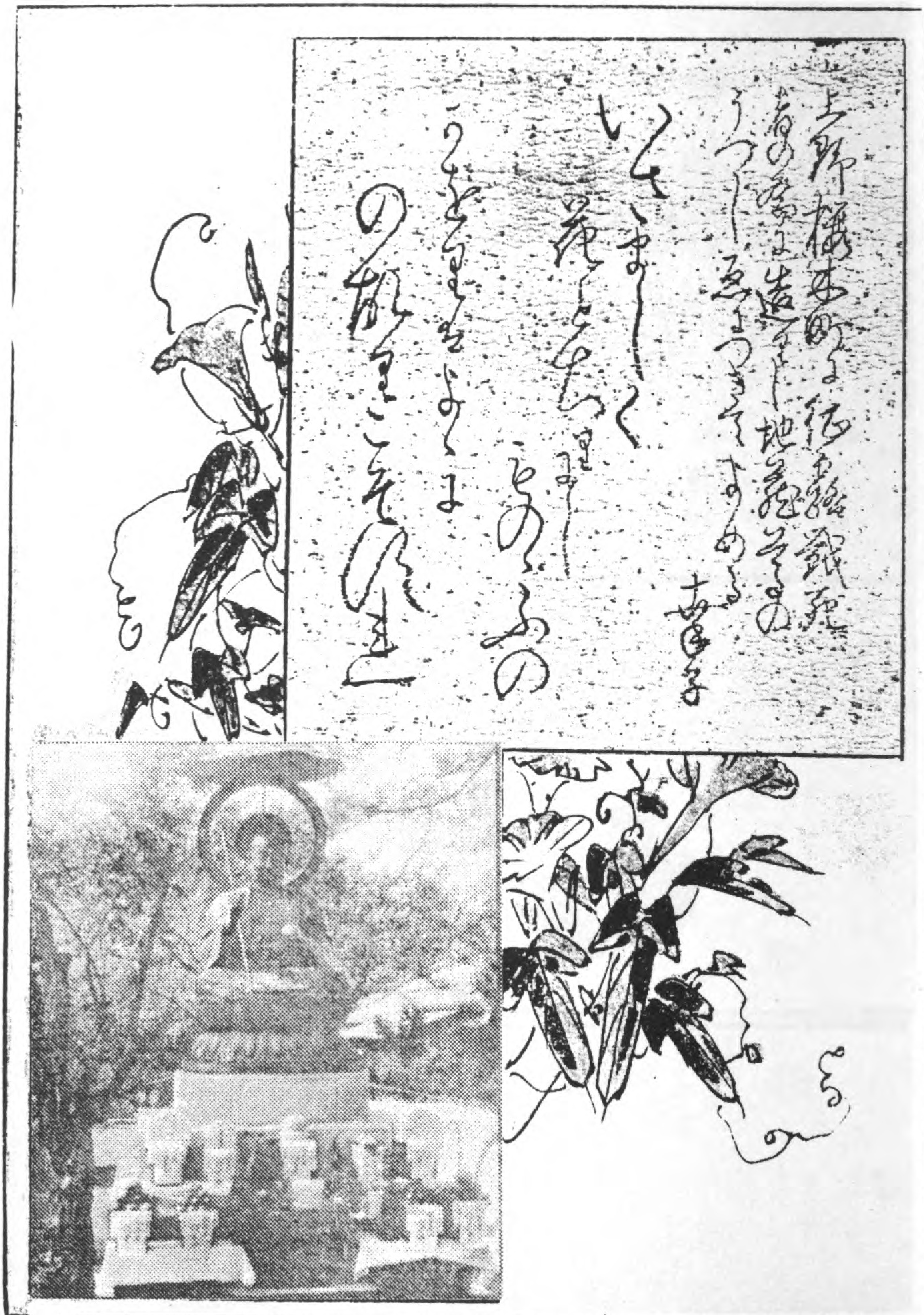
戰後の女學生



石川縣立高等女學校弓術大會（同校長土師雙他郎氏寄贈）



征露紀念の地藏尊



建立主唱者　中山幸子刀自の筆蹟

花いちり



幼兒百態の(三)

井伊直方君撮影

日本一手 發賣元



東京牛込
山本岳川堂

○ブレスト洗粉は品質純良にして色を白くし皮膚を滑にし光澤を出す

○ブレスト洗粉は普通の洗粉の如く多量に用ふ可からず壹袋を以て六七回の入浴に適す

定價 小袋入貳錢 大袋入拾錢
小罐入七錢 大罐入拾五錢

清心丹は亢奮、治療、收斂、健胃消化劑なれば衛生家の四時日常欠くべからざる要藥なり依てポッケット用、携帶用に便利なるニッケル罐入の設けあり定價は金卅錢、十五錢の二種あり販賣所は全國藥舖賣藥舖にあり御最寄にて人魚の商標御認めの上御愛求あらん事を乞ふ



本舖東京市元大阪町

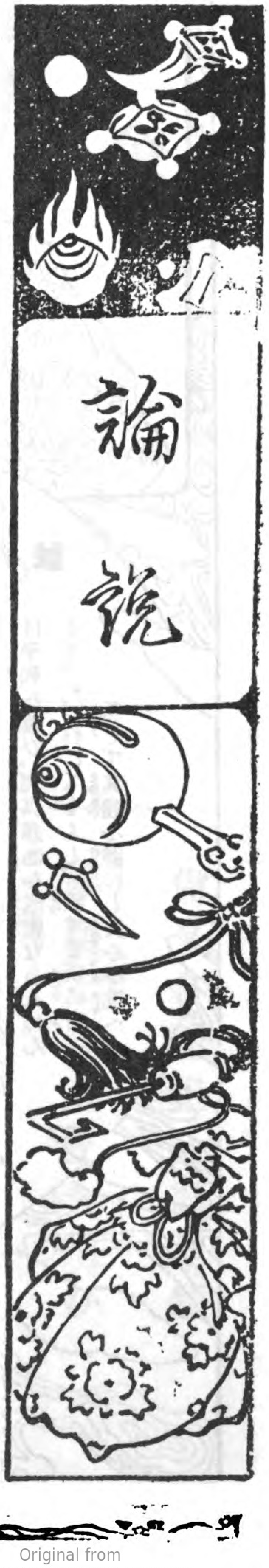
高木與兵衛



第十六年　女鑑　第九號

暑中休暇

海邊の清快をたゝへて、寄來る波を弄びつ弄ばれつ、潮あぶる折の心こそは、名利も俗念もなくて、無邪氣なる小兒の如し、されば夏期を過ごすは海岸こそよけれといひ、又質樸なる田舍に慈愛溢るゝ父母と、兄弟を省みたる人は、同じく其美をのべて、遠山に取まかるゝ我一村は、恰も小樂園の如く、一家は睦まじく、一鄕には爭なく、且つ彼等が心には欲望なく、名譽心もなく、人に對するに於ては、外貌を飾らず、媚諂はず、各なすべき業をなし、行ふべき道を行ひつゝ、平和に日を送れり、我は塵に汚れぬ田舍を愛すと云ひ、山林幽閑の地を遊歷せし人は、其天然の佳境を賞して、造物主の至大なる行爲を讃揚し、其樂の他に超ゆるを誇る、甲は健を慮り、乙は平和を慕ひ、丙は思想を濃密ならしめんとす、いづれにてもよし、欲する所に行け而して其體を健にし其心を洗へ。



女子教育の一端

伯爵　徳川達孝

今茲に述べやうとする所は、別段珍らしい説でも、變つた意見でもない、去ながらその珍らしくない、變つた所のないことをも、事實の上には新らしいとせねばならぬ現社會の有様であるから、一言を費す次第である、

女子は何うしても良妻賢母にならねばならぬ、學校やまた家庭にて種々の教育を受くるも、他日は妻となり母となるが、女として行くべき道であるから、先づ孰れへか嫁せねばならぬ、其結婚の方法則ち配偶者の撰擇は、世界各國種々の慣習がある、それが歐羅巴であるとか、亞米利加であるとか云へば、自由結婚とて、子女自ら配偶者の撰擇をなし、合意の上双方の兩親の許可する習慣はあれど、それが果して最よき習慣であるか否といふことは兎も角、我邦の現状ではさう自由な譯には行かぬ、矢張現在の習慣を最も適せりと云はねばならぬ、自分で夫を撰定する資格もないから、先づ親が配偶者を撰び、子女の意向を問いて定められたる上、左まで不都合でない限りは、また人格さへよければ、政治家へ嫁するとも學者の妻となるとも、或は地方の豪農豪商に縁があるとも限らぬ、又中等以下に嫁する場合には、夫とゝもに勞働せ

ねばならぬ、いづれにしても、身分相應に內助の勞を執らねばならぬのである、故に東京で學問をしたからと云うて、地方の人に嫁する事もあらう、その場合には、すべての觀念を地方の氣風に移さねばならぬ、例へば東京にては滋養物として牛乳を缺かさなんだ人も、地方へ行けば胡蘿蔔牛蒡で生活せねばならぬ、もしもそれが山間僻地であれば、牛肉の牛乳の、或はスープのと云ふた所で、到底追付く話ではない、女子が學問をするには、遂には妻となるべき身であるから、其の覺悟がなければならぬ、學問さへすれば必ず富貴な家に嫁せらるゝと思ふは間違で、苟も人が人に嫁するといふには、身分財産とか容貌のみが目的の唯一なるものでもあるまい、必ず人格に取る所がなければならぬ、人格もよく、富貴でもあると、さう物と云ふものは旨く行くものではない、また一たび嫁したる以上は、良人を助け、舅姑等に對し柔順にして、一家の平和を保ち、又發達を計り、社會の爲、國家の爲に盡さねばならぬそこで婦人は精神の修養が大切である、それは男子とても同じ事であるが、殊に婦人は胎敎といふ事もあり、もし邪の心起り、或は下らぬ事に煩悶する場合には、惡しき性質を其子にまで遺傳することになり、且つ夫に伴ふ運命を持つて居るのであるから、變に處しても心を亂さぬやうにせねばならぬ、如何に文學上の才智があつても、精神の修養に缺くる所があらば、良妻賢母となる事は出來ぬのである、

さて妻となれば、內助を本分とし、或場合には外交の事もせねばならぬが、我邦の程度では七分內助三分外交位のものであらう、或は九分九厘まで內助の人とならねばならぬ境遇もあらう、それ〳〵境遇に處して內助の功を擧げ、良妻賢母の實を擧ぐるが婦人の天職で、それに甘んじて、婦人の天職に忠なるには、道德的精神の修養がなければならぬ、

次に婦人のたしなみであるが、兎角極端に走つて居るやうである、善惡ともに敎育としては極端に走る方

がよいのかもしれぬ、されど何處までも中庸を得るといふのでなければならぬ、たとへば女學生が紅白粉をつけるはよくないと云へば、直に極端に走つて、頭も蓬の如く亂し、顏をも垢にて染め、學問さへ出來れば差支ない、と斯ういふ風になるが、身體を清潔にするは精神を爽快にする道であるから、贅澤でない限りは奇麗さつぱりとして、衣服などもにしだらのないやうにして、女學生相應のたしなみが必要である、されぱとて朝早く起きて白粉よ紅よとうき身をやつし、一見嘔吐を催す如き風采をするは沙汰の限りである、かゝるたしなみの場合にも、また精神の修養が大切である、

以上は實に平々凡々たることで、改めて申す程のことではないが、此の如き當り前のことが、往々當り前でないやうな傾があるから、かく申述べた次第で、世の女子のみならず家長たる父母や母姉がたの注意すべき參考の一端ともならば幸である（文責在記者）

活動せる婦人に

農學博士　横井時敬

社會の變遷につれて、婦人は困難な位置に立つて居る、困難とは生活上、及それと同時に來る精神上の困難である、而して今後層一層甚しきものとなるであらう、

生活上の困難は、今後婦人が悉く配偶を得ると云ふ事がむつかしい、自然獨立して行くものが多くなる譯であるが、その獨立的生活は事實上頗る困難なものである、又配偶者を得たる、即ち妻君としても、從來のとは大いに活動せねばならぬ、臺所の番人位では濟まされぬことになる、此間に處して生活上の困難は一通りでなく、然らざるも精神上の困難は多くなるであらうと思ふ、

われ〳〵素人的に觀察すれば、婦人は外界の種々の妨害物に抵抗する力が薄く、精神上殊に然りで、從來の歴史的關係よりして、下層の人には、今後大なる違ひもなく、社會の變遷に隨伴して行くことが出來るかが、中等以上の人に於ては、社會の變遷に應ずることが至難である、由來敎育は保守的性質を有つて居るものである、かく敎育の仕方によつては、女子をして益々精神上の困難を感ぜしむるやうになるであらう近時種々の方面に注意して、裁縫であるとか、割烹であるとか、實用に近いて來たやうであるが、動もすれば歴史的關係よりして、文學に傾き易いやうに思はれる、或西洋婦人の言へる如く、今日では日本婦人の體格が餘程よくなつて、蓮歩輕羅に堪へずといふ如きは、殆んど見る事か出來ぬやうになつて、一體に活潑にはなつたが、種々の關係よりして、中等以上の婦人は到底男子の如く充分運動が出來ぬ、而してその男子すら運動の不足を感ずる程であるから、婦人は猶更の事である、それが爲に身體は男子より弱く、隨つて精神上にも影響し、外界に抵抗力の薄くなるは、自然の結果である、

昔は精神を使ふ事が尠かつた爲に、運動の不足も左ほどの害はなかつたが、今後は精神を働かしてあらゆる困難に打勝たねばならぬのであるから、大に運動して、その困難に堪うる體格とならねばならぬ、而して困難の間に、精神上の樂みがなければならぬ、運動をするにも樂しみと相伴はねは、健康上稗益する所はないのである、その樂しみと云ふことは、人々の天性によつて各々異つて居るが、園藝の如きは其趣味を養へば如何なる人にも、興味を感じ、樂みのある運動になるのである、

園藝を樂むに二種ある、生活の程度によつて、見て樂むのと、行うて樂むのとである、一は唯室外に出て種々の花卉菜果等を見るのみで、非常に愉快を感じ、知らず識らずよい運動となるのである、そこで自家

に於てこの樂みを得られぬ人には、社會がそれを得せしむる設備をせねばならぬ、即ち公園等にて種々花卉菜果等を見せるやうにしたいもので、田舍では自然此注文に應じて居るから、別段その必要もないが都會では此設備が最必要である、日本では、日比谷公園など、や丶注意したものであるが、歐米の諸公園に比して大に遜色がある、

一は邸園を有するものは、自ら園藝を行ふので、僅かの時間を費して體格をよくし、精神を爽かにするのである、初めは厭うて居た人も、少しく辛抱して繼續してさへ居れば、由來趣味のある事であるから、いつとなく面白味を感ずるやうになる、近時園藝といふことは大分流行して來たことであるから、自分の云ふ所は或は蛇足を添ふるものかも知れない、併しさうなつて貰はねば困る、

それから上流の人には、自分で園藝を行ふことを勸告するのみならず、邸園を造り、温室を設け、成るべく多くの貧困者を招待し、其目を樂ましめ其心を悦ばしむる如きは、最も高尚なる慈善であるから、か丶る美風を行渡らせたいと思ふのである、

前述の如く、田舍では殊更に園藝の事に言を費すまでもないが、都會に住む人は、孰る仕事の多きに、惡空氣の中を長時間勞働するものが多いのであるから、朝夕園藝を樂んで、其精神と體格に滋養を與へるやうにしたいものである、もし朝夕と行かねば、一週一度でも、其利する所は尠少でないと思ふ、

摸範的女傑

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子

世界の歷史ありて以來、既に幾千歲を經しといへども、眞に萬人の理想に適ふ如き、女傑は多くあらざる

べし、即ち一藝一能に秀でたるものあり、人の忍ぶ能はざる所を忍びたるものあり、人の難きを爲し遂げたるものあり、甚しきは、人情にあらざるものを、敢てしたるものあり、更に甚しきは、道德上の罪人となりながら、人の注目を價する、行動をしたるものあり、或は、自ら何等の効績なくも、良人の位置に由りて、雷名を歷史に留めたるものあり、或は時運に投じ、幸福なる生涯を送りたるものあり、玆に於て天道是か非かの歎なき能はざるべし、

勿論一藝一能に秀でたるものも、其非凡なる點より見れば、一の女傑たるを失はず、例へば千代女の文學上に名を得、淸少納言の文章家たる實力を有したることは、確かに女傑たるを失はず、蓋し今日の女子敎育に於ても、單に藝能の進歩せし一點より見れば、世に女傑の增加せしと言はんも妨げなし、されど藝能以上の標準を以て評價せば、退歩せしと言はざるべからざるものなしとせず、

亦怪力を有し、事業を經營せし點のみを以て、高下の評價を附せんか、所謂女傑なきにあらず、例之は支那の韋氏、武氏の如く、陰謀を企て、社稷を危くせしもの、幷に埃及のクレヲパトラの如く、容色を以て、國家を覆したる者も、亦女傑と數へざるべからざるに至るべし、今後とても、天下に名聲の傳へらるゝを以て、女傑と否との標準にせんか、社會の道心は、日に月に衰ふるならん、

尙封建時代の節婦烈女には、良人の戰死を聞きて、忽ち自然の黑髮を斷ち身を僧庵に潜めたるものあり、甚しきは、腹を割き、咽を刺し、命を落したるものも少からず、これ薄志弱行なる婦人の夢想だに及ばざるものあらん、されど今日出征者の妻に向ひ、これを希望せば、果して如何、おのれは今日の婦人に、これを責むるは、難しと信ずるも、其志のみは、古の女傑を尊び、これに同情を表せざるを得ず、偶世には徒らに、生前偕老を口にしながら、戰砲の血痕、未だ燥かざるに、心ひそかに、婚を議せんとするもの

あるを聞き感慨の情、禁ずる能はざるものあり、更に、婦人の天職なる、慈善事業にありても、和氣廣蟲の如く、自ら、天下の孤兒を救はんとするものあり、亦、ナイチンゲールの如く博愛の情、迸りて、戰爭に倒れたるものを助けたるものもあり、これ皆女傑の行動にあらざるはなし、思ふに、婦人の事業も、一般社會的にあらざれば、不可なりと言はんか、所謂閨門を出でざる良妻賢女は、如何ばかり群に拔でんも、女傑の名を得ること能はざるべし、

翻りて史を見るに、一時の僥倖を得たる女傑少からず、聞くが如くんば、ナポレヲン一世の夫人、ジヨセフインは、平凡なる人なりと傳ふ、而れども、良人の關係上より、無比の閨秀として、歷史上芳名を垂れけりとかや、さればにや、彼の女は遂に良人より離婚されき、反之、彼の晏氏の御者の妻は、其の良人の劣等なる人物なるに拘らず、後世、婦人の好模範として知らるゝにあらずや、おのれの思考する所によ▲

女學生の風紀に就て

▽女學生の風紀　は、近頃八かましき問題となりたるが、自分の見る所を以てするも現今一般女學生は、以前と比較するときは、大に奢侈に傾き、風紀亦紊れて往々墮落の淵に沈むものあるに至りしなり左れども此風潮の趨ふ處を以て、全く罪を女學生にのみ歸するは少しく酷なりと信ず、今女學生をして此墮落の淵に臨むに至らしめたる本源を尋ぬるに、其一は女生自ら好んで墮落したるものなきにはあらざれど、其他の多くは學校、廣く云はゞ社會一般の惡慣に浸染したる故なりと認む、試みに現今私立學校の多くを見れば、多くは是れ

▽營利主義　を専らとし、生徒を善良に導く教育の方針を第二段に置くものなり、故に彼等は唯學校の外面をのみ飾らんとし、賛成員校長等は徒に有位有爵のものを仰ぎ、爵位だにあらば、例へ教育上の

▲れば、眞に後人の模範とするに足る女傑は、第一、操の正しきものならざるべからず、若し過去の歷史に於て、恥つべき行爲ありとせんか、たとひ口に金科玉條の言を唱へ、心は東西の學理に明かならんも、露ばかりだに尊敬するに足らず、

第二は、赤誠を以て、貫通せんことを要す、抑も人は如何なる運命に逢はんも、如何なる位地に居らんも、其言行、常に赤誠より發するにあらざれば、恰も傀儡と相異なることなし、況んや僞善の罪深きは、眞惡の罪の深きよりも、一層甚しきものなり、されば家庭にありても、赤誠を要し、社會にありても赤誠を要す、若し赤心を人の腹中に置くが如き女子あらば、人は如何に評せんも、おのれは女傑として數ふるに憚からざるべし、

第三は常識の婦人にあらざれば、女傑にあらず、如何となれば、妻となりて秀で母となりても勝り老人もこれに慰められ幼者もこれに導かるゝにあらざれば、眞の女傑にあらず、變調の人を以て、女傑とするは、大に謬れり、今日の社會は、秩序的となりき、故に亂世の哲婦、若しくは、逆境の烈婦たらんを理想とせんよりも、平和時代の善良なる婦人こそ、願はしけれ、即ち家庭の女傑となり、實行の女傑となりて、生涯を送らんことを期すべし　徒に虚榮心を滿足せんとするは、女子の能事にはあらざるぞかし、蓋し人は全智全能にあらざれば、如何なる女傑とて、多少の缺點なきにあらず、されば古今の史を見て意中の師表を求めんとならば、甲より一善を採り、乙より一長を拔くを以て、滿足すべし、これ我身を進歩せしむる最良の道也。

方針を辨ぜざるもの迄も聘して、贊成員、顧問たらしめ、以て看板を飾らんとするに汲々とし、又生徒數の多、校舍建築の大を以て、大いに他に誇らんとして、專ら心をこゝに用ふるに至れるなり、而して

▽社會一般の人も、有爵の校長顧問などありて、生徒數多く校舍の大なるものを見て、立派に完全なる學校と思ひ、之を歡迎するもの多く、從つて其教育薫化の方法如何を第二とするの傾きあるにより、學校も自然開放主義となりて、監督は行屆かず、教員又は校長等の感化も薄らぐに至るなり、又生徒も多數なれば一定の寄宿舍に收容する能はずして、通學を許すに至り、其通學生は父兄親戚或は嚴重の監督者の下に在るものゝ外、下宿屋等より通學する者をも容るゝに至るが故に、知らず識らず、女生は社會の惡習に浸染し、終に救ふ能はざる墮落の淵に沈むに至るなり、云々(跡見花蹊氏談)



幼兒の教育監督に就て

伯爵 柳原義光

小學程度の小兒に對して、私は家庭に於てあまり干涉せず、天然のまゝに大きく、所謂ぬーつと育てたい、惡戯で捨て置かれぬ事や、危險なことは、充分注意せねばならぬが、成るべく快活で、はにかむといふやうなことなく、極無邪氣にして、此時代は智育より體育の方に重きを措き、他日發展する準備をするやうにしたいと思ふ、

故に學校の試驗の如きも、一番になつたとか、二番になつたとか、或は褒美を貰ふたとか、云ふことに八釜しく騷立てず、合格さへすればよいとして置かねばならぬ、併しこゝに注意して置きたいのは、學科のあまりかけ離れて出來不出來のないやうにし、或は體操、或は倫理、或は何と、それがまんべんなく平均して行く、結局步調を揃はせるといふことが必要である、要之するに學問の不平均でなく、合格さへすればよいといふ事にし、社會に出た時に不都合のないやうにしたいものである、十で神童、廿歲過ぐれば尋常の人といふこともあるから、智育は他日に讓り、智識の發達上妨げなき程度に於て、復習等もさせるやうにしたいと思ふ、

それから動物を虐待すること、草花をむしる等のことにも注意したいもので、動物虐待の方は、すぐ目にもつき、注意も出來るが、無意味に草花をむしるなどは、ちよつと氣のつかぬ事であるが、これも草花に對する虐待の一つであるから、そのやうなことはよく氣をつけて、小兒の美なる性質を發達せしめたいものである、

又この時代より稽古させたいのは、外國語にピアノ

等の練習である、社會中流以上に嫁して、交際場裡に立つ人には是非外國語の必要がある、隨つて音樂の素養をも要する、一は舌の働き、一は手の働きでこの二つとも中年よりでは、思ふやうに進歩が出來ぬ、故に小兒時代によく熟練するやうに準備をせねばならぬのである（文責在記者）

家庭と規律

文學博士　建部遯吾

私は西洋に居た時、社會の外部を觀察すると同時に、家庭の内部を觀察したいと思うて、成るべく家庭に寄寓する方策を執つた、もとより私どもを寄寓させる家庭であるから、高貴なと云ふほどの家庭ではない、獨逸では初に仕立職人の家、次にギムナジユーム（中學高等學校）の、教授佛蘭西では豫備陸軍騎兵中尉にしてパリ大學の書記を務めたる人の家庭に居たのであつた、私は強ち高貴なる家庭を觀察するより、大多數の中等以下の家庭の觀察が一層價値に富み、私の目的もそれで達し得たことゝ信ずるのである、

之を略言すれば、歐洲大陸所謂文明國の家庭は、臺所に於て、秩序の正しきことと、經濟的工夫に富んで居ることを示して居る、

經濟の點より云へば、場所の上にも大に注意せられ棚の如きも幾重にもつくり、器物は大小の種々あり形の調ひたる而も重なり得る如きものを用ひるのである、材料の儉約の如きは實に驚くべきもので苟も食料品として役立つべきものであれば、いかなる殘肉でも、主婦がそれを戸棚に保管し、錠を卸して置くのであるが、之に使はるゝ下婢も權限の觀念が發達して居るので、それを不平にも思はぬのであるもとより卑しい所爲などゝは思はぬ、

ギムナジユーム教授の夫人は、一定の刻限になれば毎日市場に買出しに行き、清鮮なる材料を比較的廉價にて求め、一家經濟の鹽梅をなし、斯の如くにし

て、主人夫婦、子供、主人の兄、私どもで、一緒に食卓に就く、下婢は之に列なる權利がない、されど其の賄は家族全體と同じ待遇をするのであるから、更に怨望の譏りは受けぬのである、

次は一の材料を幾重にも使ふことである、例へば肉を買うても、そのよい部分は立派なる料理に用ひ、殘肉は嚴重に保管し、形のくずれたるものにて差支ない料理に用うるのである、即ち形の大きな肉はビーフテーキにし、切り出した肉はキャベツ巻にするといふ風にして、大きな肉を態々小さくする如き不經濟はせぬのである、

規律の正しきことは、精密料學の應用の如き、尤も注意すべき點で、例へば鷄卵を煎るにも、半熟であるとか、やゝ煮えたるなどいふ如き汒漠たる言草などはない、仕立職人の兒の小學校へ通ふ小娘すら、鷄卵を煎てくれといへば、何分間煎て上げましようかといふ有樣である、故に据風呂を沸すにしても、私は攝氏の四十二度が適度であるといへば、チャンとお誂通りに沸いて居る、決して手の皮の厚い下女が今人肌などいふ手加減で、皮膚の軟らかなお孃樣がやけどをするなどゝいふ如き滑稽はないのである、されば食品を調理するにも、パン粉幾匁にバタ幾匁といふやうに秤を正しく用ふる如きは云ふまでもないことであらうと思ふ、又食時々間の如きも、殆んど窮屈なる迄に嚴重で、佛蘭西では多少の融通はきいたが獨逸では大學から買物の道寄りなどして五分か十分後れても、教授夫人はあまりよい顏はせぬのである、

物價は、食料の如きも、誰しも必要の物は比較的に廉で牛乳は殊に廉價であるから、肉野菜は儉約しても、牛乳は十二分に用ひるので、如何なるつゞまやかなる活計の人も、滋養の缺乏などいふことのない丈多量に用ひ、塲合によつてそれが殘れば、又適當なる料理に用ひ、決して無駄は拵へぬのである、又單に魚といへば我鄕里（越後）にて鮭のことゝせる如く、歐洲にては肉といへば、牛肉の事としてある、

その牛肉は味はさほど美ではないが價は極めて廉で日本の米に代るべき佛國にてパン、獨逸にて馬鈴薯の如きは、これ亦廉價である、肉も豚となれば稍不廉で、魚肉また果物となればなか〳〵廉價でない、要するに物價は、必要品は存外廉で、奢侈に屬するものは飽くまで不廉である、それが生計向に於ける原則である、社會經濟の狀態である、實に好ましき現象である、

中以下の家庭では。主婦が下婢の仕事をもするのであるが、時によつて日給取にもあらぬ、時給取の下婢を傭ふことがある一時間何程と限つた下婢を使ふは極めてきはどいやうであるが、洗濯其他のものにて、まとまつた仕事の而も一二時間で片付くものをやらせるには至極重寶である、この時給取は工場通ひの職工の妻などが夫の出勤中臨時自宅の戶を締めて出掛けるのである、



右に述べたものは其一端に過ぎぬが、何うしても文明の進步は一面に於て規律の進步であると考へる、文明の進步は規模の小より大に赴くといふのであるが、如何にして規模の大に至るかは、例言せば、家を建つるにも、小さな東屋

位ならば、さほど精細なる水盛りをせずとも出來るが、數十層の大厦高樓となると、極めて嚴密なる水盛りを要するのである、もしこの水盛りに毫厘の差あれば、所謂千里の差を生じて、倒壊を免れぬことになるのである、又道路の如きも、田舍の小村落なれば殊更に設計せずとも、思ひ〳〵の家屋を建てその空地が自然道路になるといふのでもよいが、東京であるとか、ニユーヨークであるとかいふ如き大都會を經營するには、規律正しく街衢を設計せねば、外見はもとより實際に不便極まるものとなるのである、右の如き理由にて文明の發達は小規模より大規模に進むものとすれば、これ直に不規律より規律に赴くといふことを意味するのである、而して規律には、倫理學者の言を借れば、自律と他律とある、自ら己を律するに不可能の場合は他より之を律せらるゝ必要がある、然してこの自他の得失は、進歩したる自律でなければならぬ、規律の根據は自律でそれには敎育家の言葉でいへば訓練、被敎育者の言葉でいへば習練にあるので、その最も適切なるものを軍隊に於て見得るのである、

女子家庭問題の二三

軍人未亡人の問題に就いては、私は絶對的に再嫁を否認する者ではムいませぬ、情の上から先夫を忘れることの出來ぬ爲めに再嫁をせぬと云ふ婦人ならば、此れは誠に申し分がないとでムいますが、今日は色々六づかしい生活問題などもあつて、一々貞女兩夫に見えずと許り構へても居られぬ塲合がありますから、若し子供もあり、自分も外に便りがない身の上と云ふならば、再嫁するも良からうと存じます、併し根本的に見ますと、一体女子の學問を修めるのは、這麼時の役に立てる爲ではムいますまいか、結局何事も夫許りを頼りとせぬ、萬一夫が亡くなつたにしても、自分が立派に子供を育てゝ行く丈けの働きや活計の途を覺える爲の學問だと、私は斯う思ふのでムいます、最も之は自分の經驗から割出した傾きが御座いますけれど、若し今度の様な塲合になつても、其の未亡人の方々が、互に何か一つ自活の出來る藝能を覺えて、御出になつたならば、何も此頃の様に八釜しく未亡人問題を、外から彼れ是れと議論さるゝ事はなからうかと存じます、然るに今日の學問を爲さる女學生の方の中には、學問を以て身の飾りとす

數千、數萬、數十萬の軍隊の大規模なる行動は、最も森嚴なる規律を要する、而してこの大規模を組織せる兵士各自に就ては本來悉く規律上の習練あるものではない、山野に成長した農夫もあれば、前垂掛で育つた丁稚もある、なか〳〵仕末のわるい連中であるから、これ等は初め他律の訓練で新兵の時期を過ごし、その時期を過しては、軍隊生活上大抵の事には自律的となるのである、

翻つて文明生活の各員は、即ち文明國の老若男女は、文明の兵士である、而してその訓練、根據は家庭に於て存すとせねばならぬ、その家庭に於ける規律は、一日に三度、西洋にては四五回繰返す食卓に於て見るを得べく、其淵源は臺所に於て見るを得べきである、而して食卓と臺所の總督は主婦である、

人の初めて生れ、社會軍隊に入營するや、この新兵敎育係は各家庭に於ける主婦である、この點に於て文明社會の特色、根抵たる規律の成績如何を見るは、社會を觀察する、軍隊の語でいへば社會を檢閱する上に於て必要であらうと思ふ、すべて病人を診察する場合、健康者の身體檢査の如

る、夫れを以て誇りとしやうと云ふのはありますけれども實地の必要に備へやうとて、學問をしてゐる方はどれ程厶いませう、私は今日の女學生の方々が、此の點に於て大變に間違つて御出ではないかと存じて居るので厶います、

△丙午の迷信で、地方に婦人などの罪惡を犯すものが多いと云ふことに就いて私は丙午の歳に災が多いと云ふことを丸つ切り無いと斷言もできませぬ、六十何年目に災があるなど云ふ事は、單に迷信許りではなく經驗の上からのことでございます、經驗と云ふことは決して侮るべきものでないので、從つて丙午に屹度災がないとは云へませぬ、唯だ夫れ相應に用心をして、應急の手段を考へて置くことは、必要と存じますが、迷信せよ猥りに恐れよと煽動するのは惡いことです、丙午に生れた子が親を喰ふことなど云ふことは之は實例に照しても、全く無根なことで、之が爲に罪惡を犯すなどは、同情すべきやうのないことと存じます、

女子の文學と云ふことに就いても、私の主義は所謂行ひ餘りあつて文を學べであります、婦人が猥りに專問に文學をやることは、動もすれば遣り損ひの多いことで良いことゝして、人に奨むべきことではないと存じます（柳橋絢子氏談）

き、軍隊の檢閲の如き、それ〳〵急所といふものがある、故に我々が社會を診察し、文明の程度を檢閲するに、急所といふものがある、臺所の如きは、確にその急所である、

今日文明國民、規模大なる大國民の文明を判斷するに、その急所について、充分改善する必要があらうと思ふ、この適任なる人物、新兵教育掛を養成するは、女子教育の尤も必要なる條件であらうと思ふ、

世間には往々女子が參政權を得るやう運動せねば、動物虐待防止會に關係せねば、會堂に後生願ひをせねば、神秘主義を唱へねば、文明國婦人の資格に缺くるが如く思ふものもあるが、殷鑑平安朝時代にあり、この平安主義は決して堅實なる文明の標本とは云へぬ、

眞に大國民として宇内に立つには、必ずや規律を重んじ、三ッ兒の根性百迄の習性を善美にすべきである、そは家庭の食卓臺所に於て習練する事が出來るであらうと思ふ、私は其點に於て實地其局に當る方々に相談したいと思ふのである（文責在記者）

夏期休業と家庭

△感情の轉變　人間は感情の動物と申しまして、女に限らず感情の爲に左右せられて、自分で自分を苦しめる事が幾らも有ります、殊に年若い女子は感情の轉變が甚だしうございまして、今日怒つて居るかと思ふと明日は笑つて居る、今日笑つて居るかと思ふと、明日は悲しんで居ます、そんな位なら泣たり怒つたりしない方がいゝのですが、感情を抑へるものがないと淡さうなりますのが人心の弱點です、少し心配な事でもあると、御飯が食べられないの、昨夜は寢られなかつたと云つて騒でも一日々々と日を重ねるに従つて昨夜は寢られたの、今朝はお茶漬がおいしく食べられたのと云ふ様に、忽まち消えて了ふ心配なら寧そ、始から心配はしない方がよいのです。

△心配の戸棚　世の中に誰も心配のない人はないのです、私などはよく生徒から先生は少とも心配なさらない、先生には心配がないのかと云はれますが、何うして心配がない處ではありません、時によると三つも四つも一度に重なつて來て、一人では心配しきれない程あるのですが、ちやんとお腹の中へ戸棚の様なものを拵らへて、順々にそれを納つて置て夫から又一つ宛取出して小口から其心配を片付て行きます、私は幸ひに小さい時から嚴しい祖母の敎へを受けて、下らぬ心配などすることを戒しめられました爲に、今になつて大層利益を感じて居ます、心配と云ふ者は大人許りではないどんな子供にでもあるものです、子供のは聞て見ると極めて詰らない馬鹿げた様な事ですが、子供に取ては夫が氣になつてならないのですから、母親でも姉様でも夫などとくと聞取つて、それは斯うしたらよい、あゝしたらよいと云聞せて心配の雲を拂ひ去つて遣るのが必要です（下田歌子氏談）



社會と人情

解題

中川愛氷

此問題は黒田家事件より得たる人情觀である、此事件は、今の社會にはあまり珍らしいといふ程のものではないが、名家の出來事なるが故に、多くの耳目を聳動せしめたのである、いかに名家の出來事なればとて、沒人道の事であれば、讀者諸孃の前にその事柄を吹聴すべきではない、成るべく一人の耳にでも觸れぬやうにと力むるが、本誌の執るべき道としては當然の事でなければならぬ、然るにも拘らず、本問題を提出したのは、いさゝか理由がある、

世の古今、國の東西を問はず、品性の劣等なるは身分と逆比例の觀がある、即ち上流の人ほど品性の面白からぬのが多い、其家庭の如きも外觀のみの美で、人情を以て團欒して居らぬのが多いのである、それ等上流の人によつて、常に好ましからぬ行爲が新聞紙といふもの生れてより、殆んど毎日傳へられて居る、上流の人は今更云ふまでなく、社會に對して其地位の上から責任がある、其一擧手一投足は下風に立つものゝ模範とならねばならぬのである、而も常に其非行を新聞紙に歌はれて、改悛するなどいふ如き氣の利いた事もなければ、同地位連帶の責任を以て、互ひに戒飾しやうともせず、その非行は悉く棚へ上げて、それ等の非行を揭ぐる新聞を小新聞と稱し、その小新聞を見ぬことを上流の人の態度として居る、他人の非行を訐くといふは、法律にも禁じたるが如く、極めてよくない事である、その所謂小新聞のする事はよい事ではない、而もその小新聞の材料をつくる事に平氣なると、材料となつて無神經なる、上流の人の社會に對する無責任にも呆れざ

るを得ないのである、本誌は決して他人の非行を許くものでない、またその權利もないのである、たゞ黒田家事件の人情日に落下せる今日に於て、活題目となれるが故に、いさゝか所思を述べて、本誌が疊の上で議論をのみせぬ一證としたいのである、而して此事件の眞相に就ては、黒田家側の辯護士岡村博士、丸山家側の齋藤辯護士、この事件を取扱はれたる松本檢事、及秋元子爵の紹介によつて、黒田家に十數年出入せる石川周八氏、本件の主人公なる丸山瀧子夫人の諸氏に就て聽く所少からねば、多少會得する所あるを信ずる、而して予は其眞相を究得たるを誇るのではない、この事件は沒人道と信ずるが故に其所感を述べ、且如上關係諸大家の説を叩き、緊急動議としては、この局を僞善的でなく人情的に結ばんことを望み、猶幾多暗流中にある家庭に一微光を送くらんとするのである、

猶此事件に就ては、幼兒取戻しの裁判より、容易ならぬ生母分籍の事まで現はれたのであるから、其眞相を窺ふに足るべき、去る六月二十六日報知新聞に掲載せる子別れの一節を評釋したいと思ふ、

『演劇にしても子別れの悲劇は、最も人を泣かしむるものなり、然も之を事實に見る、丸山瀧子と故黒田伯の遺子竹女の別れは同情すべきものあり』

山上憶良のいふ如く子にまさる寶はないので、その寶に別れねばならぬといふことは、人生中最も悲慘なるものである、重の井子別れの如く、實に演劇に見るさへ、最も涙の袖を絞らされるのである、而して實際に演じられた、子の竹女といふは、黒田故伯が不倫の子で、其妻たりし瀧子の腹に生れたのではない、普通の婦人なれば、甚だ不快に感ずべき子である、それかあらぬか故伯も、この竹女を藁の上より氏もなきものに與へられんとしたのである、然るに瀧子は兎にも角にも此家に生れたもの、この家にて育てさへすれば、この子の將來も幸多かるべしとて、強いて我子として、手しほにかけて育てたのである、而己ならず非常に寵愛したのである、實に

人情として大に掬すべき所がある、この人情を受けた竹女が、瀧子を生の親より一層親しく思ふのは當然の情で、思へば思はるゝで、瀧子が竹女に對する愛は刻一刻に加はつて、今や憎まれ口もきく、やう〳〵七歳の可愛ざかり、それの手放されぬのは、無理のない事で、手放すことを強いる方が或は無理ではあるまいかと思ふ、非難すべき所はあつても親の手、はじめ生れた時に他へ遣はしたと思へば何でもなき話である、それもよし、この妹の事を左ほどまで深く思ふに、何とて母の上には、いつまでも無情であるか、



「今宮時の模樣を探りきくに、黒田家側の人の、瀧子に對する感覺は、少しく穩當を缺きしやの感あり、時刻は廿四日の午後三時頃、瀧子は竹子を迎出して人力車に同乘し、黒木大將家へ送り行きしが同邸にても待設けたる事とて、直ちに母子共に導き入れられしは洋館の應接室なり、例もならば日本玄關より迎へられ、大將夫人百子なども、共に一日を鬼ごツこなどして遊び暮すなるに今日はそれとは事變り、瀧子が竹子のみを引きて衝と入りし」

たとひ今は分籍されたるにしろ、瀧子は故伯爵の死水をも取り、立派に伯爵の妻といふ時代を經過したのであるから、黒木大將とは義母子の關係もあり、丁寧に西洋室に優待するは其當を得たるもので、強ち報知子の日本室といふのでなくともよいと思ふ、

其の室には、大將と調所男爵が椅子に倚て待つゝありき、然も平

日の態度は無て、莞爾ともせぬ嚴しき顔付苦々しくも一瞥を母子の上に投しのみ。」

これは或は間違なるべく思ふ、調所男爵は黒田故伯の殊遇を受けた人で、云はゞ恩人の未亡人に對して、其行蹟は兎に角に、かゝる態度をとる事はあるまいと思ふ、もし事實とすれば、かよはき婦人に向つて、紳士の執るべき仕方でないは、かゝる場合には温言以て得心せしめねばならぬ、裁判所の如きでゝも、清水檢事の如きは、婦人には阿古屋で行かねばならぬと云ふて居る、

『暫らくは無言の間に立ちしが、瀧子はやがて二人の前に進み、竹子引渡しの挨拶を陳べし後、今日は雨天ならずは、竹子の衣類又好める玩弄物なども共に持參の心づもりなりしに、何かとの心急ぎといひ、兩三日來の悲しみに忘れたれば、いづれ衣類の仕立直すものもあれば、後より御屆申すべしと、母の情としては、さもあるべき情も籠る言葉も冷々たる人の心を動かす能はざりしか。」

この時の瀧子の心中は如何であつたか、實に胸も張さける思ひであつたらう、世が世なれば、少し己より横柄に出てもよき身を以て、かゝる悲しき待遇に接するのは、殘念な事であらうと、同情に堪へぬのである、もし瀧子が情の人でなく、意志の強い人であつたならば、黒田家を去るにも及ぶまい、又この幼兒を返すにも及ぶまい、どちらともに相當の道理がつき、動かすことの出來ぬ地位であつたにも拘らず、今日の悲境に至つたと思ふと、これからは婦人も武裝せねばならぬか、さて世の中を今更ながら恐ろしく感ぜざるを得ないのである、

『相變らず嚴格の態度にて『イヤもう开な御心配には及びません、貴女より御惠みなくとも、敢て風邪は引せ申さぬ」と膠なき答へに瀧子はせぐり來る涙を呑みて『これは御尤なれど、これまで手塩に掛けし竹子との別れに、只母の心ばかりの品々、お納め下されば難有し」と云へど」

黒木大將は武勳赫々たる人で、先年の戰爭には、大方ならず物の哀れを感じられたことゝ思ふ、さればこの事の眞ならざることを信ずべきであるが、清仲伯の立場から云へば、復籍の事より、今日母に此歎からしむるは、不孝の所爲たるは免れぬのである

もし伯が年少であるとすれば、我大日本帝國の人に、何は知らずとするも齢十歳を超えて孝道を解せぬものはあるまい、十一二の蜆賣が親孝行した話でさへ大川の蜆の數ほどある、まして相當の敎育を受け、忠孝二道を以て世の鑑とならねばならぬ身分で、母の分籍の時が二十　今日廿三歳といふ、最も事理に明るくなければならず、少くも孝道は解せねばならぬ齢であつて、高臺の見物は其意を得ぬ、既に不孝の子となつて、其上に何の體面と、何の名譽が必要であるか、かゝる場合にも親を泣かしめて、妹一人如何に育てやうとしても、さうは行くものではないもし、萬々一、この竹女の將來に失敗があつたなら何と云譯が出來るであろうか、それは何うしてもこの黒田家に引取らねばならぬとしたれば、今少し方法があつたであらうと思ふ、御惠みなくとも風邪を引かせぬ、など裏店的言葉は實際あつたかなかつたは知らぬが、失禮な取扱ひであつたらうとは、想像されるのである、幼兒を返し難ぬるは親の情で、この情がなければ鬼である、この人情に向ふには相當の人情がなければならぬ、

『猶和らがず、折角拵へられたもの受納めたうはござるが、この場合これも一存にも參らず、他の小供にでも與ておやりなされ、』芝居ならば敵役染たる挨拶に瀧子も取着く島なく無言にて首を垂れしが調所氏は傍より「一體この事件は、私が最初數回お話に行た時、圓滿に纒れば、訴訟沙汰にも及ばなんだのぢや、夫も今はいつても返らぬ兎に角今日は竹子さんさへ請取れば、用はござらぬ」と、怒を含む聲々に攻め立てられ』

瀧子の悲憤思ひやるべく、この記事をよみて清仲伯如何に考へらるゝか、既に親を訴訟する心には、如何にも映ずまじけれど、如何なれば地位財産のみかくばかり貴いであらうか、して見ると明智の母などは女ながらもゑらい物である、以上の所置は不穩當ながらも、關係者が瀧子に對する手段と思へば、また止むを得ぬことであらうが、これを反對に清仲伯に孝道を盡さしむる方に力められたれば如何かと思ふ、予は飽くまでも信ずるのは、如何に大勳位公爵總理大臣になつて見た所が、それが不孝の人であ

つたならば、其地位は、三文の價もない話であらうと、

「瀧子は、竹子と別れを惜しむさへ儘ならぬこの場の體に、一言二言聊ち言をいひしに、人々は衝と身を起して「もう今日は何事も言はずお歸りなされ」といふ言葉も、瀧子にはつれなく聞え、覺えず涙にくるゝ狀を、母の袖の陰より見て居たる竹子は樣子は知らずワッと泣き出し、調所男が長居は却つて竹子の爲ならずと歸りを促がされて、力なく立上る母、竹子は、その袖に縋りて、共に歸らんとむづかるに、瀧子は後髮引かるゝ思ひ、斯くては果てじと、男が竹子と間を隔てゝ歸りを急ぎて、生木を裂く母子の別れは、床の淨瑠璃に愁歎を聞かせたきばかりなりしこはさもあるべし」

あゝ此母子、何故に同棲して惡しきや、竹女にとりては、このやさしき母と同棲して、世にも嬉しく思ふであらうに、竹女の目より云へば、或は佛の手を放れて鬼の手に入るやうにも思ふであらう、かくて成長の後、地位高き家には嫁げば、いかなる幸福が得られるであらうか、現在瀧子は伯爵夫人として全かつたに、伯爵母堂となつて、なんで分籍せられるほどの事になつたか、たゞ名家の妻となるばかりを幸福と思ふと、其奥にはかゝる不幸が潜んで居るのである、予はもし此場の光榮を事實とすれば、かゝる家に育てられ、不孝の兄に顧みらるゝよりは、やさしき母と同棲して、それに兄と二人分の孝行をさせたく思ふのである、

『斯くて瀧子は、涙を拂つて、竹子に別れ、午後六時半頃歸宅せしが餘り氣を勞し、悲傷に腦を痛めしが、歸宅するより頭痛がするとて打臥せしが、夜に入りては發熱し、實母の丸山喜代は、徹夜附添ひ氷嚢にて頭を冷し抔して、母子一睡もせず、夜を明せしとぞ』

斯の如き情深き人、何とて清仲伯にも無情であらう、もし清仲伯にして孝道を盡さるれば、たとひ如何に瀧子が度し難しとする非行を敢てする人にしても、遂には動かされぬことはあるまいと思ふ、それは單に母なる瀧子に對してのみでなく、地下の父伯に對しても執らねばならぬ道であらうと思ふ、

『それより廿五日午前十時頃岡村齋藤の兩辯護士は、裁判所に落合て、訴訟取下を爲し、さて齋藤氏は岡村氏に向ひ『君昨日の黑木邸の竹子の受渡しの模樣を聞くに、全く武裝的の受渡しで、一點の情も無かつたとは、餘りのやうに思はれる、一體我々平民とは違つて

貴族といふものは、あのやうに冷淡なものだらうか、その爲に瀧子氏は歸宅するなり、病氣となつた」と、不快げに語りつゝありしを聞けり、

貴族であるから人情は不用といふ話もあるまい、然るに貴族には往々人情の缺けた行爲がある、人情に缺けた所があるから騷動が持上る、要するに此事件も人情の破滅から來たことである、予は此事件は裁判取下げになつて、局を結んだものとは思はぬ、もし局を結んだものとすれば、局は局なれども小局で大局は瀧子が黑田家の人になり、清仲伯が孝道を盡す意志にならねばならぬ、否意志があつても行はねばならぬ、過日の落着の如きは、意志疎通の上でないから、瀧子は飽くまでも竹女は離して置きたくないに違ひない、もし他日竹女が、母の事を思うて母の許に逃出し、再び黑田家へ歸らぬとすれば、それに對しては執行は出來ないであらう、今七歲の本人、これで落着したと思ふは大早計であらうと思ふそれより清仲伯も瀧子も、竹女も同棲し得たる、人道に叶うた局を結ぶことを、繰かへし／＼希望するのである、予は斯く云ふもの丶清仲伯に同情する點なきにもあらねど、清仲伯は何處までも千百の事情を捨て丶、人の行くなる道を踏むことに左思右想するに及ばぬことゝ思ふのである、

個人主義と家名主義

子爵　秋元興朝

近時世上に取沙汰せる黑田伯爵家の事に就ては、其眞相も知らず、また前伯爵とは懇意でもあつたし、多少の意見はあるとしても、少し困る地位であるから、この事に就ては、黑田家の事に就て委しく知れる石川周八といふ人を紹介せう、

そこでこれは黑田家としての話でなく、否過般の子供取戻しの事に關係せぬ事としてお話し申さう、故黑田伯は極めて義理堅い人で、又親切な人である、いつか私が病氣で入院して居る時に、態々自分の邸

で生ましたのだといふて鷄卵を持つて見舞に來てくれた事などもあつた、自分がさうして義理堅い親切な人であるから、他人に不義理や不親切のあつた場合には甚しくそれを忌まれ、あまり正直に過ぎたものであるから、水清ければ魚棲まずで、過ぎたるは及ばざる如き感もあつて、かの上杉謙信が手打にしたもの九十人、といふ風に、兎角に癇癖が強かつたやうに思ふ、

華族や金持には、古風な人道が殘つて居る、昔は今と違うて、個人本能主義は絶對的にいけない、家名と云ふ事に重きを措いた、それは大名といふものが原で、大名は、たとひ一家は微々たるものであつても、一生其領内の土地を支配せねばならぬ、政治團體の主宰者であつたから、家名に重きを措いたのである、そこで一個人一家内と見ると、他人が干涉して子供を取戻すなどは、隨分薄情な苛酷なことであるが、家には替へられぬといふ話から始まり、子供取戻しのことでも、婦人に任して置くと、情に流れて子供を旨く敎育することが出來ぬ、學校は何校へ通はすにしても、家庭で姑息な敎育をされては、將來如何やうな事に成行くも知れぬと、古風な考から取戻さねばならぬと云ふ事になる、斯の如く上流社會には比較的不人情な行爲が多いが、これは前述の如く家名本能主義から割出されたのである、

そこで社會的觀念からして個人本能主義にするかまた家名本能主義にするか、今の時代は政體も違ひ昔のやうな譯にも行かず、さればとて一足飛に個人主義にもならぬ、冷酷でもない、不自然でもない、この過渡時代を折衷して、立派に歸着する所を求めたいと思ふ、

次に結婚に於ける身分の懸隔であるが、これはあまり懸隔のない方がよいが、あつた所で差支なく、これからの世の中はそんな事も云ふて居られぬ、維新前後の所では、商家の娘に學問の修養などはなく、士族でさへ珍らしい方であつて、重に琴三味線の稽古をしたものである、琴三味線の稽古が惡いと云ふ

ことはないが、琴三味線を教へるものは、普通の人より一段下つたもの丶如く、自ら卑くしてかゝつて居るから、隨つて品行もあまりよくない、さういふもの丶師授を受けて居るので、惡く云はゞ氣槪がない、その代り奸黠な所がなく、却つて從順で、妻にして置くには至極よかつた、故に商家の娘が、華族の妻になつたからと云うて、決して不都合な話でない、今日に於ても別に變つたことはなく、却つて身分も何もないものでも立派に奥様になりすまして居るのがある、併し今日では琴三味線の素養のみの人を妻としてよいといふ譯には行かぬは無論のことである、

所感四則

文學士　三輪田元道

社會制度の上から云へば、華族は皇室の藩屏であるまた國民の儀表である、故に侮辱の言語を以て、之を論難するに忍びぬ、黒田家の事に就ても、その家庭内に行はれて居ることを、知り且つ感じても、今日發表して問題にすることを好まぬ、たゞ聯想作用の結果、其所感の三四を述べやう、

結婚の成立に就て

結婚は、何を標準にして成立せしむるか、これを根本的に研究する必要があらうと思ふ、過去の歴史の上に、往々結婚に於ける缺點と見るは、女子は相當な容貌があれば、それが方便となつて、氏なくして玉の輿に乘らるゝといふことが、實際に行はれて居ることである、

故黒田清隆伯は、日本の一種の傑物である、されど前世紀式の傑物で、婦人其物の如きは、玩弄物と輕く視て、容貌さへよければ、職業が何うであらうが思想が何うであらうが、又血統が何うであらうが、そんなものは何うでも關はぬと見たかも知れぬ、聞く所によれば、外見其物より採用して、華族の令夫人としたとのことである、卑賤より立身出世をして

お寡婦どんが令夫人となつて、糟糠の妻は堂より下さずなどいふのと、大に趣を異にして、全然玩弄物視して居るのであるから、英雄の一大缺點と見るの外問題にならない、

そこで婦人の心の狀態如何を研究する必要がある、今日の社會に於て、結婚を議する場合には、德とか心とか云ふものが、大切なる要素とならないで、外貌、次に位置財産といふやうなものが、重なる條件となつて、人の心育は左まで問はぬ傾がある、斯の如きは文明社會の大缺點であつて、此の標準を速かに改正せねば、黑田家の轍を踏むやうな事になるのである、

親子の關係に就て

日本といふ國は由來華族制度の國である、その制度のよきかあしきは別問題として、歷史以來華族制度になつて、長上に對しては尊敬し、服從せねばならぬ事になつて居る、古い話であるが、日本で神といへば先祖の事を指すので、西洋の基督などゝは違ふのである、又長上を神と稱して敬ひ、兄をせうとの神といひ、父を父上といふ如く、又社會に功績のある人、愛國の士、皆神と稱せられ、現に楠公の如きも、神とするに異議のあるものはないのである、斯の如く自分より上のものをさすのであつて、その神たるや、精靈をもつて居る、宗教家の所謂、西洋のゴツト、佛敎のほとけといふ如きものでないのである、長上とし祖先として畏敬すべきもので、後進者子孫、年少者は之に服從せねばならぬのである、その命を奉ずることが必要の條件である、支那にて唱へたる五倫の道、長幼序あり、君臣義ありといふことは如上の日本の華族制度に適合して居る、

そこで人類と生れては、孝行といふ事が、日本では德目の第一位を占めて居る、西洋にはこの孝の字がない、オビデンス即ち從順といふ字を、孝にあてゝ居る、從つて孝といふものゝ價値が違うて居る、日本で百行の基とし、國民道德の主眼として居る如きとは雲泥の差である、しかるに頃日黑田家の事件を

遠く眺めて見ると、骨肉相食み、親子法廷に是非曲直を爭ふて居るので、品位ある人の爲すべきことではない、旣に上流社會に斯る事がありとすれば、上の爲す所下之を擧ぶに至り、やがて人倫の大綱が紊れる端緒を開くもので、これは單に黑田家の問題ではない、大切なる德目を破壞せられた、社會の重大なる事件であるから、斯の如き破壞を將來に妨ぐべく大に國民を戒めて置かねばならぬのである、

婦人の態度に就て

婦人と雖も、獨立の人格と、獨立の判斷が必要であらうと思ふ、これも黑田事件によつて考へて見ると自分が夫の存命中でなくて、離別せらるゝといふは、實に非道理のことで、夫婦といふ男女二人間の關係は、決してそれ以外の人が干渉すべきものではない、故黑田伯存命中、相當の理由があつて離別するといふことは、よい事でないとしても、先づ致し方のないことであるが、夫たる故伯が居なくなつて夫人たる其身分に變動の來る事件が起つて、正當防衞が出來ず、位置を擲つたのは、無能といふべきもので、精神が不健全であつたからであらうと思ふ、かくて闇より出で、闇に入り、今日の如き運命に立至つたのである、故に女子は充分に敎育を受けて、精神を健全にし、獨立の判斷がなければならぬ、女であるからこんなもの、女のした事であるから、また女が何を知るものか、といふ如き不都合極まる評價を下され、女自分もそれに甘んじ、それ等の言葉に保護されて居るなどは不見識なことで、一方から云へば甚侮辱を加へたものである、すべて道德上の責任は、男子と同し法則を守るべきもので、女子といふとりのけものを以て甘んずるといふは、實に間違つた話で、女子敎育は此點に於て、大に注意せねばならぬのである、

結婚の標準に就て

今後婦人が他に嫁するに就て、その標準を定むることの必要なることは、前述の如くであるが、一商人の娘が伯爵家の夫人となつたといふことは、俗眼よ

り見れば、高位にのぼつた、大なる幸福を得たものと思ふであらう、翻つて考へて見るに、黒田故伯夫人が今日の如き地位に立つて居る所より推測せば、伯存命中に於ても、決して愉快なる家庭の人ではなかつたであらうと思ふ、實に其家庭は無價値なものであつたに違ひない、事實に於て、夫人を打擲したなどいふ事も珍らしくなかつたとの事である、これが其人格に重きを置いて嫁したのであれば、決してかゝる醱事は演じられないのである、品格を第二にして、位置又は財産に嫁すると、かゝる悲慘な目に逢はされる事が往々ある、故に女子は、先づ身の程を辨へて、其人物を撰んで、地位其他は分相應の家に嫁し、たとひ賤が伏屋でも、心の平和を得られる、和氣藹々たる家庭がつくられるとすれば、それが人生の最大幸福で、人類の望はそれで足つて居るのである、單に位置とか、名門とか、財産とかに着眼して嫁するといふ心事は甚だ卑むべきもので、支那の古き教には、婚を議するに財の有無を問ふを一大恥辱として居る、然るに現時の社會の狀態はそれに反對をして居るので、財のない男は男としての屑の如くせられて居る觀がある、果して斯の如くんば人類は實に果敢ないもので、人は財を得るに汲々とし、それが爲には不德をも不義をも辭せぬやうになり、すべて惡手段が行はれ、節操をも賣るやうになり、再緣はしたくなけれど、地位が得らるればそれでよし、といふ風に、一にも財産、二にも財産に赴くやうになるであらう如上の如きは、物質的文明の大缺點で、廿世紀の文明を、物質的と稱する如きもかゝる點にあるので、黒田家の禍の根柢も、煎じつむれば財の一字に歸するのである、財は決して賤むべきものではない、が財以上に人の道といふ物が存在して居る、孔子は不義にして富且つ貴きは我に於て浮雲の如し、といふて居る、場合によつて財を浮雲視する見識がなければならぬ、近來支那を輕蔑するの餘り、支那の道德をも安價に見るものもあるがよく利用すればこれほど價のあるものはない、丁汝

昌が日清戰爭に於て降參したことは、三歳の童子にまで嘲笑を買ひ、日露戰爭に於て、ステッセルの降服は、是亦三歳の童子にまで罵笑せられたのである等しく降服したのであるが、ステッセルの降服の仕方によつて、丁汝昌の品性の高まつたことは、其差實に雲泥である、それは東洋道德の價値で、我等折角東洋に存在して居るものは東洋道德を鼓吹して、社會の藥石たらしめねばならぬ、之を擯斥する如きは甚しき間違である、

私は儒教的趣味を有せる家庭に育ち、歐羅巴の書籍を見て、比較研究をしたのであるが、社交道德、國際道德といふ如きは、歐洲の長所であるが、個人道德、家庭道德といふ如きは、東洋の長所であつて殊に日本が世界の花と稱せらるゝ理由は、其處に在るのである、

故に公德は、西洋のゼントルマン、レデーによつて發揮せられ、父子兄弟に於ける個人道德は、東洋の道德より光を放つて居るのである、黑田家の紊れの如きは、東洋道德の地を拂ふ秋風で、この秋の風は黑田家を吹きまくるのみでなく、日本全國を吹き荒す木がらしとなるのである、かくて骨肉相食み、弱肉强食の弊が盛んになれば、社會の前途は實に危險で、寒心に堪へぬことである、この點に於て、大に社會を敎訓せねばならぬことゝ思ふ、

世界一の金持花嫁

獨逸エッセンに於けるクルップ銃砲工場の持主ベルタ、クルップ孃が此程羅馬法王廷駐在普國公使館附書記官グスタフ、フォン、ボーレン氏と婚約成りし由は過日の伯林電報に見えしが、孃は芳紀二十歳にして世界一の富有なる娘なり、孃の父フリードリッヒ、アルフレッド、クルップ氏は有名なるクルップ銃砲工場を創立したる人にして四年前に病死するや、其獨り子なる孃に遺すに二億五千萬圓乃至三億萬圓の財產を以てしたり、孃は其後同工場の主として二十萬の人口を有するエッセン市の盛衰を左右し、其工場に使用さるゝ五萬の職工の安危を掌中に握るの身となり『クルップ女王』なる綽名を受くるに至れり、富と勢力斯の如く、且つ其容姿亦美なれば、孃の婿とならんと希望して種々の手を盡したる者多かりしは當然にて、其候補者の總數は三百六十二人の多きに達したりとぞ、此中には親王十二人、公爵八人、伯爵五十八人、子爵十九人、男爵六十四人、內閣大臣三人、將軍十六人、全權大使四人、文學者十八人、畫家十七人、詩人十一人及び米國の大富豪二人ありしといふ、

此の如く多數の候補者中に孃の意中の人となりたるグスタフフォンボーレン氏は當年三十六歳にして久しく外交官の職に在りたる人なるが孃と結婚の後には其職を辭して銃砲工場管理の任に當るべしと

止を得ぬ事情

法學博士　岡村輝彦

今回黒田家に於て、あれだけの訴訟を起すといふは容易ならぬことで、丸山瀧子が伯爵母堂で居らるべき人が、自ら進んで去るといふ事情から、今回の事件が生れ出で、其實子の名によつて訴訟せられたのである、此事に就ては、親戚に榎本子爵、黒木大將の如きがあつて、猶且つ訴訟をせねばならぬといふは、實に止むを得ざるに出でたのである、

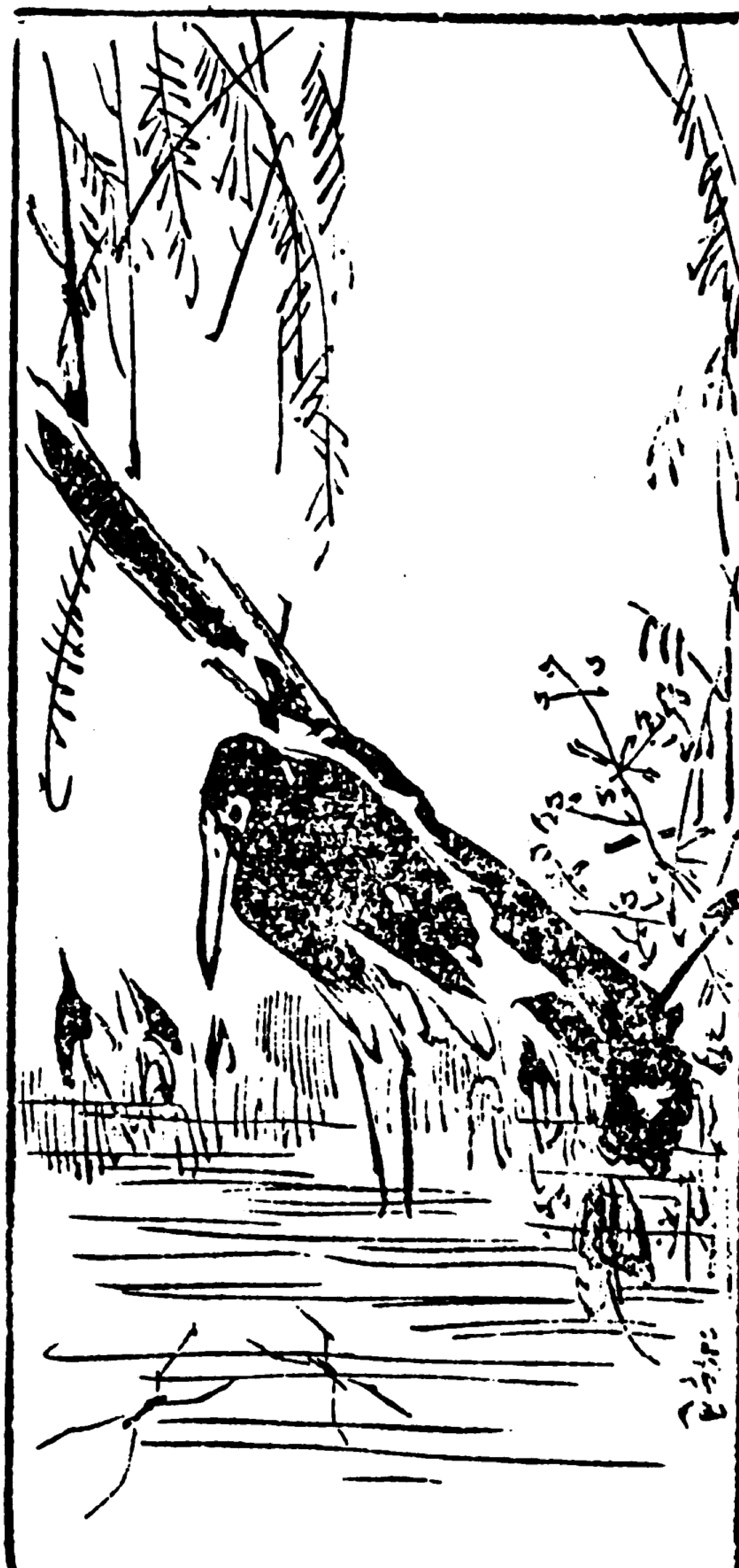
近頃新聞紙の上からは、調所男爵は評判のよい方にはなつて居らぬが、これは氣の毒で、同氏は故伯爵より信托をうけて、自分の財産に就て憂うる如く、黒田伯爵家の財産を整理して居るので、財産に就ては干渉もし、且つ其他の事に於ても、相當の理由があつて爲る事であるが、相當の理由はと云へば、故伯爵夫人の非行を擧げねばならぬ、さてそれが社會の何の爲にもなる事でなく、且つ辯護士の徳義として秘密は守らねばならぬ、故に其事實の眞相を述べる事は御免蒙りたいのである、既に其當時諸新聞から、私が比較的事實の眞相を知つて居るであらうといふので、續々つめ掛て來たが、悉く玄關で書生に斷らせたのである、併し女鑑は、人の非行を擧げて快とする態度を取つて居らぬ事を信ずるので、述べる事の出來ぬ次第にても述べる次第である、

子として親を訴へるといふことは、勿論誰しも好まぬ事で、該當事者と雖も、固より忍びざる所で、避ける限りは避けたるも、遂に一度は法廷に持出さんとしたるは、一家の爲によく〳〵止むを得ざる事情があつたので、全く特別の出來事と見ねばならぬ、

前述の止むを得ぬといふは、故伯夫人が節操に於けると、金錢に於ける二點で、如何にしても、黒田家をつぶさぬやうにする、それを未然に防ぐには、籍を除かねばならぬ、又幼兒取戻しに就ては、場所によつては買食を覺える、種々の惡風を習ふ、他日伯爵家の令孃として仕立てるには、この學齢に際して

相當の監督の下に教育せねばならぬ、即ち取戻しの必要が起つたのである、

また此事件は華族であるから、平民であるから、といふて騒ぎに甲乙をつけるには及ばぬ、黒田家の今回の仕方の善惡といふことは、見る人によつても違ふことで、遡つて結婚の成立より、身分の不釣合といふことを云へば。今の貴族社會には、故伯夫人の如きでない、素性の知れない令夫人が數へ切れぬほどである、もし道德上の尺度をもつて、それ等の家庭を量つたならば、到底問題にならないのが多い、今更黒田家の事を珍らしがるにも及ばぬ話である、



これは社會一般の罪で、どうしても社會を根本的に改善する方法を立てねばならぬ、先頃も矢島楫子が、廢妾の建議をするので私にも賛成なれば捺印をせよといふことであつた、私は妾の必要もなければ妾も持つても居らぬ、又蓄妾の道德に反いて居ることも知つて居る併し今の社會に於て、それが一片の建議で行はれるであらうか、さうせねばならぬ時機が來れば、自然に廢妾も出來る、それには順序がある、一足飛には、善惡はさて置いて、どうしても出來ぬ事情がある、よつて將來に向つて警戒し

徐々に社會の改善をして行かねばならぬ、私は蓄妾はせず、よき事とは思ふて居なくて、しかも實際上矢島氏の建議に不贊成の場合であてつも、矢島氏から私の道徳を量つて尺度は、甚心細いものであらうと思ふ、よつて出來得る方面より、徐々に社會を改善したいと思ふ、いかなる名說も、行はれぬことは無價値である、

孝を盡すの道

辯護士　齋藤二郎

過般の黑田家の訴訟は、よくない事をしたもので、子もわるければ、親もわるい、あれは丸山瀧子の方で相手にさへなれば、原告の不勝利といふことは、過般の判決例によつても明らかで、如何に淸仲伯が竹子を呼戻したいといふても、本人が嫌といふ事になれば、物件と違うて、人間を執行することは出來ぬのである、

一般教育の上から云へば、丸山瀧子としては、老いては子に從ふ、親としては忍ぶといふもせねばならぬ、併し淸仲伯の立場から云へば、飽くまでも孝道を盡さねばならぬ、

日本は忠孝を以て貴き國柄である、戰爭の勝つ所以もそこに在る、子として親を棄てるといふことは、恰も寶を追出す如きものである、日本國民としては何が寶かと云へば、父母である、故に兩親のうち一人缺けたならば、寶が半分減じた譯になる、その貴重なる寶を、自ら棄てるといふは解せぬ話で、もし自ら棄てるといふことでなく、左右からこれを棄てしむるといふ事になり、子は孝道を盡すことが出來ぬといふ事實があらば、人生これ以上の悲慘事はあるまい、

また最愛の妻が、己が死後に於て、己が恩を施せし人々によつて、己が家に止まる事の出來ぬといふのが事實であらば、これまた人生の大悲慘事で、殊に果敢なく感じられるのである、

黒田家に於ては此慘事が演せられて居るので、この慘事、即ち黒田伯母堂瀧子夫人が、丸山瀧子となつた、即ち分籍せられた手續はといへば、同家の第一の親戚なる、故伯の姉なる井上徹の妻は關係して居るであらうか、同族にて祖先を同うせる黒田清綱子は相談を受けたであらうか、否この親戚關係上第一位にある人は、更に關係して居らぬのみならず、相談さへも受けて居らぬ。

手續はいづれにしても、今日に於ては、清仲伯が不孝の子たるは免れぬことで、之を救ふの道は、寶を元の所へ持つて行く、即ち孝道を盡させる、それより外はない、然るに母が不身持であるとか、財産は何うするとか云はしむるのは、不孝を働かせる仕方で、眞の人間のすべき事ではない、濟度の出來ぬと稱する幾多の事は、それは事情で、道理ではない、人の道ではない、故に清仲伯は自ら進んで、寶を元の如く受取つて、子たるの道を盡すに力めねばならぬ、もし行蹟がわしくは、一室内に監督することも出來るであらう、財産に憂ひがあれば、鍵を預けぬやうにすればよからう、それには幾らも手段方法がある、それに百方苦心して親不孝の汚名を濺ぎ、不幸の地位に立てる親の老後を安からしむるやうせねばならぬ、伯家は實に寂寞たる家庭である、この時清仲伯の孝心によつて、親子相合し、本然の善にかへつて、相慈み、相愛する、人間の踏むべき本道を行くことになれば、これより美しき事はないのである、この間に立つては、誠意を以て、關係者も立たねばならぬ、徒らに我意の向ふ所に走せて、不孝の子たることに結局立至らしめたならば、如何であらう、勅語に億兆心を一にするとあるは、君には忠、親には孝の道より始まるので、不孝の子たることに左袒する人があらば、それは直に國にとつては、不忠の臣と云ふことが出來るのである、

清仲伯も、頓て妻帶せねばならぬ年齢に到達して居る、もし今のまゝにして、寶の捨て放しであれば、迎へた妻に對して、如何なる敎訓が與へられるか、



必ず圓滿に行くべきではなからう、從つて子孫も、愛といひ仁といひ、孝といふ、最上行爲の餘澤を受ける事は出來ないのである、

明治十三年十二月二十一日、故伯に妻にとて所望された當年の瀧子は、親の命令止むを得ず、涙を以て嫁したのである、されど其間には間もなく長女梅子を擧げ、伯は非常の喜びを以て、芳梅の二字を書せる扁額さへつくらせたとの事である、これが榎本子爵世嗣夫人で、次に清仲伯が生れたのである、それより伯の死に至る迄の長年月或は酒餘打擲されたることはあつたにしても、最愛の妻とせられ兎にも角にも夫の死する迄は、妻として全かつたには違ひない、この妻を故伯の死後追放するは、故伯に對して申譯のある道であらうか、現伯に對して申分のないやり方であらうか、

平素の謹愼

東京地方裁判所檢事　松本重敏

近時華族の訴訟事件が多くなつたので、世間では之を非難するものもあるやうであるが、華族だから平民だからと云うて、權利上の爭ひは、之は止むを得ぬことで、それを華族が訴訟をするなど丶云ふは、家名にも關はることだなど丶家令家扶等が、曖昧裡に葬らうとして、却つて救ふべからざる大事に立至ることがあるから、時によつては快刀亂麻を斷つ的の所決をせねばならぬ、即ち訴訟法によつて、事を明白にすることは必要である、故に法律上の爭ひもせねばならぬが、無闇に名を法律に借りて、事を起さうといふのは近時の弊で、これは甚だ惡いことである、

黒田伯爵家に於ける過般の幼女引渡事件は、法律上の爭ひとして、何の不思議もなく、丸山瀧子の之と爭はんとしたのも差支ない、

併し爭そはねばならぬに立至つたのは、甚だ慨歎すべきことで、如何なる理由があつたかは知らぬが、母子同棲が出來る家庭であつたならば、幼兒は取戻すも何もない、團欒の樂みを見ることが出來るのであるから、その源に遡つて、母子同棲の出來ぬやうになつた事を悲しまねばならぬ、

家庭上の都合は何うであつたか、過般の訴訟より、母子同棲の出來ぬ、平和の家庭をつくる事が出來ぬ即ち根底が毀れて居るのであるから、その根底から改めて行かねばならぬ、故に華族といふ社會の上流に立つ身分の人は、止むを得ねば法律上の爭ひをすることは不可でないが、平素に於て、其爭ひの種子を蒔かぬことに謹愼せねばならぬ、

此事件に就ては、自分は關係したことであるから、多少共眞相も知らぬのではないが、それは談る事を好まぬ、たゞ此事件は、表面より見ると、母子の間甚不和の如く見ゆるが、實際は母子の間に於ては、互に感情を害するやうな事はなく、これは普通の家であれば母子は疾くに、元の如く同棲するに立至つたことかもしれぬ、又初めから分籍するやうな事がなかつたかも知れぬ、その間の消息を觀來ると、實に異樣の感じが起るのである、

次にこの母子の離別たるや、もし母瀧子に非行ありとすれば、子は其非行を改むるを祈るべく、その非行の改まる時は、元の如く黑田伯家の母堂として迎え入れねばならぬは一度は我家より離れしめざることが止むを得ざるにしても當然の事である、然るに母としては、家の内外にあると、籍のいづれに在ると別狀はないが、一度分籍して丸山瀧子となれる今後に於ては、黑田家に再び其姓を法律上名乘ることの出來ぬやうになつたのは、恰も覆水の盆にかへらざるが如く實際母子の關係として、遂には同棲すべくつとめねばならぬことにして、同棲するに立至るも、母子同じ姓を名乘ることの出來ぬ如きは、甚だ不吉にして、歎かはしきことである、

▽以上五氏の談、文責記者にあり

誠實に働きて得たる廿萬圓

京橋區本材木町河岸二十一號地林藤七(六三)妻おえの(六九)と云へる老夫婦あり、四人の息子娘と倶に樂しき日を暮し、京橋日本橋兩區内の塵芥掃除受負を爲し、日々百名の人夫を使役し、可なり名も知られ、顔も賣りつゝあれど、四十餘年前の昔に溯れば、哀れ細き煙を立てし者にて、素と塵芥掃除の稼業は、祖先傳來繼承し來り、可成りの生計を營みしに、藤七の父が失敗より、維新以前離散し、十六歳の時兩親共死去して、藤七一人取遺されしも、遺産とては更に無く殊に小供の事なれば、親類商議の上、從姉に當る府下葛飾郡船森村岩田忠左衛門の娘 おえのとて六ツも歳嵩なるを妻と定め、萬事の世話を燒かかする事となしぬ、去るに藤七はおえのを嫌ひ、一刻も其傍に居ず、終日餓鬼大將となりて、遊び暮し、殆んど手の付け様なき無邪氣に、却っておえのゝ爲めに叱り窘めらるゝも珍しからざりしが、程なく其仲に子を儲けしも、藤七が腕白心は脱けず相變らず我兒を背負ふて犬喧嘩にケシ懸くる抔、稼業は更に顧みざれば、おえのは獨り物案じ、間がな隙がな夫藤七を諫め、且宥め、只管稼業氣を與さんことに勉め、斯して漸く藤七も仕事に身を入るゝに至れど、塵芥の株のみにては、當時生計困難なれば夫に勸め京橋鍛冶町九番地に小やかな燒芋屋の跡を借受け、一錢二錢の店賣を初め、爾來は敗けぬ氣のおえのは、一旦は嫁はれし我夫を細腕ながら物の見事に世間並の男に仕立揚げんものと、健氣なる氣を起し、夜の目も眠れず働き徹し、其間兒を育て、且つは夫を諭へ、爲事を身一つに擔ひての懸命には、流石の藤七も痛く感激し、遽かに心機一轉し、夫れよりは店はおえのに任せ、自らは荷車に甘藷を積み、市中を賣り廻り、夫婦共極めて律義に、唯信用大事と大抵ならぬ辛苦の末、遂に立派な甘藷問屋となり濟ませど、雇人を使ふ譯でもなく、唯々夫婦が腕の有らん限りに働きしにぞ、塵の如き零細の利益も、積りて山と爲り、殆んど二十萬圓の資産を成せりとは、眞に驚くに堪へたり、然るに其以前より傳來の遺業を廢棄せざらん爲め、東京市の塵芥受負を爲し、敢て利益ある事ならねど、今は活計に苦む譯ならねば、幾分市民衛生の爲にもと、數年前よりは全く甘藷問屋を廢止し、專ら塵芥掃除に務め、藤七は矍鑠の身を、自ら人夫監督に、おえのは古稀に近き老軀を、尚ほ豆々敷く家事整理に當り就中他所目にも感ぜらるゝは、苦辛當時の事を片時も忘れず、常に子女を戒めて、努にも奢侈の風に染ましめず、一家は總て綿服を纏ひ藤七首め其他の男子は恒に印半纏を着し、何彼に昔を忘れず、現に仕舞ひ置ける家寶としては、古飯櫃に古柳行李の二品にて、是は藤七夫婦が家を起す當時、唯一の家財なりといふ。



歸東の道すがら

男爵　高崎正風

米原
旅人はたれもつかれてうまい原
　夢の中にも過ぎにけるかな

醒ヶ井
うまやの名しらする聲に驚きて
　我がいねふりの夢もさめがゐ

長岡
この頃の日の長岡をたのみにて
　ひろたの早苗うゑわたすらん

柏原
一本もかしはゝ見えず柏はら
　かきの木のみぞ生ひしげりける

關ヶ原
たゝかひし昔のあとを關ヶ原
　車のまどに見つゝゆくかな

垂井
諸人のねかひたる井はみめぐみの
　波をたゝへし名にこそありけれ

大垣
大垣はさとの名にしてうちも外も
　へだてぬ世こそ樂しかりけれ

岐阜
よもぎふをきりはらはせていへ立てし
　うまやもいまはにぎはひにけり

◎汽車雜感(一)　よく停車場の昇降道路にジャリを敷いてあるのを(たとへば浦和、新宿、日暮里等)を見受くるが、汽車に乘る客は兎角往復を急ぐものなるに、ジャリ道のしかもトタン板などの天井のある下でいつまでも固まらぬのには困る、ましてよき下駄はいて居る人の迷惑は一通りでない、

青すだれ

侯爵夫人　鍋島榮子

夏簾

軒ごとにかけつらねたる青すだれ
　うごかぬひまもすゞしかりけり

夏枕

堪がたきあつきさかりのゐなかやは
　ひるねのまくらとりちらしたり

夏のころ

水の音も絶えず聞えてくさ枕
　むすぶもすゞし山かげのいほ

夏籬

やつれたる竹のまがきも見えぬまで
　青葉につゝむつたかづらかな

夏山

夏やまの杉の下みちくらけれど
　行く人絶えずあつさしのぎに

友

まづしきをめぐむわざにも嬉しきは
　おほくの友を得たるなりけり

内外人みなはらからとおもへども
　したしき友はすくなかりけり

夜梅雨

契りおきしあすのつどひやいかならん
　やまんともせぬ夜半のさみだれ

梅雨のふりやまぬかな板ひさし
　いたくも音の絶えぬ夜すがら

水亭消夏

小川直子

富士の根の雪さへ消ゆる此頃の暑さは、ゆほひかに廣く玉をみがける殿の内などだに堪難かめるを、ましていぶせき草の庵は、溢るゝ汗のやるかたなさに暑さ避くべき所求めばやと思ひなして、何某尼がり

尋ね行きぬ、此室は稍深う入りぬる山陰にかごかなれど、ひはた葺をかしうしなして、簀子すいがいの便りつき／＼しう、伊豫簾かけ渡して涼しげに住なされたり、尼も徒然わぶる折からなりとて、そゞやゞよろこびむかへつゝ木のめなどにて削り氷などこそなけれ、心のどかにとてもてなさるめり、三世因果のことわり何くれと語らるゝに、うちしめやかなるけはひいとたふとし、げに心静なれば身も亦涼とか聞きつるが此あま夏を暑きものとおほゆるさまにも見えず、いとなつかしげに氣高うこそありけれ、はた庭の面廣らかにて、すべておのづからなる山のたゞずまひ、いひしらず、彼方はこごしき岩がねそびえたち、あたりの老木とも、いと木深く青葉の梢茂りあひたれば、日かげうとくてをぐらきにそがひより落ち瀧つ岩に砕けて玉をちらし、その末は庭の此方に淸う流れ來ていとすゞし汀に生ふる夏草の水にひたりて流れ浮たちするなど、すべて心にしまぬはなくて、暑さはとみにいづちいにけむ心の濁さへあとなくなりぬればそゞろ寒き衣手のかくながら、住はてましうおもほゆれば、



瀧つ瀬に世のにごりさへ流しやりて
　うらやましくもすめる君かな

など云ひつゝかたり暮したりけり、

折にふれて

佐々木信綱

きらめきし一つの星も消えはてゝ
　我世は闇になりにけるかな

後の世に君と語らむ事あらば
　わがこの思ひ君に語らん

歸りきぬ我は歸りぬわがつまよ
　など一言のいらへだになき

一たびのとりかへされぬ過ちを
　悔いてなげきてすごすべき身か

たゞよへる夕の雲をあふぎみて
　何とはなしに物ぞかなしき

撫子に花さかせんとおのが身の
　春はすぐしゝ女教師の君

今にして思へばかなしかのをりに
　など眞ごゝろを洩らさゞりけん

棟木ともなるべき大木倒れふして
　くちしまゝなる谷の底かな

かにかくに昨日のみこそこひしけれ
　明日また今日を戀ひとすらん

一日々々せまるいのちよ今はたゞ
　死を待つ外に待つものぞなき

花もかれ光りも消えてやみの夜の
　かれ野に似たる我こゝろかな

世を去らん今のいまゝで君をのみ
　思ひしこゝろ誰か知るらん

人はよしいはゞいはなん人しれず
　身を責むる罪なき身ともかな

葬りの鐘の音たえてゆふぐれの
　墓場さびしきやま鳩のこゑ

病いえてあさな／＼の庭あるき
　日々の色そふ若葉すゞしき

◎汽車雜感（二）　汽車で客がよくタンツバ吐器を踏臺にして居るには閉口、自分はそれで重寶であるが、外の乘客は甚だ不便な譯である、公共心の薄い人の多いには困つたもの

胡蝶の日記（六）

白井千代梅

高さは九十三尋ありとぞ、あはれ二なき畫のたくみに、寫させて、見ぬ人の爲になど思ふも、猶筆及ぶまじうや、傳へきく廬山の瀧のさまにもおさ〳〵劣るまじうぞ思はる、飛流直下三千尺とか作れる、唐歌のさまに、宛然似たり、此瀧をしも、都近きにあらせましかは、布引龍門の瀧と等しく、歌枕とも成らまし物を、あまさがる鄙の邊りに埋もる丶ぞ口惜き、などいひて、いかで言の葉なくてはと、刀自のせめ給へば、

瀧つ瀬は、怪しきものか時ならで、あわに降りたる白雪の、崩れくるかも巖うつ、浪の響はなるかみの、轟くがごと吹風に、靡くすがたは深谷より騰る龍かと驚きて、猶し仰げば主しらぬ、布ぞ曝せるこき亂る、玉も散りきぬ山ずみの、なせる業かも天なるや、おと七夕の逢瀬かも、思ひ惑ひてたゝゆべき、言の葉をなみ兎に角に、いふ術しらに家人の、いかにと問はゞ飽かざりき、あかずとのみやたゞに答へむ、

山川のへだてざりせばしらにきて
　みるべきものをこれの瀧つせ

時うつるまで見れど、猶あく世なき心地して、飛泉見つ丶我は歸らじと、花山の僧正のごと言まほしけれど、日も暮ぬべしと從者の催せば何がしの矛もたぬ身は、術なくてつれ立ぬ、此宮居の別當のもとに唐大和の言の葉もて、瀧をたゝへし歌ども數多ありと聞つれば、人々ゆかしがりて立寄て乞ふ、やがて出しつるを傍よりみるに、眼とまるもなき中に、

瀧のもとに立よりみれば時ならで
　みねゆなだる丶雪かとぞ思ふ　小囿

瀧つせのなかばは雲にかくろひて
　その水かみのかぎりしられず　魯道

これのみぞ人々愛る、夕日さす物から、山路いと涼しうなりて、蜩の鳴くなど哀なり、關のなつかしけ

に咲たるを、斯る深山には脱かけし主もわらじなど言て

手をるとも誰とがむべき藤ばかま
わかぬ心にいざまかせてむ

とて折つゝゆく、新出の里過て市條といふに舎りもとめんとて急ぐに、日はくれ果てぬ、松もがなともとむれど、里はなれぬれば便なくて、細き野邊を辿りゆくに、晝はさばかり待たれつる風も、嬉しとおぼえず、水の面もいみじう、凄じき心ちして、

山河のおとはひるにもかはらじを
など身にしみてわびしかるらむ

草村の虫、聲みだれて鳴きかふに、螢三つ四つ光りかすかに、田の面飛びちがふも哀なり、秋風吹くとなどいひつゝ辿るに、近き森に梟のからびたる聲きこゆるにぞ、況て凄う心細し、とかくしつゝ、やゝ心ざす里にたどりつきぬ、さりぬべき家々にては、皆靜まりぬれば術なうて、あやしき家に宿りをもとむ、いと所せきが、壁など所々落て、柱も曲みぬ、今宵ぞ草の枕といはましなど、語らひ居るに、主にやあらむ、五十歳あまりの、形容ふつゝかなる男の出來て、額きつゝ、己れは何の誰てふ者にてなど、さもことごとしう名對面し、聲作りて頭もたげたるに、眼のいみじう光るにぞ、怪しとよくみれば、眼鏡といふ物をかけたるに、燈火の影のさしたるなりけり、聲のむくつけき、眼の圓う光るなど、さながら過つる森の鳥の、身をかへて化來しかと思へば、ふきも出しぬべう成りぬ、念じて居ぞいと苦し、寝みぬれど、筧の音のさやさやと、枕頭にひゞきて、頗にいもねられぬに、瀧のさまつと眼にそひて、俤身をさらず、三日よろづいぶせきに侘て、皆とく起出つゝ、庭の面を見わたすに、よし有りげに植こみたる木立に、湖霧わたりて、岩などもなべてならぬを、所々に据て、いと清らなるやり水に、柴橋うち渡せるさま、故とならず見えて、あるじと家居のつきなきには、似氣なふぞ覺ゆ、今日は宿世山を後ろ

にしつゝ行に、遙かに山々の連り見ゆる中に、形もおかしう高き山より雲の立ちまふは、たゞ煙かと見ゆるぞ、淺間が嶽も斯やなど覺えて、

しなのぢにけふや來にけん打向ふ
山のたかねにけふりたつ見ゆ

問へば湯の澤が嶽なりとぞ、やゝゆけば石の御坂いと高くて御社あり、いかなる御神にやと問へは、矢流川廣幡の宮にて在すといふ、さはとて詣でぬ、神垣の松いと年經り、日陰のかつらおひかゝりぬべし爰ぞ古へ戰の塲にて、右の山は館址なりとぞ

朝顔

鳥山啓

朝顔の花は薄花田の色なるがもとなるべし、とおもはるゝを、今は種々の色にうつりかはりぬ、かう千種にうつりかはる中にも、黄なる花さくものなんなき、すべて草木の花の色は黄なると、青きとのけじめありて、黄なる花咲くことなし、菊は黄なるがもとなれば、紫にまでは移りかはれど、またく青きはなし、朝顔は青きが本ついろなればにや、薄きかば色にまではうつりかはれど、またく黄なるはなし、花こそちらめ、根さへかれめやと、昔人のうたひけむやうに、菊は花しぼみ葉かれても、莖さへ根さへは枯れはてゞ、くるとしはその莖その根より生ひ出づるものにて、一たび種まきて、よき花を得たらんには、幾年も生ひつゞくのみならず、其の枝その葉をさへ地にさしておひつかしむべし、朝顔はひとゝせごとに、蔓さへ根さへ枯れ失する物なれば、ひと度種まきて、世に見えぬ妙なる花をさかせても、唯一年のみにて、くる年その種をとりて蒔くとも、必ずもとのやうなる花のさくとしも定めがたし、さるは朝顔のみならず、すべての花はひとつたがひの花のをしべの粉ならば、こと花のめしべにつきても實を結ぶものなれば、その種をとりて蒔くとも、もとの花のやうにはならぬなりけり、されば珍らしき花

さかせたる時は、こと花の粉のちり來ぬやうに、鉢に玻璃などのおほひをしてだにおかば、同じ花の粉のみ、同じ花のめしべにかゝりて實を結び、もとの花にかはらぬ種をとり得べし、朝顔に珍らしき花さかせて誇る人々に、しかして試み玉へとをしへつれど、花のしべにめをわることをだに辨へぬげなれば果して我がいふことにしたがひてましや

朝顔の蔓はかならず右に向ひて物に纏ふものなり、唯朝顔のみならずすべての蔓の中には右に向ひて物に纏ふもの多く、左に向ひて纏ふは少し、麥酒の苦き味つくる唐花さう、同じたぐひなるかなむぐらなとぞ、左にはめぐるなる、右に向ひてめぐるたぐひは其の蔓の右のかたへに伸る事左のかたへより少なければ、おのづから左に向ひて旋るなりけり、右に向ひて物に纏ふものは、蔓の伸るやう左に旋るものとうらうへなるなりけり、朝顔は蔓の左に向ひてめぐるに引きかへて、花の蕾は必ず左に向ひて旋るなり、某の博士の朝顔の寫し繪を見て蔓の物に纏へるさま、はた花のつぼみの旋れるさまの、實の物とはうらうへなるを咎めたりとかや、繪師はさる事までは心にかけず、筆の力に任せて、其の花の今咲かんとするけはひ、其の蔓のおひのぼる勢を寫し出だせるを見る人はたさる事までは、心づかで實の花にもまさるありさまかなとぞほめのゝしるを、博士の如き木草の學びに心つくしていたづかるゝ人は猶ゆるしなうかたぶきいはるゝなりけり。

福原落

簪花女史

折しも月はやまの端に　しもの弓はり影うすし
滿てば缺行く世の習ひ　榮華の末は斯こそあれ
荻の葉けむるうら風に　片しく袖をしぼりつゝ
ふけゆく秋の哀れさは　しのびがたしよ旅の空
なれしみやこを一片の　烟のすゑにかへりみて
八重の潮路に日を暮し　あるは磯邊の浪まくら

遠きを別つけはしきを　しのぎて茲に津の國の
都のあきを來て見れば　淺茅が原とぞ成にける
治承四ねんのかみ無月　花のみやこを振捨て丶
かせ福原にうつりこし　むかしおもふも涙なり
春は花見のをかの御所　秋は月見のはまの御所
雪見の御所や萱の御所　あるは二階のさじき殿
三年が程にあれはて丶　今はむかしの影もなく
をしのかはらに松生て　玉いしだ丶み苔ぞむす
まれに殘れる家やかた　秋くさしげく門をとぢ
軒かたむきて垣くづれ　簾は斷えてねやあらみ
さし入るものは月の影　松風のみぞかよふめる
須磨より明石の浦通ひ　淡路の瀬戸を打わたり
江じまが磯に月を見し　むかしの秋の樣もなし
あはれ果敢なく一門の　榮花も茲につきはてつ
あくれば又も火を掛て　見かへる空に霧ふかし
都をいでしときばかり　悲しからねどこ丶も亦
かりのやどりと云乍ら　別れとなれば名殘をし
海士のやく藻　立烟り　尾上の鹿のあけのこゑ
なぎさに寄するなみの音　袖にやどかる月のかげ
千草に集くきり〴〵す　きり間を渡る雁が音も
總て目に見え耳にふる　ものは涙のたねとなる
きのふは東のせきの戸に　くつは駢べて十萬騎
今日西海の浪のうへに　ともづなときて七千人

三十一文字

麻生春子

百合

くれゆけば水鷄おとづる里川に　さゆりの花のいろうつくしき

夕顔

青やかにはひか丶りたる夕顔の　よそめすゞしき花のいろかな

蟬

夕立の露ふきはらふこずゑより　涼しくおつる蟬のこゑかな



住居に就て

醫學博士　高木兼寛

日本人の住居は我國民の下半身の不完全を來したる一の大なる原因である、何故かと云ふに、我國の家の構造は誰も知る如く、床を張り、疊を敷き、其上に膝を屈して坐るといふ風になつて居る、それが爲に下肢の發育を大に妨げられて居る、吾人身體の各部に滋養分を送る順序は、始め食物を口より取り、胃と腸とに於て消化し、之を血中に吸收して、身體の各部に送るのである、其行路は、血管即ち動脈に由つて身體の各部に營養品を供給し、歸路は毛細管に始まり、靜脈を經て途中身體中の不用有害なる不潔物を吸收して心臟に歸り、此處より肺臟に往き、新鮮なる血液となり、復た身體各部に循環するのである、故に此血管を壓迫すれば、其供給を受けて居る部分の營養に不足を生ずるは當然の事である、處で外國人の坐つた時には、股も膝も直角に屈しても、少しも血液の循環に障碍をしないやうになつて居るけれども、日本人の坐り方は、體を屈めて直角どころか鋭角も甚しき鋭角になつて居る、一體血管と云ふものは丸い管である、然るに斯樣に股膝で壓迫すれば、扁平になり閉塞する、其上に股と脛との骨によつて脈管を堅く押へて居る故に、血液の循環は甚しく障碍せらるゝのである、即ち永く坐つて足の病むのは斯樣な狀態に原因するのである、長く坐つて居る時には足の痛みを覺へ、終には血液が充分に通はぬ所より、殆んど覺えなくなるのである、然るに之を生れた時からして、十年なり二十年なり、朝となく晝となく繼續した結果は、營養が不充分であるから、下肢が充分に伸びないで、瘦せ衰

へた小さき足か出來る、それ故足を充分に好く伸さうとするには、どうしても直角位に坐るやうな位置を取り得るやうな住居の構造を改めなければ、足を充分に發育することは出來ぬ、其證據は一々擧ぐるまでもなく、上半身と下半身の丈を量つて見れば直ぐに解る事である、故に明治の少年は皆丈が高くなつて居る、是れ古人に比較すると、今の人は足が充分に伸びて居るからである、古も今も家の構造は同じであるに、下肢が何の理由あつて、古より伸びたかと云ふに、家の構造は同じでも、生活の状態が大に違つて來て、家に居る時だけ坐つても、學校に入れば幼稚園より始め、小學中學大學に至るまで悉く腰掛て居る、然るに古の人はまるで腰をかけると云ふことがなかつたのであるから下半身が充分に發育して居ないのみならず、足が眞直に伸びて居ないものが多い、其處に往つては明治の教育を受けたものはさうでない、試に中學生徒の行く所を見れば、如何に下肢が眞直に延びて居るかゞ解る、これは學校に入れば悉く腰を掛けて居る、然るに古の人はまるで腰を掛けるなど丶云ふことはないのであるから下半身が充分に發育して居ないのみならず、足が眞直に伸びて居ないものが多い、其處へ往つて



は今の學生は、下肢が眞直に伸びて居る、これは學校で坐ることを廢めて、腰を掛けるやうになつた爲に、下半身の血液循環を好くした結果である、若しも昔の如く坐らして置いたならば、今日でも下肢の短い、且つ曲つた人間となるのである、是等は日本帝國の敎育の方針が定まつて疊を廢して椅子に腰掛けるやうになつた賜といはねばならぬ、是が日本人民長壽の策であるといはねばならぬ、併ながらまだ〳〵中流以上の奥樣などになると、眞に可愛想なと云ふほど足が小さい、どうか爾ういふことのないやうに早くしたい、斯くすれば人の丈も高くなつて下肢も完全に發達することが出來るのである、

私は日本國が今日の如く貧乏であるのは、日本人は身體が弱くて働かずに居るものが多いから斯の如く貧乏をして居るのか、又は働くことは働くけれども、始末が惡いから貧乏をして居るのか何れであるといふことを考へた、固より身體が弱くて働きが少い爲に貧乏するのは當然で、其外に日本國の人民の貧乏をして居る大部分は始末が惡い、即ち經濟といふことを知らず、爲に今日の如く貧乏をして居るのであるといふことを斷言して宜いと思ふ、其貧乏を來す處の不經濟の原因は多々あるけれど、就中住居が最も貧乏を來す原因である、其譯は何かと云ふに疊、疊位金の費へるものはない、

今疊八疊を敷く一間を拵へるに就て、戸襖壁障子が出來た後に、中の一間を拵へるには、凡そ幾許の費用を要するかと云ふに、先づ松の六分板で床を張るのが四圓廿九錢、疊一疊の價が最下等一圓三十七錢最上等四圓、併ながらソンな上等の疊を日本人が悉く敷くとは思はれぬから、先づ平均して貳圓と定めて此八疊を常に奇麗に保つて往くには、年に一度は必ず前の古いのを取外して新しい表を附けなければならぬ、これに手間賃と縁の代、裏返し職工に出す茶菓等を合せて計算すれば、疊一枚につき一圓、即ち八疊で八圓を要することになる、今其金に假に利

息を付して見れば、始めての年には二十圓と廿九錢次の年から一割即ち二圓二錢の利息を付し、ソレに年々八圓といふ金を積算すると、日本の人民が四十年生きると見て、人一人に疊二疊と定めて、生れてから死ぬるまでに十一圓六十錢を消費することになる、然るに此疊を廢めて、一寸の板割の上等を以て八疊を拵へるには、十一圓貳十錢、机は一寸以上の板にし、脚も充分堅固に拵へ、椅子も丈夫に拵へて腰掛ける處は、鐵道の停車場などに在るものゝやうに、木で繰り、腰掛けた時に心持のよいやうな形狀にして、八疊に四人用の机と腰掛を拵へれば廉上り(十二圓二十錢)にて出來る、日本人は西洋風とさへいへば一概にペルシャの麗はしく高價なる絨氈を敷き詰め、椅子も緞子錦襴の布を以て張り、テーブル机も窓掛も立派なものでなければならぬやうに考へるものもあるが、西洋一般の住所は、決してさういふ譯ではない、彼處でも上流は別であるが、先づ中流以下の處では、大抵は板の間で、古い板であれば古いテーブル、古い椅子が置いてあつて、決して直ぐに破れるやうな纖弱なものではなく、何時の代に出來たものか解らぬやうな古い、大方二代も三代も持續けて遣つて居るのであらうと思はれるやうな古いものを遣つて居る、椅子などゝいふものは、堅固にさへ、拵へて置けば、一度拵へて置けば一代は必ず持つそこで、又之を勘定すれば、四十年生活するとゞれだけ、金が費へるかと云ふに、一坪に一人、八疊に四人生活をして、四十年住んで二百三十圓四十貳錢貳厘、これを日本風の住居に比べると大なる相違である、

其外に疊に遣る藺を田に植ゑるにしても、一反歩につき六圓内外の苗を買つて植え付け之に要する肥料は、一反に付大抵、四十圓乃至五十圓である、而して藺が成長すれば、田植前に苅取つて乾し、其藺を三等に分け、上等は花蓙として外國へ輸出し、二三等を以て備後などの表を織る、それには糸も要る其他種々の手間を經て、愈々疊表を拵へ上げるま

でには一枚五六十錢の費用がかゝり、人の手間から云ふと、苗を植ゑ付け、苅取り、之を乾かして織り上げる迄の手間は容易なものではない、實に一人で貳圓、五千萬人で壹億圓の高額になる、之に代ふるに他のものを造作すれば倍額の利を得るのである、今後に日本人が百年の壽を保つとして、一方は十萬圓内外、一方は四十一萬圓餘もかゝるといふことであつたならば、少しく慣れるまでは不自由でも板張椅子テーブルで、生活をする覺悟をしたら何うか、取も直さず、日本人は世界に無くとも濟むものを殊更に用ひて、多額の損失を知らず識らずの間になしつゝ往くのである、

斯く申せば高木はあんな事を云ふが、寒い時分に椅子テーブルばかりでどうするかと云ふ樣な排斥運動が起るかも知れぬから外國のやうな住居の有樣にいたせば、窓掛椅子掛暖爐等に金が要るやうであるが年々歳々八圓宛疊に對すのも、決して廉いことではない、又日本の家の建方を堅固にし、戸障子襖疊の間から風の這入らぬやうにすれば、暖爐がなくても左ほど寒いことはないのみならず、殊に日本では家に在るときも、戸外に出づる時も殆んど同じ衣服を纒うて居るも、西洋では決してさやうな事はない、日本でも家の建方を改めると、確に綿入一枚は違ふ然かする時は、衣服其他より出づる經濟の餘裕は實に非常なもので、決して疊を廢した爲に不經濟を來すといふやうなことはなく、又夫が爲に寒いといふやうなことはない、斯の如き次第であるから疊は何うしても廢する策を執らねばならぬ、

加之亞米利加などでは、一般に日本の花蓙が敷物として用ひらるゝやうになつた、絨氈は量目が重くて掃除がむづかしいから、今では爾ういふ手數のかゝるものは漸く排斥せらるゝことゝなりたるは、日本の大なる幸福で、爲に日本の花蓙が盛んに賣行くのである、これなれば取拂ひ掃除をすることも容易く出來るので、將來我國重要の輸出品となるのであるから、疊の製造を減じて花蓙を造れば、少からぬ利

を得ることが出來る、又日本の疊は衛生の上から云うても、病毒の巣窟である、何故なれば疊の目其間には、一年中塵埃が這入つて居る、而して此塵埃の中には黴菌が澤山ある、肺病、實扶垤里、癩病、窒扶斯などの黴菌が疊の目から潜り込んで床の上に充滿して居る、斯様な危險至極の疊を用ゐるよりは宜しく之を廢して板にする方にせねばならぬ、板の間であれば、假令芥物が這入つても直くに掃き淨められるので、啻に經濟の點のみならず、衛生の上から見ても疊は速かに廢して然るべきものと思ふ、

尚終りに臨んで坐居の不利益なることを今一つ申せば、人が運動をするには、物質的の費がある、それは何であるかと申せば、即ち起つたり坐つたりすることである、私のやうな二十貫目もある大男が、椅子に腰を掛けやうとするには、壹尺内外卸せば宜い、又起立する時は、壹尺内外擡ればよい、それ故坐するにも起つにも、身體を動かす勞は誠に少い處で日本風に起坐するには、尚一尺五寸位上げ卸しをしなければならない、此勞より生ずる損失といふものは實に非常なもので、金高に積つたら、年々莫大な損失であらうと思ふ、斯の如く理學的物質消費の思想が發達して、前に述べたやうな事に氣が付くやうにならなければ、日本の教育が届いたといふことは言へない、四千餘萬の人が、日々幾度となく十幾貫目といふ身體を上げ卸しすることは、若しその身體を上げる一方であつたら、日の中には何十尺、或は何百尺の高さに上るのである、身體以外のもので毎日これだけ上げることであつたら非常に疲れを感ずることであらう、

斯様なる點に就て、我は暗く、彼は明るいといふ處から、生活上の經濟も我に優り、其働きも敏く、從つて國力も強大に、從つて軍事に就ても、軍艦の製造も充分に出來、又外交にしても外交官は多くの金を費して充分に運動することが出來る、之に反して理學上の智識に暗い時は、常に貧乏といふ神が附纏うて、終始貧乏に苦んで居らなければならぬ、こ

れか煎じつめれば、體格の强壯長壽に歸するのである、人は强壯にして力が强く、永く働けば吾人の幸福の基となるのであるから、今日に於て我國に尤も必要なるは體格を偉大にして、强壯ならしめ、之に長壽を授けるのであつて、これを爲さんとするには前述の如く住居にも大に注意せねばならぬのである。

病人と菜果

醫學士　久保杏林

野菜類の中で病人が食べて營養に成るものは、澱粉を含んで居るものであります、例へば、甘藷、馬鈴藷、芋青、九面芋百合の類であります、蓮根や大根人參などは水分ばかりおほくて營養になる澱粉質は少ないものであるから、餘り病人には益がない、其他筋張つて居る所の牛蒡、芋莖、獨活のやうなものはよろしくありませぬ、日本では昔から干瓢を病人に食べさせる習慣がありますが、あれは御承知の通り、靑瓢の外側の皮を剝ぎ去り、白い肉のところを薄く切つて乾固めたものでありますから、餘り消化の宜しいものではありますまいから、病人には食べさせない方が宜しからうと思ひます、

海草類の中では、昆布、海帶のやうなものは、消化が惡るいから病人にはいけませぬが、淺草海苔は、一寸風味のよいところから、食物が美味しく食べられるといふやうなこともありますから、少しは食べさせても差支は無からふと思ふ、

果物は、日本では今まで餘り食習つて居りませぬがあれは身體の益に成るものでありますから、平日成り丈け食馴れて居る方が宜しい、殊に通じの遠い病人などには最も宜しいので御座います、尤も腸胃の惡るい病人は果物を食べると屹度下痢を起しますから、而う云ふ人にはいけませぬ、夫れから果物を食べる時分には、皮を剝ぎ取ること、種子を去ることは必要で御座います、蓬菓の樣な極く小さな種

は丸呑みにしても害は無いと申して居りますが、病人には出來得る限り、而う云ふものは呑ませない方が宜しう御座います、

病人の食物に味を付けますには、其病氣に依つて種々調味の仕方はありますが、先づ何れの病人にも宜しくないのは餘り強い酢を使つた調理品であります、夫れから甘い物は、蜜飴の類が宜しう御座います、尤も此蜜と申すのは砂糖蜜のことでは無く、蜂蜜を申すのであつて、此品は、至極上品な甘味を持つて居るもので、殊に消化も宜しう御座いますから、病人に食べさせるには最もよい品で御座います、又水飴も煮物に混ぜると砂糖の代用をいたし、又薬にも成りますものですから至極宜しい調味品であります、

香氣のあるものや辛いものは、何の病人にも餘り宜しくありません、併し、どうしても食物が不味くて食べられないと云ふやうな場合には其香氣で悪るい臭氣を消して食べさせる場合もあります、

乳の話

農學士　牧　忍

其七　人乳に就て

人乳に就ては今日に至る迄却て充分なる研究の結果に乏しいのです、其平均成分並に特殊の性質等に就ては未だ不明の點が澤山あります、

一般に述ぶれば人乳は「アルカリ」反應が強くつて脂肪は牛乳の脂肪と同物なるか異物なるか未詳であります、併し乾酪素は牛乳の中のものと余程異つた特性がありまして、其分量は著しく少いのです、人乳の乾酪素は牛乳の乾酪素に比すれば其凝固體の面積が大なる消化の易いものです、それで人體内にて消化するには人乳は最適當したものです、

其他人乳が牛乳と異る點は乳汁蛋白質の多量にあること乳糖の含量著しく多きことです、人乳にて下痢杯起すことはないけれど、牛乳では壯年の人と雖も一時多量を飲めば、下痢を起すことが往々ありま

家庭に於て心得置きてよきいろ〳〵

飯の焚方

日本の人間の生命の種とも云ふべき米の飯は、開闢以來の食料なれば、其炊き方の如きも日に月に進歩して、經驗を重ねた上の事とて、今日一般に行はるゝ炊き方が、最も實際に適したる事は云ふ迄もなき事ながら、米の成分を分析して澱粉質が幾何位あるとか、蛋白質がどれ位あるとか、脂肪質がどれ位あるとか云ふ事を知り始めたるは、尚新しき事なれば、單に味が甘くて出來工合が宜いと云ふのみに止まらず、身體の養ひ度合や、衛生の上より研究する時は、從來よりは一層完全したる焚き方のなしとも限らざるなり、此點に就いては目下胃腸病院の賄ひを掌どれる長與炊事場の炊き方が最も進歩したるものと思はれたれば同所に就きて實地に調査したるに、元來此炊事場は病院の中でも特に胃や腸の病氣に關係したる患者に食べさすべき飯を炊く所なれば、米の如きも吟味に吟味を加へて一等米を用ひ居れるが、先づ

△米の磨ぎ方は如何かと云ふに、從來の磨ぎ方は永く水の中に浸して、幾回も磨いでは洗ひ、洗ひては又磨ぐと云ふ風なれど幾ら磨ぎたりとて黒き米が白くなるものにはあらず、餘りに永く水に漬けて度々洗ふ時は細かく碎くるのみにて肝心の脂肪が出て了ふ故、却つて甘味も少くなる道理なりとの考へより、此炊事場にては、たゞ米に附着きたる糠と塵さへ除れなば、夫れにて十分なりと云ふ程度に水にて洗ひ、洗上げたる米は正午の分ならば午前九時頃に笊に揚げ、炊く時までには全く水氣のなくなるやうに乾かし置くなり

△竈の構造は此處にては二坪ばかりの煉化造りにて釜や鍋が六つかゝる丈の構造に出來居れど、これは要するに普通の改良竈と同様の構造なれば、詳しく説明する迄もなし、薪の如きも石炭よりは薪材の方が幾らか優れるやうなれど之も經濟上の都合にて何れにても宜し、釜は普通に用ひらるゝものにてもよけれど、ハソリと稱する平釜の方が炊き上げたる出來工合が遙に優れり只茲に最も他と異りたるは

△釜の蓋の構造にて從來用ひ來れるは、大抵釜の口を蔽ふて、中厚く凹みあるものを宜しとすれど、此處にては鍋の蓋と同じく釜の中へ落ちるやうに出來居りて、米が煮えたちたる時噴き出す粘汁が釜より外へ溢れ出ぬ様蓋と釜との間に杓子を挾みて間隙を作るなり、一般の竈婢の飯の焚き加減は、粘液の噴き出す時分を適度として、惜氣もなく之を溢して顧みぬと云ふ風なれど、この粘汁こそ米の正味とも云ふべきものにて之を溢して了ひたる時の飯は宛然肉汁の粕の如きものなりと云へば、此點は大に注意すべし

△水加減は、七升の米に水一斗乃至一斗一升の割合なるが、初めは水ばかりにて之が

沸騰ちて、湯となりたる時に米を入れ、火はいちらぬやうにし、幾度も蓋を取りては米の面に高低の出來ぬやうに、お玉杓子で平にし一時間許りも焚きて、釜の中の湯が米と平均するまでに減りたる程度を見はからひて火を引き、竈の口を閉ぢて蒸らす時は軟らかにて、而もベタベタせぬ炊加減のよき飯が出來るなり、

家庭と子供

十數年來兒童教育に經驗ある某教育家の兒童教育談の一二片を記さんに、此頃は家庭衛生が、非常に八釜敷なつたに拘らず、割合に家庭の兒童教育が進歩せぬ、先づ此頃のことで云ふと

▽雨中と土捏ね　小兒の天地は戸外であるが、雨中や酷暑などには、此の天地が少しも無くなつて了ふ、勢ひ戸内に閉ぢ籠つて其活氣を洩さうとするのから、平生に比べて遊戯の亂暴なのは、怪むに足らぬが甚しい危害がない限りは、先づ大目に見て置くべきである、然るに關らず、狹い家或は子供に不注意な父兄などは、兎角騒々しいので、無暗に叱る、或は食物で遊戯さするなどは、よく有勝のことであるが、頗る無理な話であらう、又小兒の土捏ねや泥いぢりは、良く父母が酷しく止めるものであるが、夫れは大抵着物を汚すからと云ふ原因から來るらしい、勿論雨の降る時に、傘も指さず或は濡した着物を長く着て居たりするは、極めて惡い、又其外にも濁水や、汚水を弄ることは弱い子供に腸を冷さしたりすることもあるからだが、左様でない限り止めぬが宜しい、總べて之れ等のことは子供の模倣心と、好奇心を刺激して、建築工藝の智識を與へるもので、殊に土捏ねなどは、此點に於て殆んど無害有益と云つて宜しいものであるから、已に高等師範附屬の幼稚園などでは、態々尾張の瀬戸から、陶土を取寄せて、園生に與へ、色々な道具を拵へさして居る、尤も之は少し贅澤すぎるが、兎に角小供の土弄りや、砂弄りは決して止めるべきものではなく、水いぢりも亦た或點までは許した方が宜い

▽深呼吸　凡て子供の戸内に居る時には、雜誌書籍などを見するもよいが、殊に實地的科學の智識を養ふべき研究の時である、夫れから父母は時々運動の代りに、深呼吸を子供にさすことを忘れてはならぬ

△朝顏栽培　夏は健康の許す限り、朝起きをさするがよい、單に新鮮な朝の空氣を吸ふ許りでなく、早起きの習慣を付けさする爲である、次に樹を植ゆることを敎へて花の美を樂しまする と共に、農業に興味を覺さするが何よりの事である、其の目的から兩方を兼て居るは、此頃では先づ朝顏の培養であらう、咲いた花は標本として、紙に貼り付けさせ、花の成因を敎へると共に、少年時代の紀念にするなども興味があらう

△叱る事と嚇す事　多年の經驗で、一番に困る子供は悲觀的の子供である、父母が無暗に叱り付けて怯けさせる爲、遂には心が猜んだり、何事にも匿し抔する、一體子供體何處の家庭でも、兎角父母の機嫌に從つを取扱ふ風があつて、父母の心が面白くない、無暗に叱る抔、東洋的の教育は、子供の天眞の發揮を妨ぐる風がある故教育者は最も此點に注意して矯正する必要がある

す、
小供が母乳の不足を感ずることは往々あることでして特に初産の婦人に多いのです斯る場合には必ず牛乳を以て其不足を補はんければなりません、然るに純粋の牛乳のみで其まゝ小供へ與ふれば蛋白質の量が多過ぎて乳糖の量が少きに失します、即ち其養分の割合の適當でない事から、完全なる營養をなすことが出來ないことが往々あります、故に牛乳にて小供を養ふ時には一方にては牛乳一合に水一合を加へて蛋白質の含量を少くし他方にては牛乳一合に乳糖一勺（普通の角砂糖二個を加へても宜し）を加へて糖分の含量を増して可成母乳の性質に似る様に心掛ることが肝要です、其上殺菌牛乳の乾酪素は其生乳の乾酪素と異つて其凝固の有様が人乳の乾酪素凝固の有様に類して居ますから殺菌牛乳は生乳より消化し易いのです、
人乳の灰分を他の乳類に比すれば寧ろ少い方で特に燐酸石灰の割合が少いのです、此れを牛乳に比すれば僅に四分の一に過ぎない位です、故に殺菌牛乳に幼兒を哺育しますれば灰分の點より云へば母乳より大に優つて居ます、實際醫師の統計によりますれば此乳にて育てたる小供は軟骨病に罹ることが少いと云ふ話です。

生活の目的

塚本はま子

人の生活上尤も大切なる事は何で御座いませう、自己及び家族の身體を健やかにし、人間の人間たる天職を完うすることの出來るやうにしますのが即ち生活の目的であります、そして社會或は國家に害を流し、迷惑をかけぬやうにし、尚進んで國家の幸福を増進し、一歩々々に國力の程度を高めると云ふ事がなければ、人間が此世に生存するの必要はなくなるのであります、
尤も宗教的とか、哲學的に說けば、まだ他の方法も

ありませうが、私のは一家の經濟上より云ふのですから、或は社會の一部分に限るのかも知れません、然し世間を見ますと、我家の健康衞生には、一向頓着なく、世俗にならひて、世俗のなすがまに〱生活するが、過半數であるやうに見受けます、

例へば玆に訪問する人があると假定しまして其家の主人、主婦が特に意を用ゐ、心を碎きて經營する所は何處でせうか、即ち座敷、玄關、應接室、書齋であります、これは家族の生活、健康に何の關係あるか實に疑はしいのであります、しかし一般の家庭は皆左樣であります、これは己れの爲めに生活するのか、他人の爲に生活するのか、一向譯がわからぬのです、これでは世間を主にして、自己を無視したのです、生活上これほど不幸なことはありません、丁度衣服で云ひますと、人に見えぬ内の方には垢じみたるものを着、外には綾とか、錦とか、縮緬を飾ると等しき事ではありますまいか、先づ第一に自己を主として、家庭の幸福を計らなければならぬ事と思ひます、

家庭の中、尤も注意すべきは、臺所であると思ひます、自己の爲めに家を建てるなら、どうしても臺所に意を用ゐなければなりません、

料理とか調理は、暗き所にては到底出來ませんから明るき室を撰ばなければなりません、然し日本、殊に東京にては、臺所は至つて不完全であります。硝子又は障子などは、煤けたり暗き室が多いのです、これ等はよほど不經濟であると思ひます、即ち硝子にては三割、張り上げの紙障子にて、五割の光線の損するのである、若しも煤けたる障子になりますと七割五分位減ずるといふのです、新年などは大抵の家庭にて障子を張り替へますが、臺所にはなか〱廻りて來ません、人樣に見ゆる所ばかり張り替へて奇麗にするのです、之も矢張人の爲めに生活するのではありますすまいか、

經濟々々と云ひますと、或人の云ひますに、一日にて三合の米を食するは、これはどうも不經濟である

から、水を多く加へて粥にしますと二合にて足りる一合の所は經濟だと申されますが、これは言語同斷の事で、大なる誤解の事だと思ひます、米の中の養分が身體に入りて効をするのでありますから、一合を節倹すれば、それだけ人の身體には不經濟になるのであります、

故にかくの如き事は、少しも經濟でもないのです、私のお話する經濟といふことは、かゝる事ではありませんですから、皆さんも、よくこの點について御注意を願ひたいのであります、

殘肉料理

霞袖女史

人數の豫定よりも減じたるため、意外の殘物を生じたる塲合に於て、其儘之を用ゐんとするも、洋食にては總て肉類は冷却し、脂肪は凝固するをもて、到底之を喫すべからず、去りとて全く之を饐させんは不經濟のきはみなれば、洋食調理に於ては是非とも殘物料理方を缺くべからず、且つ洋食に於ては、殘物が意外の用をなす事あり料理の性質として、鳥獸肉類の零餘斷片を出すこと少からず、是等をすべて打棄て、犬などに與ふるは經濟に叶ふものと云ふべからず、然れば右のあまりものをもて、美味なる食物をつくり一家の人々に供するは、主婦のつとめといふべきか、よりて次に二三の殘物料理方をかき記すべし、

燒殘の牛肉と蠣

燒殘りの牛肉を能程にきり、之を淺鍋に入れ、牛酪刻みたる玉葱、胡椒、食鹽とを加へ、牡蠣の汁を注ぎて、三十分間程煮たる頃、別器にメリケン粉少量を、葡萄酒と、牡蠣の汁にて溶き、之を鍋の中に入れ、同時に牡蠣のむき身を投じ、能くかきませて火にかけ、沸騰ちたる後、火氣を減じ凡そ四五分間煮て用ふべし

燒家鴨と豆

焼家鴨の冷えたる肉を能き程に切り、之に牛肉の煮汁、胡椒、食鹽を加へ、文火にて十四五分間蒸煮になし、同時に能き程の青豌豆を、武火にて十二三分間煠たる後、笊に上げて水氣を去り鍋に戻し（豆をわげたる後・湯をこぼし、鍋を洗ひ置くべし）之に牛酪、砂糖、米利堅粉、少量のゝを和し、能くかきまぜ、文火にかけ五六分間蒸たる後、暖めたる皿の中央に盛り其まはりに家鴨の肉を添へて出すべし

衣鰕殘魚

ころもしらうをの拵へやうは、極上等のうどん粉に玉子の黄身ばかり和して煉り合せ、又しらうをは鹽水にてよく洗ひ、水氣を乾して石瀲粉にくるみ、三四疋を一束として胡麻の油にて揚るなり、



焼殘りの家鴨

焼家鴨の冷えたるは豆と調味するに限らず、其肉のみにて調理することを得べし、先づ骨に附きたる上肉を切り取り、殘りの肉は骨附のまゝ、能き程にきり、シチウ鍋に入れ、同時に玉葱を細かに刻み、「フライ鍋に牛酪をとかして煎付け、其褐色となりたる時、葱をシチウ鍋に移

し、尙牛肉の汁、胡椒、食鹽、柚子の皮杯加へ、文火にて四五十分間煮たる頃、前の上肉を炙り、皿に盛り、此上にシチウ鍋の骨湯煮を、粗き水嚢にて漉しながらかけ、冷えざる中に用ふべし、

煮殘り鷄肉

煮殘りの鷄の骨を去り、其骨を細かにきり、先づ其皮及びきりくづを鍋に入れ、之れに胡椒、肉豆蔻を和し、又牛酪にて煎付たる玉葱を加へ、能程の湯を注ぎ、文火にて煮ること凡そ一時間の後、粗き水嚢にてこし、又鍋に戻し、此中に前の切肉を投し、更に少量の米利堅粉、刻みたる柚子、能き程の食鹽を加へて、能くかきまぜ、尙三四十分間煮て用ふべし

煮殘の犢

煮殘りの犢の肉を細かに刻み置き、次に玉葱、洋芹及び肉豆蔻等を細かに刻み、人參を二三分位に輪切りになし、之を肉とゝもにシチウ鍋に投れ、尙よき程の米利堅粉、胡椒、食鹽を加へ、肉汁を注き、文火にて二十分間程煮たる頃、汁の上に浮き上りたる雲母をすくひとり、一旦かきまはしたる後、尙五六分間煮て、レモンの搾り汁少量を和し、直に盛りて冷えざる中に用うべし、

煮殘りの豚

煮殘りの豚の脂肪を去り、よき肉のみを五分程に切り、玉葱を細かに刻み、フライ鍋にバタを溶かして肉と共に其中に投れ、能く煎りつけたる後鍋にうつし、米利堅粉、胡椒、食鹽、芥子等能き程に加へ、尙少量の酢を和し、凡十二三分間徐に煮るべし、

煮殘の羊肉

煮冷しの洋肉を能き程に切り、フライ鍋に牛酪をときて此中に投れ、褐色になるまで煮付け、煖めたる皿に盛りさめざるやうに、蓋をなし置き、其あとへ赤茄子二個を、二つ切となしたるものと、玉子一個をときたるものとを投れ、二三分間煮付て、肉の側に盛り、わたゝわソースをかけて用ふべし、

◎汽車雜感(三二)　車中にて給仕が、所謂心附をくれる乘客に對して其埃を刷毛にて拂ふのであるが、その側に居るものこそ災難、その埃を皆引うけねばならぬ



猿智惠

骨皮道人

良人は何ぞといふと往昔々々と仰やるが、なるほど百年も前の畫工はさうでもありましたらうさ、氣に向けば畫く、氣が進まにやア畫かない、夫がまア眞正の美術家とか名人とか云ふものでせうけれど、今どきそんな呑氣な事を云うて居ては誰が相手にするものですか、他人の事を兎や角云つちや濟まないが、彼の月齋さんを御覧なさい、虎を畫て猫に見えるのならまだしもだが、過日あの人の畫た木菟をお竹が見て、御新造さん是やア達磨の牝ですかて…イエ全く拙畫のですもの、そんな良人、木菟だか達磨の牝だか分らない様な拙い畫工でさへ、去年百畫會をして、何うにか斯うにか、五六十纏めましたぢやありませんか、一寸假に五十と思つても、五圓づゝで五々二百五十圓、尤も絹代だとか手數料だとか當日の諸雜費やで差引た處でも、ざッと百五十圓位には成りましたらう、夫に展觀と云つてもどうせ目星い物はありますまい、併し是だつて纏めりやア、まさか配布絹より安い事はありませんから、左うすりやア先づ百七八十圓位は手取に成つたでせう、ソレ御覧なさい、月齋さんでさへ、敏活廻ると其様な旨まい事をするぢやありまんか、夫だから良人も、百畫會と云つた處が、もう今のやうに亂脉になつては無益ですけれど、何か新

工夫をして、マア雅名を賣出す考案をしなけりやア行きますまい、世の中は盲目千人に目明千人た能く云つたもので、何でも雅名さへ賣れりやア、拙作でも巧手に見えるのですよ、夫ですから彼の山明さんだの紫水さんの揮毫を御覧なさい、何だか毛刷畫で澤庵の壓石見たやうなものを、尺五に二つ三つ轉がして、夫れで潤料が十五圓ですとサ、加之にそれも餘つほど狡猾く出來て居ると云ふ話を聞て、妾は驚愕きましたよ、昨日も齋藤さんが來ての話に、先達て山明さんに山水を畫て貰ふ積りで、尺八の絹に十圓つけて頼んだ所が、毎時でも勿體つけて容易に出來ないのが、珍しく十日ばかりで出來たのは宜いが、夫が良人無造作な刷毛畫で上の方から一つと紺屋が洗張に目引でも仕たやうに、ざつと薄墨で誤魔化して、それで自分では瀧のつもりで居るのぢやさうだが、何にしてもこれでは全然で落款を買ふやうなものだから、流石の齋藤さんも呆れ返つて、先生これは誠に結構に出來ましたが、瀧ばかりでは何だか物足りない心持がしますから、恐れ入りましたが、此處へ一ッ岩燕の二三羽も飛ばしては戴けますまいかと云ふと、ム、さうすりやア又一際よくなるが、夫にはモウ五圓も奮發して貰はんけりや行かんと云ふのですとサ、人を馬鹿にして居るぢやアありませんか、小鳥屋の賣買ぢやアありますまいし、燕が何圓だの雀が何十錢だのと、其様な相場がマアありませうか、五圓出しやア生て居る立派な鶯だつて買へるぢやアありませんか、今燒筆もて枠張の絹へ、大略圖取の位置を極めつヽありし琴堂は、斯く細君のべら／＼饒舌繰るのを、ア、五月蠅と云はぬ計りに、眉と眉との間へ八の字の皺を寄せながらも、憖じ反對しなば或は一場の紛擾が起るかも知れない、まア／＼金持喧嘩せずだ、女房を遣込めた處で、餘り手柄になつた話でもないと、多寡を括つて據なく、罪のない欠伸をぐッと殺した、

お前は毎時でも、其様な惡口ばかり云ふが、刷毛一本で瀧が畫けりやア、それは實に大したものだ、素

人の目から見るとお前の云ふ紺屋か張物屋の手傳のやうに思ふか知らないが、斯道では刷毛と胡粉の使用法が一番むつかしい、その六かしいものを自由に使ふ腕前がありやア、假令瀧一つ書いても十圓では安いものだ、

細君は此の簡單な説明では、毫も屈服の色がない、のみならず、益々語氣に鋭利を加へて來た、

良人はさう何でも買被るから仕けませんよ、ナーニ彼の人達に、何の腕前なんぞがありますものか、元々香具師の鼻ッ張見たやうな者をお先に使つて、近頃流行る運動とか何とか云ふものを仕たのが僥倖當に當つたものだから、夫で盲目千人がみんな奉るやうに爲つたのですよ、夫ですから良人も、少しは當世風に名を賣る手段をお考へ成さいな、名前さへ賣込やア何樣な手を拔た粗繪でも、十圓や十五圓に強賣るなア、本當に造作もない事ですよ、

香具師の鼻ッ張、運動の僥倖當りと云へる數語は、痛く琴堂先生に刺撃を與へた、

香具師の鼻ッ張、そりや酷い、幾等社會に名を知られるのが必要でも、そんな卑劣な事は己にや出來ない、ナーニ盲目千人に珍重され無くても一人の目明に觀て貰へば、それで宜い、鼻ッ張だの運動だのと、何を馬鹿な事を、

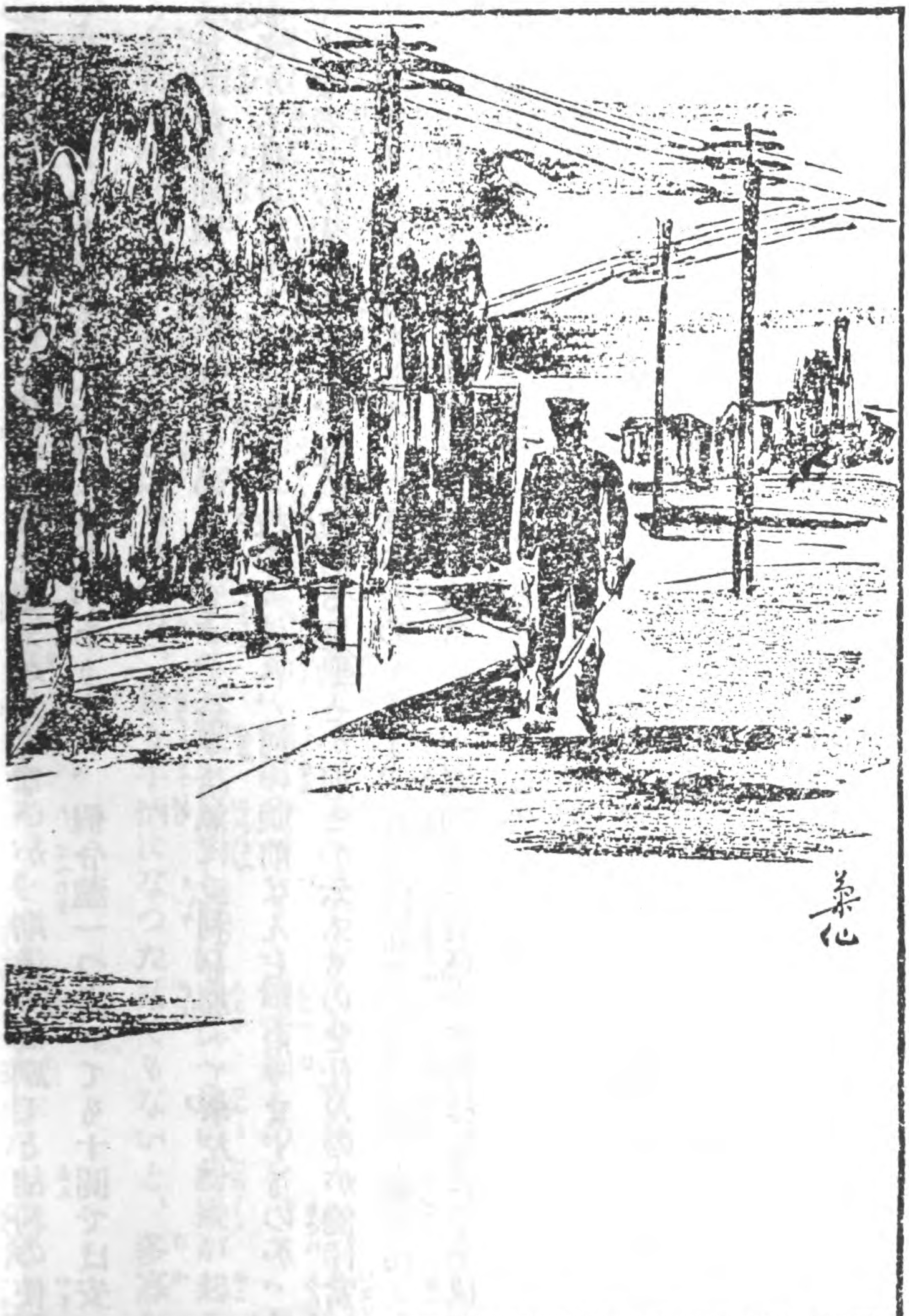
火鉢を叩く煙管の音と共に先生は立派に言放つて仕舞つた、細君はモウ二の矢が續げなからうと思ふと、ドッコイさうでない、

良人はさう早呑込に抽斗違ひを成さるから困る、何も良人に他人の眞似を成さいと云ふ譯ではありませんが、マア當節は其位でなければ仕けないと云ふのですよ、

夫ではお前どうすればよいのだ、

さうまた眞面目に出られても困りますけれど、妾の考案には、昔文晁と云ふ先生でも、菱湖と云ふ書家でも、みんな白扇に書畫をかいて、之を人通りの夥い往來へ落して歩いて、夫でとう〳〵名を弘めたと云ふ話ですから、極秘密で爾う云ふ事でも、仕て見たら何でせう、物が扇子ですから拾うた者も、縁喜が宜いと云つて喜ぶだらうし、それで披いて見ると、琴堂と落欵がしてあつて、お負に末廣を拾つたのは、縁喜が宜いと思つて喜ぶから、妾や、屹度よからうと思ひますよ、

琴堂先生も茲に至つて考一考した、斯の如き廣告手段は、素より鼻ッ張的卑劣の類ではない、況して古人の先例もある事であるから、强ち擯斥した物でも無



からう、負た子に教へられて淺瀬を渡る、我が女房が斯く心膽を碎くのも、要するに此身をして名譽ある地位を得せしめんが爲であると、忽ち胸算を纏めて、牝鷄に教へられて牡鷄が時を作る事になつたのである、

細君は己が希望を貫徹したかのやうに、非常に愉快を感ずると同時に、豫て知邊なる扇間屋へ駈付て、其の使用に差支なき限りは、概ね賣殘物を寄集めて、先づ取敢ず七八十本ほど買つて來た、先生は其の熱心と機敏なるに一驚を喫しつゝ自然勇氣を誘はれて、一氣呵成、忽條にして數十本を揮毫し了つた、細君傍に在つて、落款に小印を捺し、これに珊瑚末を振掛るなどは、天晴文人の細君として、其の手傳ふ



順序に拔目がない、ところで細君は又一策を案じた、單に琴堂の雅名のみでは、之を拾つた者に本姓名を知らせる事が出來ないと、思つたので、其の扇子の裏面へ、一々住所姓名の黄楊判をと捺した、是が女の猿智惠である、

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

旭日曈々將に三竿ならんとす、とでも形容すべき午前八時頃

郵便……………矢島さん

劍突を喰はせるやうに、表の格子から邪見に投込み去つた、葉書一片、下女のお竹が何氣なく取次で來た、先生請取つて之を見れば、名宛は慥かに矢島琴堂、差出人は所轄警察署、ハテナと裏面を讀下せば

時節何說

遺失物の件に付尋問可致儀有之即時出頭可致事

年　月　日

所轄警察署

懸賞小說　貳等

ふる郷

東京　廣田常子

伊豫鐵道の終點、横河原停車場のプラットホームに小さい客車から押し出されるやうに、今しも十五六人

の乘客は吾れ先きにと降り立ッた、モウ先きに降りた客は改札口を出てオイ〳〵と客待の車夫を呼むで居る時分に、徐かに二等車から降りた一人の若い婦人がある、色の白い面長な、鈴を點ッたやうな、黒瞳勝の清しい眼、鼻柱の通ッた、紅梅を一輪含ませたやうな唇頭に牽嬌溢れて、而して何所となく氣品の高いのに、髮は流行の廂髮で、數寄屋の單衣にオリーブ色のカシユメルの袴襞正しく、絹張の蝙蝠傘を片手に踵の高い靴で傍目も觸らず、スと改札口に寄ッた時に、改札夫は不圖その氣高い姿を瞻上げて何んと思ッたか、職帽の庇に掌を上げて擧手の禮をした、婦人は意外なる驛員の敬禮にさと頰に紅を潮したが、此方も夫れに應へて敬々しく禮を返して改札口を出た。

夫れと見た車夫は、貴人を載せて高き勞金に酒の代作るべく、川上へお出で、御座りまするか、志津川へ參りますかと、螺の如き掌に少女の羞耻みすなるやうに手拭を揉みながら、小腰を屈めて左右より集い來るを、單不要とのみ足迅やに構内を出で、志津川の方へと歩みを向けたが、不圖停立まッて遙かの彼方夕陽爀々と霞のうちに隱見れする慈光寺の高き甍を望んで、傘を杖に、悵然として頸を垂れた。

稍や少時立つて見て居たが、元來し途上を停車場の前に戻ッて、御休憩所と書いた麁末な欅の看板の揭ッた茶店に入ッて、色褪せた緋毛氈のかゝッた开處なる椽側に腰を卸した、店には硝子の蓋の附いた駄菓子の箱が三ッばかり列むで、其の横には蒸籠の付いた箱に大きな餅が六ッばかり、其のまた横には小さな酒樽と口の缺損た燗德利が五六本、この店は吾等に依ッて光りあらしむるのであると云ひた氣に行儀を頽して列むで居る、庭の取ッ附きの棚には煮込を盛ッた大きな丼鉢や小皿が不整頓に載せられて、店の入口には怪物のやうな大きな煤章魚と、赤白の鼻緒取交せて麻裏が八足ばかりと、草鞋が十五六足吊り下がッて居る。

上り框は景氣の宜い湯氣昇騰る土瓶のかゝッた素焼の火鉢の前で煙草を燻らして居た巻手拭の老婆は、婦人の入り來るを見るや、入らッしやいましと云ひつゝ、吹かしかけた煙管を投げて、重さうに立ち上がッた腰を一伸し伸して、塗りの剝げかゝッた朱塗の盆に湯呑を載せ、夫れに土瓶から澁茶をうつして、悠々と婦人の前に運んで、

『入らつしやいまし。』

と更らに一ッお世辭を云ッて能く見ると、服裝から容貌、この界隈では見られぬ美しさ松山の城下近ければ時折り横河原堤の雄松雌松が手を曳き合ふに、連理の名木見物に來る新婚の若い婦人、此家に立ち寄ッて休憩むを見慣れて居れど、斯くまでに美しく氣高き婦人を見たのは今が始めて、老婆は恍乎として見惚れて居たが、思ひ出したやうに冠ッた手拭を脫つて

『お客樣入らッしやいまし。』

とまた一ッ、周章家内に駈け入ッて、淺黄の唐縮緬の座蒲團を持ッて出て來て、畏る〳〵婦人の膝近く進め、一間許り此方に引き退がッて

『貴女樣、何うぞお敷きなすッて下さりませな、いえモウ塵埃だらけで穢う御座りますけに。』

婦人は柔和しい面に微笑を浮べて

『お婆さんモウ何うぞ關はないで置いて下さい、少時の間此所で休憩ませて頂けば宜いので。』

『さア〳〵穢い所でお關いなけりや、御悠ッくらなすッて行らッしやいまし、貴女何うぞ、其のお蒲團をお敷きなすッて下さい、お衣服が大變で御座んすけに。』

『さうですか、ちや借りますよお婆さん。』

端然に挨拶をして蒲團を敷いて、老婆が眼には彼の美しき手には不相應と見ゆる湯呑取り上げ甘露を嚥むかのやうに其の澁茶、雫も剰さず嚥下して、ホッと息、老婆は麁末な澁茶を心地よく嚥まれたるを嬉しさうに、

『今お一ッ差上げますで御座りませうか。』

『お婆さんお氣の毒ですが、夫れではモウ一ッ頂きませう。』

老婆は茶瓮を持ッて火鉢の方、滿々と澁茶注いで出で來り

『さア何うぞ澤山に召上ッて下さりませな、麁末な茶でお口には適いますまいけど。』

『何うしてお婆さん、大變にお美味う御座んしたよ。』

『貴女樣お上手を被仰ッて、恐れ入ります。』云ひつゝ老婆は婦人と相對ッた床几に膝を掛け『失禮なこと申し上げますが、貴女樣は何地へお越で御座りますかな』と悩々聞く。

『アノ私……』と言葉を斷ッて『志津川へ行のですが。』

と頬を染めて、後句云ひ淀み、絹手巾の端を弄ッて、俯向いた。

『オヤ左樣で御座りますかな、志津川へ。』

と云ッて老婆は斯かる都の貴人が、供をも連れず志津川のやうな片田舍へ、何んの用、誰が家を訪れんとて來りしぞと、訝しさうに眼を瞠ッた。

『お婆さん。』と四方を見廻はし、聞く人なきに心落着いたと云ふ態で『お婆あん、お婆さんは私を誰か、モウ忘れたでせうね。』

と云ふに老婆はます／＼不審の晴れやらぬ面相で『ど、何誰樣で御座りましたか、婆はツイぞ貴女樣のや

うなお方に……………。」

「見忘れたでせうねえモウ十年、雖然、お婆さん、私はお婆さんを覺えて居てよ。」

「ヘエッ、あの此の婆をで御座りますか。」

「さう、お婆さんはお兼さんと云ッて、樋之口の吾平さんの配遇でせう。」

老婆は星をさゝれて『へゝ能く御存知で、何うしてまアそんないに御存知なんで御座いますかな、婆は被仰る通り全く吾平の配遇で御座んすぞいな、シテさう被仰る貴女様は、何誰様で御座りましたか、耄碌をしてから既う意久地は御座りませぬ。』

『本當に今のお茶はお美味う御座んしたよ、十年目で生れた土地の水を飲んで、是れが甘露の味と云ふのでせう、私は生れて初めて斯んなお美味いお茶を頂きました。』

『アノ生れた土地と被仰れば貴女樣は志津川のお生れで御座りますか。』

『然矣、お婆さんさへ初めは誰だか烏渡氣着かなんだ位なもの、幼な顔とは悉皆變ッた妾、見覺えのないと云ふのは無理のないこと、私は谷川のお須美なのよ。』

『ヘエー。』と老婆は呆れて二の句を續ぎ得なかッたが、少時して呼吸を喘ませ『アノ貴方樣が谷川のアノお須美樣で御座りましたか、久しくお目にかゝらぬうちに、お立派に大きうお成りなすッたので、婆は悉皆りお見忘れ申しました、まア〱御無事に御成人なすッて、お嬉しう御座りまする。』と思はず知らず『お婆さんも壯健で……。』と一言云ッたが、胸が塞ッて後の言葉は出なかッた。

谷川須美子は志津川の舊家の娘父は純造と云つて郡會議員から縣會議員、種々なる公共事業に關係はつて、一時は飛ぶ鳥も落す勢力であッたが、其の勢力に乘じ、所謂者志家なるものに煽動られて、衆議院議

員の候補に立つてと三度、見ン事中原の鹿を射損じて、名聲の隕ると共に田や畑や、日吉谷の寶林と呼ばれた三千町歩の杉林も他人手に渡して、僅かに五六年の間に見る蔭もなき零落、土地に居るは面伏なりとて、妻子を伴れて松山に移轉つたのは、須美子が恰度十三の春、まだ下げ髪に深い肩掛げ、手毬を突いて、學校に通ッて、唱歌を歌ッて美い衣服着るより他に苦勞のなかッた時であッた。

純造は松山に移轉ッてからは、悉皆政治界から身を退いて、前垂掛の商人となり、種々の商法に手を出して見たが、政治界の懸引きと商法の懸引とは同じやうに行かぬ、而已ならず自分精通したりと誇つた政治の商略にさへ失敗した純造、不慣れな商法に成功しやう筈がない、是れも一二年の間に失敗して、かち得たるものは不名譽と借財ばかり、人間も下り坂になると斯くまで不遇になるものかと、熟々人生の頼み難きを悟ッた時には、モウ重ね〲の心配苦勞で、不治の病症に冒されて居たのであッた。

純造の病症は肺結核も質の善くない方で、床に就いてから一年、處世の術には盲目同然、少しの經驗のない妻と、まだ漸と十四の蕾の花、お孃樣で育つた須美子を遺して、素志一として貫くことなく、不遇終に挽回の時なくして、哀れや白玉樓中の人となッて了ッた。

盲人の杖失ッたやうな憐れな須美子の母は、須美子を連れて一時北條の實家に身を寄せたが、兄なる人が純造の生前に意見が合はなかッたと云ふのを楯に、親子のものを雇人同樣に追ひ使ふて、少しも血を分けた兄妹らしい取扱ひをして呉れぬので辛くて辛くて耐えられねど、他に頼るべき所もないので斯くなるも皆ンな定まる運命と、泣く〲諦めを附けて辛棒して見たが、兄の邪慳は日を追ふて募るばかり、須美子の窶れが目に立ッて見えて來るので、是程の辛ひ思ひをしたならば、女でこそあれ、親子二人水入らず、何んな事をしてゞも世は渡れやうと、二年振りで志津川へ歸ッて來て見ると、流石は夫が、生前に施して

置いた徳の有難くも、痩世帯は張ッても奥様お孃樣と誰れ一人卑下げた言葉をかけるものもなく、やれ南瓜が生つた豌豆が鐵漿を旋けたと云ッては、親子が食べるには餘りに多い野菜の贈り物、裁縫の賃錢も奥樣のお手で仕立てお貰ひ申したのだからとて、分外に置いて行く、人の情で昔の榮華は見られぬけれど、親子が生計に事缺かぬ丈の身とはなッた。

然し運命の神は何所まで須美子親子を憎むで居たものか、翌年の春はまた病に冒されて、三月と經たぬに亡き夫の跡を追ふて歸らぬ人となッて了ッた、須美子の悲嘆は何に譬ふべきものもない、日夜に唯だ涙の袖を絞るばかりであつた、其の涙の中に四十九日の法要をすました翌日、突然須美子の姿が見えなくなッた、村の人は悲嘆の餘り弘法池へ身を投げて死んだのではあるまいかと云ッて、盥の中へ鷄を入れて浮かして見たり、網を入れて探しても見たが、更に知れぬ、――以來十年須美子は生きて居るものとも、死んで居るものとも附かず、漸く土地の人の記憶から忘られんとして居たのであッた。

『お孃樣婆はモウ、夢見るやうで御座んすはいな、奥樣がお亡れなすつて間もなう、貴女樣のお姿が見えませぬ、志津川は申すに及ばず、樋之口、西岡の人達の驚き夫れは〱眞個に大體のことでは御座んせなんだ、若や弘法池さ身イ投げてお果てなされたのではないかと申して、ハイ、二日二晩探しましたが見えませぬ。』

『まア。』と云ッて須美子は老婆の話に耳傾けつゝ、密かに震ふ瞼を拭ふのである。

『見えぬも道理、斯ンなに立派に御成人被成ッてお歸りなさるのだのも、何によりまア、芽度いことで御座んする、奥樣御在世でおッたら何んなにかお喜びなさらうものを。』と老婆もそゞろ涙を催すのであッた。

須美子が僅かの旅費を懐中にして、父母の墓前に暇を乞ふて故郷を出たのは十年前、即ち十五の春であッたが、父の不遇、母の薄命は小さな胸に深く〳〵教訓を刻み込まれて、偖こそ人には死んだのではないかと疑はれるほどの大なる決心をなし、曾て父が全盛時代に四國漫遊の途次立寄ッて、暫らく逗留して居たことのある、金井桂月と呼ぶ畫家を頼ッて京都に上り、こゝに身の落着きを極めて三年の間と云ふものは、小間使ともなり、下婢ともなり、口へ出しては語ることも出來ないほどの艱難辛苦を嘗めつゝ、其間に桂月を師と賴むで一向専念、丹青に身を委ねた甲斐あり、日を追ふて技の上達するに、桂月も其の技の凡ならざるを見貫いて終には家事のことには一切使はず、我れ以上の師に就いて學ば、更に一段の上達あらんとて、某の美術學校に入學せしめた。

こゝに於て須美子はます〳〵勵み學むで、其の學校をば最優等者の名譽を擔ふて卒業した、卒業後――現在――は二三の學校の繪畫教師に聘せられ、閨秀畫家として紅蘭女史なる號は誰知らぬものなきまでになッたのである。

須美子は今年の秋の展覽會に出品すべきものに就いて、其の畫題に少なからず頭腦を痛めたのであるが、恰度夏期休業で學校の方も當分閑になッたので、この間に絶えて久しき兩親が墳墓の地を訪ふて、故郷の山水を寫して見やうと思ひ立ッて歸ッて來たのである、さうして今會識の老婆から吾が故郷を出た後の話を聞いて、嬉しいやうな、悲しいやうな感に打たれて、そゞろに既往が追懐られるのであつた。

・・・・・・・

聞けば美須子は今父母の位牌を納めたる慈光寺の一室を借りて、畫題「ふる郷」の製作に餘念なしとぞ、

吉山の城址、重信の流域、一幅の畵となッて上野の展覧會塲に掲げられる時はモウ遠くないのである。

（完）

懸賞小說　選外秀逸

未亡人

山形　鈴木よし子

上

「わらおッ母さん、そりや出しッからですもの、今入れかへますから。」と長火鉢越に手を出すのを、「いゝえ、これで澤山、一度や二度さしたばかりで捨てちやお前、無沙汰になりますさ。」と遮りながら、まだくら〳〵いふて居る蔽の鐵瓶を取上げて、急須に湯をさして居るのは、もう五十近い、垢ぬけのした小丸髷、お妻といふて此家の未亡人房子の實の母親であるが、今日夕暮に遂近所まで來たものだからといふて立寄ッたのを、其儘に引きとめられて、今しがた久々とてのさし向ひの御飯が濟んだばかり。

房子は玉火屋の洋燈の心をぐいと上げて、其儘母の手許を見て居たが。

「ホヽヽヽ、大變に御辛抱ですこと、それじやたんとお金がたまりますよ。」

「そうですともさ、此樣な結構なお茶を平常に戴くのさへ勿體ないのだに。」と茶碗に茶を注ぎながら、「お前は。」

「私もう澤山ですの。」と娘は笑を含んで「私もお金がたんとたまつたら、おッ母さんにお芝居をおごりませうね。」

「さう、さうして下さい。そんな事でもして貰はなくちやねえお前、割に合はないんだよ。お前を育るにはほんにどの位……。」

「もうよござんす、わかつてますよ。」

「まあそんな事はよいけれど、先刻聞いた其、近藤さんの弟御さんていふ方は、何日見えられるんだらうね。」

「何時ですか、此月の末につて云つてよこしたのですけれど。」とやりッ放しに云つて、火箸をとるといきなり灰に字を書き初めた、房子の夫近藤大尉が、結婚後間もなく、彼の日露戰爭に空しく旅順砲臺の露と消えたけれど其弟の某が、死後の整理のために當地に來るとの報が、既に數日前あつたのである。

「月末にッたつて、お前。」と娘を見詰めて、例のお前で語をきつたまゝ暫く考へて居たが、

「其人が來て如何しやうつていふのだらう。」と獨言の樣。

「此方の家を疊んで故郷へ歸るんですつて。」

「國に歸るはいゝけれど、お前の所をさ、どうする積なのだらうね。」

「私、私しや一生厄介者ですの、其弟つていふ人が後をつぐのださうですから。」と火箸をぐいと灰にさして、投るやうに云つたが、流石に溜息になつて、顔をそらした。まだ若々しい肩越の、夫に別れてからは束髪にばかり結ふてるのである。

「厄介者だなんで、其人からいやアお前は義姉さんじやないか。」

「そりやそうですけれど、世の中てものア……。」

「それはまアそういつた樣なものさね。」と母も口を噤んで、思ひに入つた。若し先から此樣な事になると知つたなら、あれ程嫁きたがつた神田の方を思止らせて、無理に此家に嫁すのではなかつたものを、只一時の目先に引されてと、今更の樣に胸迫るのである。

「眞にねえ、あの時さへお前の望通り信さんの所へやりや、此樣な事にはならなかつたのに、無理に此家へ嫁して……。」と云つて、俯向いてる娘を見て居たが「信さんも此頃じや、會社の方で大層都合がいゝんですとさ。」

「そう。」

「昨日だッたかも神田の小母さんが見えて、早くお嫁を貰ひたいつて、色々話してましたよ。」

「じや、まだ奥さんを貰はないのですか。」

「それがさお前、今だからいふけれど、皆私達が惡るかつたのですよ。まア斯うですつて始終お嫁を貰へ貰へといふ相だけれど、如何してもいやだつて聞かないのですとさ。其上、腦が惡いからだつていふけれど顏色は惡し、話なら一ッせず、さうして如何かすると、じッと考へてばかり居るのですと。だから昨日なんかも小母さんが、（未だ房ちやんの事を忘れかねてるんでせう、あの樣に少い時から仲よくしたのですから。）ッて愚痴を云ふものだから、眞に氣の毒で。」房子は無言で聞いて居た。

母親も言葉を途切らして暫く考へて居たが、

「それで、今更何もかうッていふのじやないけれど……、小母さんも、（そういやア何ですけれど、今じや房ちやんもお一人だし、お子さんもおありでないから、若し今でも來て下さるものなら、信も何樣に

か喜びませうけれど。」つてお在でだし、妾もね、斯うなつて見りや、まだ若いお前の年を、此儘朽らさすのも何だかかう可哀そうだと思ひますの。それに又、今聞いて見りや、其様な風ぢや一生人の世話におなりでなきやならない様だし……。」

きれた話をつぐものもなく、靜なる部屋の中は、一時鐵瓶の沸る音ばかりになつた。

母親は又、思出したやうに、

「二度目だと云つても、信さんの所なら、他家へ行つたやうに肩身も狹してる事もないし……、そうしちやどんなものだらう、皆私達が無理を云つて此樣にした譯何だから、今度はもう何も云やアしないけれど、あすこなら、前から行きたがつてた所ではあり、その上先方でも望んでるのだから……。」

「そりやそうですけれど……。」

「矢張いけないだらうかまア、一度お嫁入りしたのだからそりやアね。何れなんですよ、ようく考へて見て下さい、これがお前、外の事とちがつて一生に係る大事だからね。」

「はい。」と房子は口の中で云つて、ちらと母の顔を見て、又俯向いた。

洋燈の心が地虫の鳴く様になり出して、鐵瓶は盛に湯氣をはいて居る。

下

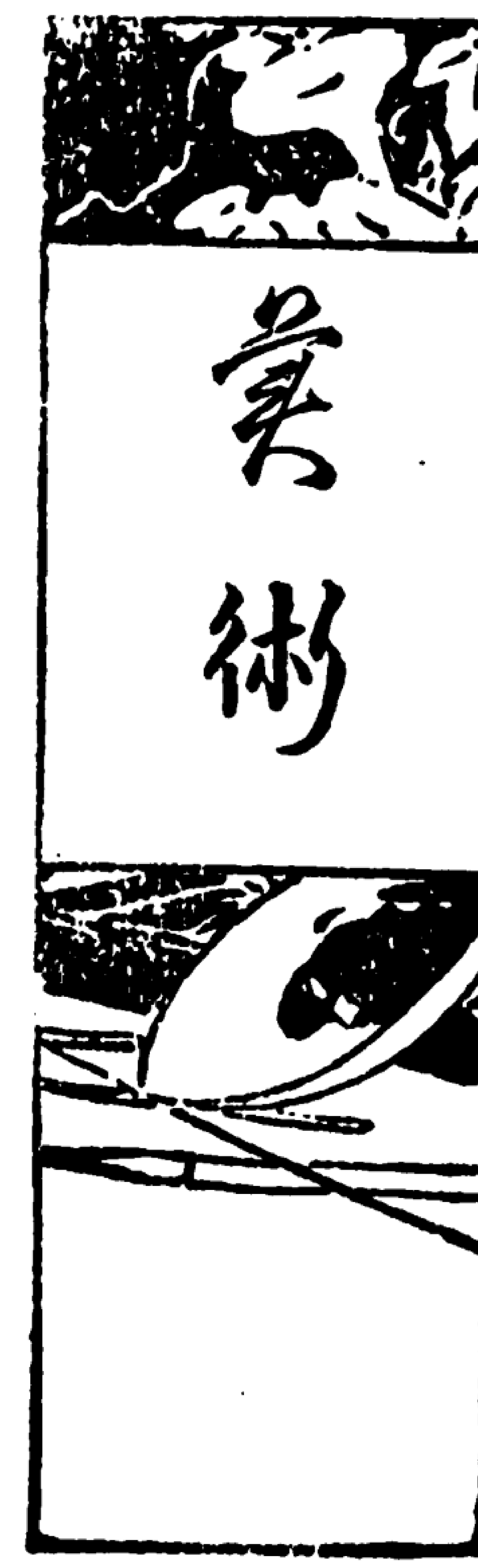
今しも母を送り出した房子は、帯の間に手をはさんで、物思ふやうに部屋にかへつたが、さて何をするともなく又長火鉢の側に坐つて目をとぢて、考に沈んだ。房子の胸は、今や亂れた糸の如く、何所に果を見出し難いのである、元より信さんとは幼いからの仲よしで口にこそ云ひ出さなかッたけれど、互の心は自ら或る思も通へば双方の親々も同じ色の見えたのであつたのに、房子の親々が目先の慾にくらんで、

無理に此家へ嫁したのは、いはゞ先方を踏付けたにも等しい。それにもかゝはらず、先方では腹もたてずに、尙今日迄もふつゝかな此身をそれ程までに思つて居て下れたとは、まア何と嬉しい志ではないか、信さんとても、まだ無妻で居るとは聞いて居たものゝ、斯程まで深い眞實とは思はなかつたのである。そればかりか、もう一度嫁入した身も厭はずに、まだ貰つてやらうといふ其志を聞いては、あまり勿體ない樣な氣さへするのに、此の上どうまアいやは云はれやう、先つ刻お母さんのお話を聞いたときに、すぐにも御承諾はしたかつたけれど……どうかうかと思ひ到つたが、それでももう一度嫁入したものが、其樣なことをしてそれで心にやましくあるまいかと思ふと、我れから我れのはしたない考に驚ろいて、又胸は亂れた、あゝ自分は既に近藤といふ夫があつたのではないか、しかも名譽ある軍人の妻ではないか、それに何うした事、假令懐しい其人から申込まれたとて、此まゝに又嫁入しては、何所に女の道が立たうよし一生は此儘に朽つるとも、一度嫁いだ其家に果るのが女の志ではないかと、男々しい心が動いた。が、然し、此樣な好ましい運を我から捨て、一生人の厄介になつてあゝ、此長い一生を、それに子供でもある事か、只一人見も知らぬ人の許に。あゝ此後は何を慰に心を樂そうぞ、此末長い何十年かは、悲しい〳〵中に過さねばならぬのであらうか、それ程迄の信さんのお志にもそむいて……。あゝそれが女の道といふものであらうか、女の道がそれ程貴いものであらうかと思ふと、女心の又弱く、二度の嫁入が何故いけないのであらうとも疑はれる。そう、信さんの所に何故ゆけないのであらう、此まゝお言葉に從へば昔々夢の樣に思ふて居たあの樂しい時にも逢はれるものを。えゝ何のその、世の中に例もないではないに妾は、妾は、もうおッ母さんにさう御返事してと思決して、ぱッちり目を開くと、更くる夜の四邊には物の音もなく、只柱時計の刻む音が妙に胸にひゞいてくる。で、今の考を又現に描きながら、ふと面を上

ると目は思はずも、薄闇い壁に、嚴然として睨むが如き夫の肖像に落ちた。房子はハッと思つて急に我に返ると、今迄の考が急に面伏ない樣になつて、身は故知らぬ恐れにふるへ、先の幻の樣な思が急に散ずると、更に〳〵なき夫の上が思はれるのであつた。よし自分は心に染まぬ迄も、あれ程迄に愛して下された夫に對して、何と再婚が出來やう、その上、あの悲しい最後の御手紙にも、何も其方に賴む事はないが、若し萬一の事のあつた時には軍人の妻らしい行をして下れよ、賴むはこればかりと、繰返し〳〵認めてあつたものを、此御言葉にまでそむいて、如何して其樣な事が出來やうぞ、妾は名譽ある近藤大尉の妻として一生此家に了らうと思决すると、心も淸く、更に夫の肖像を仰げば、畫いた像も笑を含むやうに見えた。

三千圓の診察料

胃腸病院長長與稱吉氏が、此程香川縣に往診し假初の戯言が眞實となりて、一日の診察料大枚三千金を差出されたる美談あり、今其顚末を掲げんに、高松市の素封家加藤氏の親戚にて、松田忠（二一）と云へる人、一年志願兵となりて、丸龜兵營に入隊せしは、昨年の事なりしが、假初の病氣は、重り〳〵て大患となり、此程よりは加藤家の奥の一と室に打臥して、呻吟の聲絶ゆる日もなきを、貞嫁の譽れ高き夫人綾子（二一）は如何にもして、良人の病を癒さんものと、介抱に憂き身を窶して、些かの油斷もなく、此の上は所詮東京より名醫を迎へて、診察を乞ふの外なしと、親族會議に、歎願して長與博士をと云ふ事になり、或る人が紹介して、博士に相談せしに、少なくとも一週間の日子を行程に費すこと、如何にも困難なればとて、一應は拒絶したるも、其後再三再四の依賴に退引ならず、磊落にして奇辯ある同氏は、突然一計を案出し、然らば三千圓にて往診の依賴に應ずべしと云ひ出たるに、紹介者は早速‼旨を高松の加藤氏方へ打電したる處『要求容れたスグ來れ』との返電あり、博士もよしなき惡謔をなして困つた事を仕出來したりとは思ひたれど、今更斷る譯にもゆかず、行李匆々高松市へ赴きたるは、去る六日の事なりしが、歸京の際加藤家よりは三千圓に熨斗つけて差出したるより、博士は容を改めつゝ、三千圓と云ひしは一時を免れん爲の戯談にて、斯かる大金を眞實診察料に受くべき謂はれもなく、又然る貪慾の念慮は毛頭もなければ、そが十が一も尚餘りありと告げて、手にだも取らず、飄然として立去りたるにぞ、加藤家にては太く其高義に感じたるも、扨其儘に止むべきにあらねば、兩三日前一千五百圓を博士に宛てゝ追送したりと云ふ、



我邦將來の器樂に就て

文學士　上田敏

音樂學校に於て、其學科課程の一として新たに本邦の民樂を授くべしとの説を近來耳にせしが、是甚だ策の得たるものに非ざるべきを想ふ、

世人動もすれば我邦唯一の音樂學校に於て、日本音樂の研究に專らならざるを非難するものあれど、少しく沈思默考するときは、先づ歐樂の研究を前にし、而して徐ろに邦樂に及ぶべきことの妥當なるを知るべし。

凡て物は深く其源因に遡りて、其依りて來る所のものを闡明せざるべからず、徒らに末に趨りて其本を忘るゝが如きは世人の常に愼まざるべからざる處なり。

邦樂を云爲せんとするもの、先づ邦樂の起り來りし處を知らざる可らず、猶は邦樂の起りし所以を知らんと思はゞ、能く是を東西の史乘に徵するの正當なるを思はざるべからず、我國音樂を論ずるもの、或は其の歴史的研究の智識を缺ぐに非ざるなきか。

日本に於ける音樂は、是れもとより本邦獨特の色彩あるは勿論なれども、遠く是を歐樂の歴史に徵するに、彼のグリークの古代音樂に甚しく類似せるは皆人の云ふ處なり。是れ恰も本邦繪畫の、バビロニヤ、アッシリヤ、下りては文藝復興の初期に於ける其等のものと甚しく類似せると等し、是を以て是を見るに我國の音樂は唯我國特有のものに非ずして又曾て西洋に於ても斯かる音樂を有せしことありしを説明するものにあらずや。

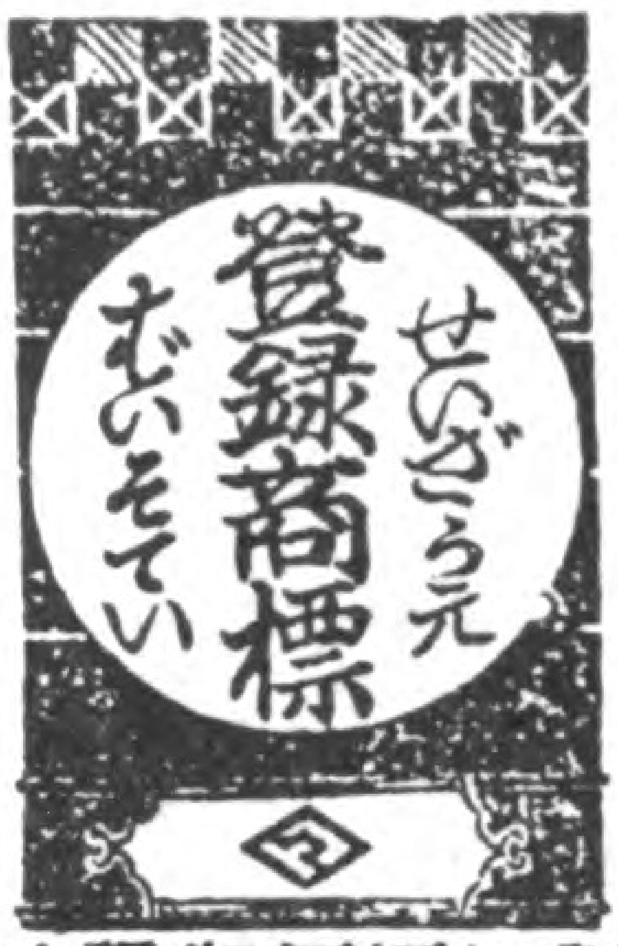
歐洲樂は如斯して、單純なる音樂より起りて、今や實に結構完美の大音樂となれり、抑も歐樂の始め

第五回博覧會褒状受領

定價 壹袋壱錢
罐詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登録商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覧の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黒船町
梅素亭謹製
電話 下谷 二二三四

東京銀座一丁目河岸通り
帝國貯蓄銀行
(電話 新橋 八一六 二八〇八)

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店
日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

造花原料

電燈包球造花



實用新案美術
電燈包球
造花各種

定價

絹製一號　一圓四拾五錢
同　二號　一圓貳拾錢
同　三號　九拾五錢
寒冷紗製一號　九拾五錢
二號　八拾錢
三號　六拾五錢

和洋化粧品雜貨
並に造花籠各種

●造花類の御注文は特別念入に調製仕候

日本橋區元柳町五番地兩國橋通り
鈴木商店

電燈包球造花製造發賣元
神田區通新石町九、二六社前
中島商店

包球造花特約販賣店
日本橋區蠣殼町一丁目四番地
鈴木商店

香油はピース油に限る

高等かみ油

ピース油

香氣佳良

白色の油とちがい髪毛の爲に有功ある精製品にして我國男女の嗜好に適し四季何れの時に使用するも毛のねばることなく色澤を發し艶美ならしむ

●各小間物賣藥店にあります

東京日本橋區榑正町七番地
發賣元　前田久昌堂

香油はピース油に限る


有隣
生命保險株式會社
東京日本橋區南茅場町四十四
電話特浪花一四 浪花一一八〇


ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad.
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
田中玄蕃醸造
ヒゲタ印醤油


御諸學校用
體操器械
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
NO.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用體操器械
體育用品
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
電本484
確實製造販賣
ピンポン改良室内テニス(旅行用)
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三六
四號同 二、五一
同用テーブル 上等一臺拾參圓四拾錢並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同(小學用) 四、七〇〇
婦人用(一號) 七圓
同二號 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一一五迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

グリークに起るや、漸くローマに入り基督教の用ゐる所となり、漸次改善せられて、コントラプンクトの發明となり、ハーモニイの研究となり、終に今日の態を成すに至りぬ。

基督教の始め彼の音樂を制定せんとするや、時恰も上流社會の音樂は甚しく淫靡浮華に流れ、到底宗教樂として用ゆる能はざるものありき。玆に於て彼等は比較的純潔なる俗謠の大に取るべき處あるを發見して終に是を用ゐて多少の修正を加へ、又伴奏器としては、當時ハアプ等のありし外に新たにオルガンの發明等をなすに至れり、歐洲に於ける器樂の濫觴は實に斯くの如し、

此の外に又西洋に於ては、極めて通俗的の民樂ありしが、开は後に、バッハ其の他の名匠現はれて、其等の曲節、拍子を根本として種々なる舞踏の曲を成すに至れり、今日ストラウス、のワルツを聽きて其精巧麗美なるに驚ろくものあれど、皆是れ其根本は古き民樂の舞踏の拍子より出でしにすぎず。今日にては是等の曲、器樂の重要なる分子として、又殆んど彼れ自身獨立して一の器樂のフォームをなすに至れり、故に極言すれば今日歐洲器樂の根本原素は彼の國、民俗の舞踏の曲譜拍子にありしと云ふを憚からざるなり。

翻りて本邦器樂の狀態を見るに、說者時に我國人の器樂的嗜好なきを說くものあれども、是れ甚だ偏頗の說にして、本邦人と雖も、多少耳の進步せしものにありては、三味線等に於て其の合の手、かけ合等に興味を有するは事實なり、決して日本人に器樂的嗜好なしとは云ふ可からず。然らば今後此の種の研究に向つては果して如何なる方針を以て進みて可なるべき乎。

物は凡て先づ建設せんとするに先き立ち、據る所の根本なかるべからず、然らば吾々は何を根本として、其據る處のものを作るべきか、予を以て見れば是は我國俗樂の方面、特に田舍に於ける田植歌、盆踊、馬追唄等の節奏、拍子等に依るを以て最も適當

なる方法なりと信ず。又參考としては、あらゆる舞踏の拍子、民謠の曲節等を取るべきなり。

我國には我國自然の舞踏上の拍子あり節奏あり、歐洲に於ける、ミニエット、ガボット、サラバンデ、ヴアルツ等とは自ら異なるものあるが如し、是れ最研究に値するものなるべきなり。是等の研究は引いて又我國獨特の曲趣を生み出す最も大切なる研究材料なるべし。

もとより我國在來のものを其儘に用ゐて以て可なりとすること能はず、必ずや幾多の取捨撰擇と、愼重なる研究とを要するは勿論なれども、兎に角此處に其の據りて以て起る處の根本を見出すことを得べし、而して是れが理想の結果を得ば、尙ほ器樂の實際に應用し、或は種類に依りて、四五種の部分となし、ソナタ等の形式に適用する、敢て不可能のことにあらず。

猶ほ一般旋律等のことに考及するに、我國在來のものを其儘用ゐ、又は唯其れのみに據りて他を容れざる如きは甚だ宜しからず、我國の音階は概して單純にして變化に缺けたることは既に人の知る處なり故に我國に無くして彼國に有る如きものは遠慮なく使用するを可とす、斯くして其上に猶ほ我國の長所を加へ、優れるを補はゞ、他日の成功期して俟つべきものあらんなり。

若し又此處にオルケストラ等を組織せんとする場合には、其のオルケストレイション等は或程度まで彼に倣ひて仔細なかるべし、樂器をまで一に我國のものに依らんとする如きは愚論の甚しきものなり。

予は前に於て既に邦樂の研究を前とし、歐樂を後にする愚なるを云へり又目今に於て音樂學校正科課程の一部として本邦民樂の研究を成さんとするの少しく早計なるを主張するものなり、併しながら、音樂學校の附屬事業として內外の樂士を集めたる同校に於て、職員敎師の一致協力の下に是等の研究をなさんとするは、實に目下の急務なることゝ信ずるものなり、

夏の音樂

《永井軍樂長談》

夏と音樂との關係に就ては、何等の特殊の事實を發見し且つ感得し難きも、野外に於て吹奏する上よりいはゞ、四季中夏の夕より、其夜に掛けての吹奏は、尤も適當の事なるべし、殊に吹奏上の都合よりいはゞ、夜に入りて樂堂の電光華の如く燦然として、譜面臺上を照す時こそ、指揮の興も一入湧くの心地すれ、故に今度の吹奏の如きは、稍々好時機を得たるものにして、今後に於ける二三回のものよりは、今度の出來榮、或は優るべからんか、是れ人員上の完備、及び練習上の完備夫等にも關係を有するが爲也

夏を主題とせる樂曲は、これぞといふ大曲中には見當らず、たゞメンデルズソーンの『夏の夜の夢』及び同じ曲名なるショッパン、トーマスのもの夏の主題に協へるものならんか、メンデルズソーンの大曲中には有名なる賀婚の進行曲あり、これ前回に於て海軍の樂士諸氏が吹奏せられたるものなりとす、其他今度の吹奏中には『郭公と蟋蟀』といへるがあり、これや、夏季に關係するものなれど、ホンの小品にして吹奏の重なる技工は、郭公と蟋蟀との鳴聲をあらはすといふにあるのみ、これ嘗て吹奏したる汽車進行曲及び夕立の曲等と品質を比うすべきものたり、

今諸外國に於ける野外吹奏樂の狀況を見るに、巴里にも伯林にも極めて盛也、巴里の如きは八十人一隊の大組織たるを有するものさへあり、其他は概ね五六十人の一隊を以て大組織と見做さゞるを得ず、而して巴里は期日を定めて吹奏するも、里昂の如きは毎日吹奏するの盛況を呈し居れり、但し巴里の夜間吹奏には、一は公園樂堂に於てするもの、一はオペラに於てするものとあり、絃樂を交ふるものは公園樂堂には稀にして、オペラのものには例少からず、これオペラの吹奏はオペラ專屬の樂士等に依て行はるゝ爲めなれば也、余も行く〱は絃樂をも加へたきものと思考す、併し實行の何時なるやは容易に明言し難し、又吹奏曲目中に日本音樂を加ふれば、一般俗耳には歡迎せらるべきものならんが、余の方針は歐洲樂に向上的研究を有するを以て、到底吹奏に於て、其特美を發揮し得ざる日本音樂の如きは、先づ折々の餘興として加へおく位に過ぎず、然れども日本音樂の吹奏は、單音なる丈け又一種の上手を要するは聽者の注意を得たき事也、併し吹奏の上に於ては、實に劇曲の雄大精緻を以て最上のものとなさゞるを得ず、今度の曲目中にも、グーノーの作曲たるサッポーの劇曲は當日中の大達物たり、又怪物輪舞の曲といふものも、吹奏には餘程の巧妙を要するものにて、百鬼夜行の狀態をあらはし、其怪物が跳舞の妙を盡くして、段々に消え去るの間は實に樂手の苦心を重ぬる所なりとす、

女子と洋畫

東京美術學校教授　小林萬吾

繪畫を教へて、男子と女子との差はと云へば、第一男女一つにして、同じ話をして聞かせても、女子は大體に目が届かぬ、即ち實物を描かせるにしても、度胸よく其全面を見る事が出來ぬ、

第二に、幾ら教へても、女は繪といふものは、美しく見えねばならぬものであるといふ考が主になつて一本の線でもなか／＼氣にする、何うかして畫面を奇麗にしたいと苦心するが、一つの缺點と見てもよい、その念は段々に教へて去らしたいものと思ふ、そこへ來ると、男の方は大體に目をつけて、細かい所は何うでもといふ風があるから、自然雜駁に過ぎて動もすれば、畫面が醜くなり過ぎる事もある、

第三、女子に大きな景色を描かせる事は無理で、パステーで描くにしても、水彩、油畫、クライオン、何にしても材料は優しい、花であるとか、器物、動物なれば金魚、鯉、犬といふやうに卑近なもので、畫を組立てさせるのが適當であらうと思ふ、覺える點は、男子も女子も大した差はない、男子で三ヶ月で覺えるものは、女子も三ヶ月で覺える、

第四、女子は氣力が強いやうで、而も物を科學的に研究するといふ點になると、男子より氣力が乏しく五六時間も續けることはむつかしいやうである、

第五、これは男女の比較ではないが、洋畫を敎へるには、高等女學校を卒業したものなれば申分はないが、少くも高等小學校位は卒業したものでなければ形は解つても、畫に付いての氣持が解らぬ、日本畫であれば竹は斯う描け、菊は斯う描け、と實物に就ての觀察はなくとも、畫を以て畫を敎へることが出來るが、洋畫は幾らか實物について規律正しく學校敎育を受けたるものでなければ會得が極めてむつかしい、

第六、前述の如く、女子は雄大なる畫をつくる事が至難であるから、景色でも川に舟が浮いて居るとか

現に柳が一本立つて居る杯の所はよいが、もう山あり河あり、森あり畠あり、畠道に荷車あり、荷車をおす農夫あり、といふやうな事になると兎てもむつかしい、然るに女子にして一足飛に裸體畫など描くに至つては、今の所先づ滑稽に近い、

第七、それは一概に云ふ譯ではない、支那の婦人でも、梁松年、劉淑連などいふ人は、私の塾に暫らく洋畫を稽古したが、西洋風は形をうつし、支那風は意をうつすなど氣焔を吐きながら、上達したのもある、また西洋婦人などには大作家もあるが、今の所日本の婦人は、先づ其性格に適する優美なる小規模の畫を勉强するが適當であらうと思ふ、

西洋婦人と繪畫

跡見玉枝

繪畫を教授する上に於て、日本婦人と西洋婦人とはもとより幼少の時より、自然眼に映ずるものも違へば、繪風も異つて居るから、西洋婦人が日本畫を學ぶには多少の困難はあるべきことである、今二三感じた事をお話し申さう、

唯今西洋婦人の我門に籍を置くもの六十人、その中三十人ばかりは本國へ歸省中で、殘り三十人ばかり通學して居る中に、それは出來不出來はあるが、一人として時間を大切に思うて居らぬものはない、假りに二時間を課業時間とすれば、其間は實に一刻千金の感で、少しも飽くことなく、研究をし、工夫をし、運筆をして、餘念なく勉强をして居る、決して時間中に下らぬ話をしあふ抔といふ事はないのである、實に感服の至りである、

これは何ういふ調子であるか、西洋婦人に、一筆で丸いものを描く、たとへば日とか月とか、枇杷の實とか、日本人は子供でも造作なく描けるものが何うしても旨く描けぬ、

それから日本畫は、所謂健腕直筆で、腕を上げて描かねばならぬのであるが、それが中々むつかしい、

女鑑新聞

紀元二千五百六十六年　西暦一千九百六年　明治三十九年八月一日水曜日　ひのえうし　清朝光緒三十二年

▼投書　この新聞紙面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

□定價　女鑑の特待にて女鑑の讀者には月外口八て、見らる、
□廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人　女代郎　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

時言

旅行

旅は流水の如く、歩々觸るゝ所を新鮮にす、常に思はざることも、旅に於ては切に思ひ、常には事もなく感じたる事を、茲に得ならぬやうに感じ、常には無心平氣に解したる事をも、此時は最も情あることに會得す、限りたる人情の生き返りたるが如く、澱みたる道念の澄みわたりたる如く、感覺鋭敏にして物に動き易し、而して四方の風光その[illegible]な粧ひたらん事の如く、宛ら一新したるの面貌を以てわれに臨むの心地す、此に於てか何如に情なき人も、旅には深切多感の人とならざるは殆んど稀なり

各自の好尚

菅公の皎々たる梅花を愛し、豊公の夭々たる桃花を愛せし如き、二公の人と爲を察するに餘りあり、屈原の幽芳なる蘭を愛し、陶淵明の高逸なる菊を愛せし如き、二子の懐抱を想見するに足る、

愛嬌

人に愛嬌なかるべからず、愛嬌は心を引くの磁石にして、氣丸爽快にするの化なり、人間若し之を缺かば、自づから人づき悪しく、實力ありとも世間の歸依薄くなるべし、之を考ふるに、愛嬌は是れ人品の美か、美に妙味ありて、自ら理義以外の趣を呈する如く、愛嬌も亦人の技倆、人の見識、人の品行等の外に存して、一種の妙味を惹起す、情感の世界に於ては、正に缺くべからざるの氣韻とす、而してその愛嬌たるや、殊更に作りたるものにあらずして、心理の美の、自然に面貌に、擧動に流露せるものたらずんばあらず

◎家庭の爲に　無害の牛乳防腐劑は、撒里矢爾酸にあらずして硼酸なり、前者は其用量によりて人體に害を及ぼすの恐あれば、專門家ならでは用ふべからざるが、後者は無害なれば、其少量を牛乳に投じ置かんか、四十八時間内外の保存をなすを得べし



文苑

夏の夕　佐々木和子

西に照りたる天つ日は
山のかなたに落行きて
うばらに匂ふ夕はえの
光はまたくうすれけり

○

入相つぐるかねのおと
靜けさひゞき傳へつゝ

○

端の葉そよぐ川ぎしに
夕しほ遠くみちて來ぬ

○

ゆめ見る如き星くづは
くしき光をはなちつゝ
かみのいませる樂園に
導くごとくかゞやきぬ

雜録

廢砲製の紀念章

愛國婦人會にて、去る四日役員會を開き、分捕大砲の癈砲となるべきものを、陸軍省より下附、或は拂下を受け、戰役中會務に盡瘁して功績あるものゝ爲め紀念章を製造し、之を贈與せんことを相談せりと、

◎女子技藝大學設立準備　予て渡邊國武氏の發起となり、女子技藝大學なる物を設立するの計畫あるよしなるが、尚ほ其準備の模樣を聞くに、發起人は前記渡邊子を始め、三浦泰輔、星野錫、小林好愛氏、及び美術家技藝家等十七名にして、三浦、星野、小林の三氏首腦として、運動し、贊助員としては柳原伯、宗伯、秋元子其他二十餘名あり、五萬圓を以て校舍を設立し、別に五萬圓を基本金とする筈にて、其金の募集も、極好結果に運びたれば、來る九月頃は工事に着手する筈にて、敷地も牛込區若宮町と決し居る由、開校の上は和洋裁縫、圖案、造花、刺繍、螺鈿、象牙彫、蒔繪、編物等を教授する筈なり

◎女子と園藝　牛込區五軒町大日本婦人農藝會開會に係る同會は、本日より向ふ三週間神田錦町の女子商業學校に於て△果樹（農學士原熙）△蔬菜（同作間徐三郎）△花卉（同鈴木行三）△園藝西洋料理（割烹家木村留吉）等の教授あり、科外講話として山崎農科大學助手の養蠶及び養鷄、秋間博愛看護婦會長の家庭看護及び女禮式等あり、會員は農科大學、農事試驗場、蠶業講習所等參觀の便ありと云ふ▲埼玉女子師範學校の生徒間には、農藝に嗜好を有するもの頗る多く、是れまでも花卉を植ゑ、菜園を作り庭に植物の栽培に努め居れるが、本年は又た養蠶を實習したるに、去る四日上蔟し掃立量一匁五分に對して、收繭四貫目以上ありしより、大に勵みが付き、更に養鷄部、養蜂部の設置を同校に請願し居れりと



◎女子の游泳　游泳の時期に入りたる折から、女子の游泳に就いて下谷區金杉高等小學校女教師澤ため子女史の語る處によれば、女史は曾て吳鎭守府司令官山内增二氏の家庭教師たりし折より、女子の游泳を心掛け居り、昨年夏同じ仲間を語らひ、お濱御殿附近金杉沖等にて時々游泳を試みたる由なるが何日も同じ附近に游泳し居る男子の惡戲に妨げられ、遂に其志を達する能はざりしと、

◎愛國婦人會　同會々員數は、平和克復の今日に至るも、非常に增加し來りしが、今最近の調査に依れば、特別會員五萬四千六百六十四人、通常社員四十四萬八千二百四十八人、贊助員三萬六千四百十七人の多きに達せし由

社會美

女寫眞師

近來婦人の新職業さま〴〵ある中に、寫眞術を學ぶ者多く現はれ、四谷信濃町婦人寫眞館主波多さい子、神田小川町鈴木寫眞店主鈴木千里子等、其重なるものにて、此外神田錦町の井谷、本郷東竹町の磯前、下谷池ノ端の德力、四谷新信濃町の上田など、近頃相續いで開業せるが、今此等の七寫眞師に就きて、左の注意すべき弱點あるを確め得たり、

（一）婦人は一般に男子よりも早く成功せんと焦るもの〻如し、即ち技倆の有無に關はらず、一通りの術を學べば、夫れで人一人前と思ふもの、大抵皆然り、

（二）男子と違ひ、婦人ならば技術の巧拙如何に關はらず千客萬來疑ひなしと自惚れる者、十の八九までは皆然らざるなし、

（三）夫ある婦人の開業と、夫なき婦人のソレとは、自から大いに注意す可きことなるに、夫あるものは兎に角夫なき婦人は、自分は『獨身者』なりと云ふことを故意に告白して、世人殊に男子側より一種の同情を買はんとする者あり、

以上は強ち女寫眞師に限らず、何れの職業にても、婦人の一般に注意す可きことなるべし、

◎將校婦人會の擴張　將校婦人會は、單に同志相集り、親睦を計るの目的なりしが、今回其の事業として、將校遺兒貧困者の教養所を設置することゝなりしを以て、勢ひ大擴張を爲すの必要を生じ、從來東京在住者のみを以て組織されたるも、今後は普く全國に亘りて、多數の會員を集め、陸軍衛戍地所在の各地方に總て、支部を設置することゝなり、尙は將校遺兒教養所は、入所申込願書を本月五日まで受付け、愈々同十五日より開始する由會長は大山捨松氏

○矢島女史と紀念會堂　女子學院長及び日本婦人矯風會頭の職に在る、矢島楫子女史が、教育界に於ける既往の功績は、世人の知る所の如くなるが既に七十三歲の高齡に達せるも、矍鑠として元氣更らに衰へず、現に萬國婦人矯風會大會に出席の爲め萬里の波濤を遠しとせず、近々發程の筈にて、斯く多年孜々として倦まざる功勞に酬ひ、旁々其功績を永く紀念せんが爲め、這回島田三郎夫人信子、井深梶之助夫人花子、メリケン孃等の發起にて、豫算六萬圓の壯麗なる一大會堂を建設し、是を女史に捧げんと不日起工の筈なりと、

○看護婦人會の行賞　篤志看護婦人會にては、目下日露戰役に關する行賞に就て、調査中なるが、受賞人員は約一萬餘名の見込

世界のいろ〳〵

◎歐洲一の矮人　は十八歲になる和蘭の娘、パウリナといふものにて、身長一尺六寸體量一貫九十匁

◎佛國の躄村　伊太利境に近き佛國キューロー附近ジャット村の住民二百餘名は、老幼男女皆足の利かぬ不具者にて、いざり車にて行交ふさま見るに忍びざる物ある由

◎野獸の代價　阿弗利加象一萬二千圓より一萬四千圓、印度象一萬圓麒麟は品少きため、亞弗利加象に同じ、上等河馬六千圓、阿弗利加牡獅子二千圓乃至三千圓、同牝獅子千六百圓乃至千八百圓、ベルカル産虎千六百圓乃至千八百圓、駱駝八百圓乃至千圓の價なるよし

◎世界の少食人種　ベドーインのアラビヤ人は、一日の食量柔らかなる牛酪に浸したる棗六七粒に、米飯又は穀粉な小さき椀に一杯喫するのみにて足れるよし、蓋し小食にては世界第一なるべし、

衞生

妊婦に就て

▽一文惜みの百損　妊婦の第一に注意せねばならぬのは、先づ適當なる産婆を見立て、妊娠中より出産の時まで、其注意を受ければならぬ。然るに我國には正式の産婆と稱する者甚だ少なく、俗に取上婆と云ひて、若き折に幾人も子を産んで、經驗があると云ふ位で、此の大役を務むるのだから、甚だ危險千萬である、たま／＼産婆學校の卒業生などが開業して居ても一般に之を嫌ふ傾向がある、と云ふのは正式に産婆と稱する者は、種々面倒な事を注意されて、餘計な金が費ると、大切の出産を素人にまかせ、遂には一文惜みの百損といふ、馬鹿な目に遇ふのを知らないのである、

▽前半期が大切　一般の人は七八ヶ月となりてから、始めて外へ出てはいけぬ、轉んでは大變だと矢鱈に注意するが、七八ヶ月となれば、傍から注意しないでも、妊婦自身が注意するので、左程危險はない、却て最初の二三ヶ月が、自他共に不注意で、車に乘つたり、激しい勞働をしたりするので流産などは尤も此前半期に多いのである、

▽岩田帶　是は普通の人が五月目で、妊婦に締めさせるもので、別段差支へはないが、中には古來の俗言を信じて帶が緩いと胎兒が大きくなり過ぎて、難産に罹るとか又は子供の行儀が惡くなるとか云つて瓢簞な括ツたやうに、緊く締める者もあるが、あれは甚だ宜くない、尤もこれがため胎兒の發育を妨ぐる樣な事はないが、腸や胃を壓迫して、消化器病となるものである、

▽懷爐と腰湯　妊娠中に腹部を冷しては不可ないと云つて、懷爐を入れたり、腰が筋張ると云つては腰湯を使つたりするものがある、是等は流産を起す原因であるから大に注意すべきことである、

▽産襤褸　此事は上流社會にはないが、下層社會には産褥用として、襤褸を準備して置く風習がある、中には他家より貰ひ集めて用うるなど、黴菌を持込んで、それがため産褥熱などいふ難症に罹り、實に危險千萬の事であるから之は是非共脫脂綿を用ねばならぬ

肱を机につけてならば出來るが、上へあげると手が顫べる、この練習に一通りならぬ困難を感ずるやうである、

次に水を含まして描くこと、これも練習に骨が折れるので、ペンを持つた手に毛筆を持つのであるから墨付の工合が容易に會得せらぬのである、故にボツヽヽタリと墨が付くか、或はカスレるかして、調子よく行くには私どもが想像以上の困難らしい、

さりながら、科學的頭腦があるので、形をとる事などは中々巧みなもので、殊に記臆がよいやうであるから、以上の如き運筆上の困難を經來ると、却つて畫が其の眞髄に入つて、どうして斯う旨く描かけるかなど丶思ふのがある、

物は習ふ人によつて、或は花鳥を好むのもあれば、獸類、或は景色等いろ〳〵であるが、始めは線畫をあてがひ、それを附立てさせるのである、すべて見て居る前で、線畫から附立を敎へるので、西洋婦人は意外な親切の敎授法と思ふて居るやうである、

有樂流の濃茶

田畑夏子

濃茶に用ゐる茶器運び終れば、身體の位置を正して目禮し、客また目禮ありて、主人右手にて茶入を取り、左手にてあしらひ、膝の正面に置き、左右の人さし指にて仕服の紐を解き、右手にて茶入仕服のま丶にて取り、左手に受け、右手にて茶入のみを取り元の時の正面に置き、左手にて仕服をた丶み、水指の右に飾り付け、第一の帛紗さばきにて茶入を淸む其方式は、第一の帛紗さばきして、左手に茶入を取り、目八分の所にて茶入の蓋の上を左右むかふより手前にふきて、茶入の横を茶入を廻はして『廻し拭』にふく、而して茶入は、水指の正面、初め飾り付けの所へ納む、

次に帛紗は左右の手にて腰につく、次に茶碗を三つ取にして膝の正面に置く(三つ取とは三たび取かへる故に名づく、其法或は右手にて風爐釜の正面に飾

り付ある茶碗の手前を取り目八分の所にて左手に持かへ、又右手にて茶碗の真の横を持ちて、膝の正面に置き、第二の帛紗さばきして、茶杓を清む、其法は第二の帛紗さばきは左手に受けある故、右手にて茶杓を取り、仰向にして左手帛紗の上にのせ、左手帛紗二つに折りて、茶杓の先の方二度拭き、左手の帛紗の先をはなして、右手の茶杓をぬきぶさし、再び茶杓の先を拭き、茶杓は茶入の上に仰向に飾付け左右の手にて帛紗をしまひ、右の腰につく、次に右手にて茶筌を取り、茶入の右手の少し手前に飾りつく、次は柄杓を右手にて膝につきて持ち、右手にて第三の帛紗さばきして釜の蓋を取る、其方法は第三の帛紗さばきにて、釜の蓋の上の塵を左右にはらひつまみを帛紗にて持ち、蓋の上に飾り置くべし、

さて帛紗は元の通り右の腰につけ、右手の中指と人さし指にて、茶巾を茶碗中より取出し、釜の蓋の上に置く、左手の柄杓は右手に持替へ、釜の湯を茶碗に酌入れ、柄杓は釜の上に引柄杓にして置き、右手にて茶筌を取り、左手は茶碗の左ぎはをあしらひ、右手にて上情の茶筌澁治をなす、其仕方は、初め茶筌を茶碗に入れ、穂先を右と左に輕くおさへて上にあげ、穂先一本にても折損じなきやを改め、若し折損じあれば、左手にてすぐ取除く、茶碗の中に入れ置く時、少し上よりはなしてコチンといふ音をさせる、又茶筌を持かへ、上にあげ、穂先を改め、茶碗の中に入れ置く時、前の如くコチンと音をさせるなり、右の如く都合三たび改め、三たび音をさせる、さて茶筌をふり出して、のの字形に廻はして元の處即ち茶入の右の少し手前に置き、右手にて茶碗を取り左手にてあしらひ、茶碗の湯を一まはゝして、左手にて左脇の建水にこぼす、右手にては茶巾を取り茶碗の中に入れ、輪の所を中指と人さし指にてつまみ、茶碗のふちにかけ、左右の手には茶碗を三度半の廻はし拭にし、茶巾は右手にて元の釜の蓋の上に置き、茶碗を右手に移し、膝の正面の下に置き、左手は左膝の上に置き、右手にて茶杓を取り、茶碗の

右がはふちに替り置をし、又右手にて茶入を取り、左手に移し、右手にて茶入の蓋を取り、蓋は茶入の飾り附あり、跡に置き、右手にて茶杓を取り、茶碗に茶を移す、茲に五人の客ありとすれば、即ち十匙の茶を移す、即ち一人につき二匙の割合なり、さて移し終らば、茶杓は初めのやうに茶碗のふちに替り置して、又右手にて茶入の蓋を取りて蓋をし、元の水指の正面、初め飾附ありし所へ収む、而して茶杓も元の通り茶入の上に飾り附置き、右手に柄杓を取り釜の湯を汲ひ、茶碗に少し移し、殘りは釜にもどして、柄杓は釜の上に元の様に置き、右手にて茶筅を取り、茶碗の茶を穂先にてよく練り、左手に茶筅を移し、但し茶碗に入りたるまゝ、右手にて柄杓を取り、釜の湯を茶碗に汲む（客一人につき二口半の積りにて）柄杓は元の様に釜の上に置き、右手にて茶筅を持ち茶をふりたつるなり、最も左手は茶碗にそへて、身體は少し前こゞみの姿にす、而して點茶出來たれば、茶筅は元の所へ納め置き、右手に茶碗を取り、左手をあしらひて茶碗の向をなほし、右手にて前こゞみし、正客に向けてさし出し、續いて懐中帛紗を右手にとり、茶碗の後へつけて出す、さて客一同濃茶飲み終れば、正客より、主人に御茶碗拜見などと望まるゝ事あるべし、かゝる時は、主人は粗器でござりますが、御笑覽下さいと挨拶し、一廻見終れば、正客より銘、燒、時代、茶名等の問に、ありのまゝを答ふべし、正客より茶碗並に帛紗を返せば、主人は右手に茶碗をとり、膝の正面に左手にてあしらひ、又右手にて帛紗を懐中に納むるなり、

而して右手に柄杓をとり、湯を汲みて茶碗にうつし柄杓は元へ置き、右手に茶碗をとり、左手にてあしらひ、茶碗の湯を一まはしゝて建水にこぼし、右手にて膝の正面に茶碗を置き、取り柄杓にて水を茶碗に移し、柄杓に元の釜の上に置柄杓にしておく、右手に茶碗を取り、左手は茶碗にあしらひ、終りの茶筅湯治、即ち駐解の茶筅湯治をするなり、終れば茶筅は元の所へ納め、右手に茶碗を持ち、左手にあしらい、廻して左手に建水にこぼし、右手に移して膝

の正面に置き、右手に茶巾を取りて茶碗に入れ、左手をあしらひて、又右手にとり茶碗の左脇に入るゝなり、第二の帛紗さばきして茶杓を右手に取りて拭ひ清む、右手にて茶杓茶碗にふせて置く、両手にて帛紗をしまひて茶碗を三つ取にし、釜の正面に飾り付け、此時正客より御両器拝見といふ挨拶あり、例によつて粗器で恐入りますがなどゝ答へ、右手にて茶入を取り、膝の正面に両手にて置き、第一の帛紗さばきして茶入を廻はしぶきにし、両手にて下に置き、帛紗を腰にしまひて、右手に茶入を取り、向きを正して正客の方に右手になるやうさし出し、又右手にて茶杓をとり左手にあしらいて向を正し、正客の右手になる様に茶入並に茶杓の両器をさし出す、而して茶碗は水指の正面に飾替へをなし、取柄杓にて水指より水を釜にうつす、数は前以て一定し難し、其釜の湯の有無によりて定むるものなれども、二杓三杓或は五杓又は七杓の数に移すが例なり終りに湯加減をはかり見て、柄杓の所を釜の上にてよくこぼし、右手より左手に移し、左手に柄杓を持ちたるまゝ左の膝につき、右手にて釜の蓋をし、左手の柄杓を右手に持替へ右手にて蓋置の上に置き、右の手に水指の蓋を取り、左手にてあしらひ、右手にてつまみを持らて、水指は蓋をなす、此時正客は進み出で、両器を次客と己の間の所まで引き置く主人少し膝を左に廻はし、先づ柄杓を一文字にさゝげて右手に持ち、其指先に蓋置と共に持ち、左手には建水を左脇に下げて、左に向直りて水屋は退く、次は両手を両膝に自然に垂れ、下座の足より静かに進み出で、茶碗の正面に右左と引退りて着座し、右手に茶碗をとり、左に受け、右手にあしらひてさゝげ、座を立て、右に廻りて水屋に退く、而して茶巾をすゝぎ、水指に水をうつしなどして、また次の薄茶の仕度をとゝのへ、萬事手落なく注意し居るうちに、正客初め客一同所謂御両器拝見を終り、正客より主人着座の右脇、即ち道具畳の處に返す、此時主人水屋口より静かに進み出で、正客より返したる両器の方へ向替り、左右と引退りて座に就く、

雜錄

女子の愛情

文學士　伊藤南陽

吾人は愛の問題を論ずるに先ちて、教育のおもに女性の責任たることを述べずんばあらず。如何にして教育には女性の責任おもきかといふに、人の此の世に生るゝや、その成長して、羽翼の備漸く成るに至る迄は、必ず母の教育によらざることなく、母の教育は、父の教育に、幾層倍するが故なり。蓋は女性は男子に比ぶれば、綿密丁寧にして、細微の事迄も能く行届くのみならず、男子の如く外出すること少ければ、能く其子を省み、家庭の教育を施すに便利なればなり。是を以て教育せらるゝ者も、父の性に薫陶せらるゝよりも、母の性に薫陶せらるゝ方尤多く、而して其薫陶せられし性質は、唯に小兒の時のみならず、成長して後も、自ら習慣となりて、容易には消滅する者にあらず。これ小兒の時の感情は、至りて潔白、至りて純良なれば、目に觸れ、耳に聽く所に、一點の邪念だになくして、其心に留ればなり。故に其子を善良になすも、不善良になすも、婦人に多く關する者なれば、教育を以て婦人の責任とするも、理なきに非るべし。

女性にして、既に此くの如き責任を負ふ者ならんにそれをして、能く其責任を遂げしむる方法なかる可らず。總じて教育の方法に付きては、既に諸教育家の、慇懃に陳述せることなれば、今更吾等の、喋々する迄もなきことなるも、吾等は唯、内心上の方法に付きて、一言せんとするなり。内心上の方法とは、女性をして、その中心より湧出する、眞正の愛情に富ましむることこれなり。

所謂愛情とは、貴賤尊卑の差別なく、各人一般に有

する所なり、宇宙の森羅萬象に、地球の引力なければ、悉くの物を地軸より分離すべきが如く、人間社會に愛情の繼ぎ合すこと無からんには、社會は爭闘の場となりて、君に忠臣なく、父母に孝子なく、夫婦の道は敗れ、兄弟姉妹の義務は亡びて、人倫の大綱は、悉く亂麻の如くなるべし、愛情は、此くの如く、人間社會に肝要なる關係を有する者なれば、苟も眞正の愛を以て、教育の方針となさんには、好結果を得ること疑なからん。

然れども、吾等が云ふ所の愛は、通常一般の愛を云ふにはあらず、蓋愛と云へば、廣大なる言にして、人の愍然なる有樣を見て、中心に可憐の念を起すも愛なり。父子兄弟の間を固むるも愛なり。男女の交情を結ばしむるも愛なり。總じて、忠と云ひ、悌といひ、戀といふも、能くこれを推し究むるときは、皆普通一般の情より起るなり。而して、此の普通一般の愛は、時によりては、偏愛となり、或は姑息の愛となり、或は利己心の愛となり、戀愛となりて、常に定まりあることなし、故にこれらの愛は、純正無垢の愛と云ふこと能はずして、到底教育の方針とはなす可からざるなり。吾等が謂ふ所の、教育の方針たるべき愛は、内心より湧出する者にして、己を忘れて他を益せんとするにあり、私利を捨て、公益を計らんとするにあり、すべて愛の度を層一層高くして、沸騰點に迄昇らしめたる熱愛を云ふなり、凡そ教育の責任を負ふ者は、此の内心より湧出する、此の高度に迄沸騰したる、愛熱を以てしたらんには、如何に粗暴なる、如何に強情なる者と雖、決して其教育に化せざることなかるべし。彼の虎豹の猛なるも、これを馴らすに、その法を以てしたらんには、其命に從ふこと、柔順なる綿羊に異ならず、情なき獸類すら此くの如し。况や人をや。近頃其子弟を教育する婦人の情態を察するに、或は偏愛に陷るか、或は姑息に流るゝか、或は利己の愛に陷るかにて、一も當を得たる者を見ず。

凡そ愛情に富める者、女性より過ぎたるはなきを、

如何なれば、眞の熱愛を以て、其子を教育する能はざるかといふに、畢竟、母は母たるの道を失ひ、師は師たるの道を失ふに外ならず、凡そ人の母たる者は、其子を教育するに、徒に其身を成長せしむるを以て足れりとすることなく、必ず其精神上にも、注意を怠るべからず。己先づ充分に、愛國の心情を養ひ人間出世の目的と、人の人たる道を盡さしめんとの熱望と、堅固不抜なる精神とを以て、其子を勇猛忠烈なる士に、女ならば、貞操節義なる者に、教育せばやと心掛くるこそ、母たるの本分なれ、苟も此の靈妙なる精神の、常に其身より離るゝことなからんには、熱愛の情の發せざることなかるべし。誠に彼の樹を種ゆる者を見よ、終日培ひ灌ぎて、倦むことなきが如きは、後日に善木たらしめん爲ならずや、まして萬物の靈たる者を、養成せんとするには、其注意心勞の肝要なること、種樹の比ぶべきにあらず而して又、人の師たる者は、母たる者に比すれば、一層の注意あらんことを要す、それ人の、其子を他人に委ぬるは、其人が美事吾が子を善道に感化せしめんことを、信認するがゆゑなり。然るを師たる者、其本分を忘れ、徒に己の生計の爲とか、將た己れの名譽の爲とかに止まりて、終日其授業時間を滿つるばかりなれば、何ぞ傭人と異らんや。

夫れ金の爲に其身を勞する者は奴僕なり。眞實の中情より家の爲よかれとて、其身を勞する者は、家人なり、人の教師たらん者は、大にしては一國より小にしては一家より、尤も貴重なる責任を負はしめらるゝ者なれば、いはば一國一家の母たるの責あるなり。奴輩とは、同視すべき者にあらず、而して母の心の其子に寫るが如く、師の心も其弟子に寫ること、恰も、滑かなる鏡面に、俤の寫るが如し。されば其子弟の孝と不孝と、あるは忠と不忠とは、其教育の如何による者なれば、教師たる者、おのれを忽になす可からざるなり。吾等は近世教育家が、如何なる愛を以て、其子弟を教育するか、又如何なる愛が、教育に適用すべきかを見ん。

第一には、義務的の愛なり。此愛たるや、近世教育家が施す所の愛なり。彼等謂へらく、吾は教育の責任を負ふ者なり、若愛を以てせざらんには、吾本務を缺く、又曰く吾若子弟を愛せざらんには、人望を失ふと。吾が本務を固守するといふことは、道理上、決して惡しきことにわらざるなり。然れどもこれを若し公益の爲に固守すれば可なるも、只自愛の爲にせんは、これ全く義務的の愛、利己心の愛にして、所謂愛を以て器具とせんとするなり。此くの如く不深切なる教育を受くる者、亦不幸ならずや。假令種々の



工夫を運らし、巧言令色もて、人を導くと雖、熱愛なくんば、好果を收め難し。かゝる教育家の手を以て忠勇義列の人を養成せんとするは、覺束なき事とぞおもふ。教育家たる者愼まざる可からず。

第二は、天然の愛なり。己に近き者は、これを愛し、美なる者は、これを賞し、憫然の者に接しては、惻隠の念を生ずるは、人間の生れながらにして有する、情性にして、これを天然の愛と云ふ。此の愛たるや、外面より附着する所の、義務上の愛に非ず。又利己

心の愛にもあらずして、躬親らにすら、那邊より來るやを知らざる程なるも、其注意の如何によりては、善にも不善にも、傾くなり。即其天與の愛を愈高尙に保存すれば、遂には度を高めたる熱愛とはなるも、若し放恣ならしむるときは、神靈上を遠く去りて、肉身の愛、即姑息の愛、偏愛、利己心の愛に陷り易きものなれば、此の愛に沈溺せざる樣注意するは教育家の務なり。

第三は、天然以上の愛なり。善と見ては、熱血を注ぎてこれを勸め、惡と知りては、泣涕を以てこれを諫め、國の爲、君の爲、親の爲、凡て公益に關することなれば、自己を犧牲として、他の利を圖るに、是れ天然以上の愛なり。これぞ、吾等の方針と賴む所の熱愛にして、これを以て教育したらんには、國家に有益なる、勇猛且義烈なる者、多く出でん、貞淑婉順なる女子の、いかで出でざるべき、古より賢哲の士は、多くは慈母の熱愛の養成する所なり。愛の功も亦大なりといふべし。されば、聖經中にも、愛を以て、三德中の首大なる者とはなしぬ。世の教育に熱心なる婦女たち、能く此の首大の德を方針となして、他の枝葉の方法たる、義務的の愛に流るゝなく、天然の愛に甘ずるなくんば、其結果として顯はるゝ所、尠からざるべし。聊か愚意を述べて、世の人と共に、これを愼まんことを希ふといふ。

動物の家庭

工學士 長橋芝翁

こんな題をかゝげますと、お前の親類は動物かとお尋ねになるかも知れませんが、ナル程御尤で、左樣でござりますと答へる外仕方がありません、そうかといつて法律上の親族關係があるのでなく、つまり生物學上進化論的に淺からぬ因緣のあるといふ意味です、それで動物然かも野生的動物の家庭を見るのは實は六かしいので、人間が恐ろしいのか、人間の住居から餘程遠ざかつてゐて、その上人間を見ると

早速其の父母が自分の子を安全なところへ隠すのです、殊に母親は一番心配して其子を人間の眼から見えない樣につとめます、夫でどうも詳しいお話をする丈けの材料はありませんが、只聞いたり讀んだりしたことから拔出して、一寸動物の家庭をのべて見ましやう、

手のかゝる子程親は可愛いと申すことはヤハリ動物界にも行はれて、親子の關係の深さは一人前になる迄の年限に正比例する樣です、一人前になる迄の年限にもいろ〳〵あつて、犬や牛屬は一二年たてば立派に獨立しますし、鷄雛は此世へ生るや否や活動して食物をあさりますし、又鵞雛は生れて數日の間にもう人間よりは上手に走ります、然るに人間はどうかといふにその比較はプリニー氏の言を引くが好いでしやう『他の動物は產れると直ぐ丈夫で、走りも飛びも又游ぎもするが、人間の子ときちや只泣く計りで、その他歩くこと話すこと食ふこと等は凡て必要に迫られて漸く學ぶのだ』而して一人前になるには少なくも二十年たゝねばならぬのですもの、なか〳〵容易の事ではありません、動物の中にもお父さんの善し惡しはさま〴〵で、一般にいふと鳥類には親切なお父さんが多いそうです、之に反して哺乳動物は却て思ふた程でないとは實に妙でありませんか

御承知の通り動物には、一夫多妻だの多夫だのといふことが公に許されてある樣ですが、中には一夫一婦の動物もあります、どつちのお父さんが子を愛するかといふに、それは一夫一婦の家庭の方です、一夫一婦でない家庭はそれこそ風波の止む時がないといふ評判です、之は無理ならぬことでしやう、着物なども即ち羽色毛色なども一夫一婦主義の動物は男女ともお互にじみで、つまらぬ洒落方はいたしません、どうも言はず語らずの間に一夫一婦といふ眞理を天然が教ゆる樣に見えます、

草食動物と肉食動物はどうかといふに、能く世間では草食動物が親切な父母となるだらうといひますが、之は非常な相違で、獅子や虎は、却て牛や馬よ

り子を可愛がります、又鳥類も同樣で、鷹などは生れつき殘忍と思はれて居ますが、その子を愛する熱情は盛なもので、子の爲には死をも顧みません、子が捕はれるとその子を養はん爲に追ふて行き、終に子と運命を同じうする例は決してめづらしくないのです、見かけ計りやさしくても必ずしもやさしい父母とはきまりません、

狐の如きもなか／＼感心なもので、家庭に於て盡くすことは一通りでありません、尤も牡狐は牡犬と同樣でどうも子供に親切どころか無頓着です、けれども母親が亡くなれば打つて變つて子供の世話をいたましす、バゲンステヘル氏の觀察によりますと、狐の子は産れた時は眼も明いて居ない質に憐れなものだそうです、最初の發達は遲くて十四五日もたゝねば眼が開きません、でもその間に齒は大抵出揃ひます、先づ子が産れると牝狐は數日間通して子の側に居ながら母親らしく介抱いたします、又その隱れ場所は用意到らざるなしです、それから一ヶ月めか六週間めになると、ボヤ／＼毛の外套いでたちといふ風で子狐先生、ソロリ／＼と穴から出て來ては、ひなたぼつこをしたり、遊戯にふけつたり、アレが狐の子かと思はれる程淡泊に見えます、

食物は皆母が持運んで來てくれます、御馳走の品數はいろ／＼で、アブラムシ、蛙、鼷鼠、鳥といふ具合に澤山あります、それを一々實物教示法で、どうして捕へるか、なぶるか、食ふかを自身でやつて見せます、一を聞いて十を知り顏に子供は早速覺えて演習をする、之を母はうれしそうに眺める、その樣子といふと丸で吾子の自慢をして居る樣です、尤も此時分は特に子の危險を恐れて、ガタといふ音を聞いても早速皆穴へつれ歸ります、特に獵師がやつて來れば穴から穴へと隱れて逃げますが、いよ／＼危險となれば萬策つきて今は仕方なく、吾身を忘れて必らず一匹丈けは口にくはへて一目散にかけ出します、天氣の好い夕方などに、子供達が穴の口に遊びながら父母の歸りを待つなどは、丁度人間の子も同

じことです、而して好い土產でもある時は非常な賑ひで歡迎をいたしますが、もし又待つても〳〵父母の歸らぬ時は悲しげに鳴きさわいだ揚句、中には父母の家を脫走するのもあるそうです、

前に申しました通り、產れた時の有樣や發達の遲いところを見ると、どうも猿屬が最も人間に似て居ります、猩々の如きは充分の發達をするには十六年乃至二十年もかゝるのです、猿の父母は父母らしくて誠に揃つた親だと申します、中にも母親は子を愛すること甚しく、人間の言葉に『猿の愛』といふて引用される程で、餘り可愛がつて子を殺す事もあり、又吾子の死を悲しんで自らも死する例は澤山在ます、どうも野生の猿の家庭を見るのは六かしいのですが、幸にフォンコッペンフェルス氏は猿屬のゴリラ一家を山中で觀察したそうです、ゴリラは外敵を恐れて十四才頃迄は親と同居するといふことです、之より同氏の話を少しく記して見ましやう、

『アイバ樹の陰からソット眺いて見ると、彼方にはゴリラ一家が菓物を喰べて居る眞最中です、父と母と二人の子供で、その子は一歲と六歲位に見えました、喰べ具合はどうかといふに、父の方は無頓着にズン〳〵自分のお腹さへふくらせば好いといふ風でしたが、母の方は子供のことを先きにして子供に澤山喰べさせたいとつとめて居りましたやがて、菓物がなくなると母ゴリラは早速木の上へ登つて、一生懸命に枝を振つては實を落して居るのです』

『父ゴリラは口をムゴ〳〵させながら側の小川へ水を飲みに來ました、私はそのゴリラに眼を離さないで居りましたが、デュチエリュの話やら、土人の妄說を讀んだり聞いたりしたものですから、此時は大にビクついたのです、併し間もなく落ついたものゝ、どうですそのゴリラは驚かされた樣子で私の隠れて居る木の方へドシ〳〵やつてくるではありませんか、尤も不斷銃口をそれへ向けて居りますから少しも心配はありません、ゴリラは近くへ來てツト踏止りジット私の方を見ましたから、機を失はない樣に

と一發放して直ぐ丸をつめかへ、後の用意をいたしました、モウそのゴリラは致命傷で斃れたのです、從者の黒坊はどうしたか知らんとあたりを見まはすと、銃を持つたまゝ後に立つてワナ〳〵振へて居りました、定めて顔も青ざめたに相違ないのですが、黒くてわかりませんでした、その間に子供達は叫んで藪へ逃げ込むし、母ゴリラは木から飛降りて子の後を追かけて行きました、此光景を見て居てつい母ゴリラを射殘しました」

ゴリラなどはどつちかといふと家族々々が皆別々に住んで居りますが、尾長猿などは一般に群居生活をいたして居ります、性質からいひますと、ゴリラの方は内氣で沈み勝です、之に反して有尾猿は先づ生れながら滑稽のたちです、之からブレム氏の話を一節上げて見ましやう、

「猿の一群が食事に耽つて居るのを見るのは實に面白いものです、其鋭敏、大膽さはいよ〳〵以て興味があります、安全と思はれる時は母親達は子供を自由にしてお互に遊ばして置きます、尤もその間でも決して母親達は油斷しないで自分々々の子供をチヤンと見守つて居るのです、確かに自分も子供も安全といふ場合には、今度は全く先導者に一任して敢て心配の風も見えません、其先導者は又感心なもので、自らは時々食事を止めて、後足で立ちながら周圍の樣子を注意して居るのです、而して何事もないときは温和な聲で、ナーニ皆が心配するにや及ばぬといふ意味らしい叫び方をするし、又危險の時はそれこそ恐ろしく響き渡る聲で警戒を與へます　スルト皆が吾先きにと集まつて來る、母親は自分の子供を呼び寄せる、食物は持得る丈け持つ、サア之から逃げ出すのです、アノ大勢の子猿をまたゝく間に處置する手際は誠に驚く外はありません、

「逃げて〳〵逃げのびて此處迄來れば安全と思ふと先導者は直ぐ木の上へ登つて全軍に安心せよとの指揮をする、皆が集つて來るとなか〳〵忙がしい仕事が始まる、何かといふと一種の假病院が建つのだ逃

げる最中イガやらトゲやらに刺されたものもあれば、岩角で負傷したものもあるので、お互にそれを檢査してもむやらさするやら、重傷者には一層の手當をほどこし、全身をくまなくあらためてそれ〳〵相應の療法を施すのです、重傷を負ふた母の側で無心の子供が愁然として爲ところを失ふた樣は、見るからに同情に堪へません』

或點から見ると有袋動物の子は却て人間や猿の子よりも役に立ちません、有袋動物の多くは御承知の通りカンガローを含めてオーストラリアの產です、勿論アメリカの產もあります、之が哺乳動物と異なる點を擧ぐれば次の通りです、

有袋動物の子は小期間の子宮姙娠を經て生れますが、生れた時は實に不完全なものです、母は之を腹袋に入れ、骨や感覺の發達する迄は此處で保育いたします、此袋は一種の巣や避難所計りではない、いはゞ第二の子宮といつて好いのです、その後發育につれて子供は時々袋から遊びに出ますが、充分の發達をする迄は此袋の中に住んで居ります、或有袋動物は眞の子宮姙娠は僅か一ケ月餘りで、所謂第二の子宮で養育される事が八七ケ月のものもあります、

エチアス鼠は普通の鼠よりは小形で、スリナムの產ですが、之も有袋動物の一種で、此子供は直ぐ袋から出て母の脊中で育つのです、木登りが上手で木の頂上に住んで居て、小鳥や卵を常食といたします

前にも申した通り殆んど凡て鳥といふものは善良なる兩親を持つて居りますが、此に一つ驚くべき話があります、卵を孵へす間母親を穴へ押込めて嘴の外は出されない樣にする父親がありますが、皆樣御存じですか、此鳥はホルンビルと申し亞細亞の南部、マレー半島、中部南部亞非利加に產し、嘴大にして角質の冠を持つて居ります、卵を孵へす時になると木の空所へ入れられて、其上を閉ぢられますが、僅かに嘴丈け出される樣になつて居りますから、父親が外から食物を嘴から嘴へ傳へるには差支はないのです、勿論卵が悉く孵へる迄は此穴に止るし、或時

は孵へつた鳥が充分飛ぶ様になる迄止ることもあります、その間母親は大抵羽を落して仕舞ひますし、又父親は家族を養ふ爲に夜晝の別なく奔走し、自分では碌々喰べないで皆な妻子に與ふるのと食物を集める苦心とで、骨と皮計になるそうです、

土人の説では、之は事によると母親が孵卵の義務を怠る恐があるから、强制的に幽囚するのだと申します、而してもし母親が少しでも義務を忘れ、不忠實のことがあれば、父親は情を忍んでその嘴の出入する孔をふさぎて母子諸共窒息死に至らしめるそうです、併し科學的に之を解釋すると、木の空所へ入つて出られない様にするのは母親自身がやるので、一つは羽が脱けても巣から落ちない爲と一つは、外敵を防ぐ爲と、思はれます、

兎も角つまらぬ動物から人間に至る迄、子供を育てるといふ事は、父母にとりて重大な問題となつて居る何も動物を辯護するわけではありませんが、動物の性行習慣を研究して見ると、或部分の人間より優つて居る點が決してないのではないのです、

勤勉なる婦人

篤行ある婦人

老婆の成功談

深川區森下町三十九番地鷄卵商森川新之助(五二)妻お雪(四六)の兩人は、元と千葉縣印旛郡大杜村字中ノ口の百姓にて、失敗の結果新之助は東京へ夜逃同樣に稼ぎし、跡にはお雪が借金取に取捲かれて、途方に暮れしが、此れも鄕里には居られず、懇意の人より惠まれたる天保錢三枚を懷中し、夫の跡を追うて出京せしは、明治十九年の末なり▲お雪は先差當り餅屋に住込み、年暮の賃餅を一生懸命に搗き立て、漸く五圓の搗賃を貰ひ、尙夫新之助の力を俟たず、獨立にて八百屋を始め、日々天秤を肩に青物を商ひ歩きしが、僅か五圓の資本なれば、商賣思ふに任せず、商品の切れたる折は松林へ行きて枯葉を集め、それを燃付として賣歩き、寸時も休まず立働けり▲或日日本橋箱崎町の土州邸内に、天秤棒を擔ひしまゝ、庭先に立入り、若衆連の擊劍の稽古を見物し居たるに、若衆は如何だ一本稽古せぬかと戯れしに、お雪は私も昔は鎗一筋の武家の末なれど、今は見る影もなき八百屋風情、劍術などは出來ませぬと答ふるを、然らばと肩なる天秤棒押取り、相手の面を打つと見せ懸け、甘く脚を拂うて首尾よく勝

を取りたるを、最前より奥座敷に見てありし山内容堂公は、お雪の勝氣を嘉みし、明日より毎日餠を持參せよ、褒美として永く買うてやらんと、お褒めの言葉を下されし上、御馳走に預かりて退きし事あり、▲斯て翌年七月五厘の金が十五圓に殖ゑければ、人並に手足揃ひし上は、一廉の商ひ出來ぬ事はあるまじと、奮發心を起し十五圓を夫新之助に渡して、近在より鷄卵を仕入れさせ、其を籠に容れて、自ら背負ひ、此處彼處と市内を賣り歩きしが、抑も成功の端緒にて、雨雪の厭ひなく朝夙くより夜更くる迄、身にはつゞれの單衣一枚に、破れし金巾の股引を穿き、家を出る時は跣足なれど、途中の古草鞋を拾うて其を穿き、千辛萬苦を厭れしが、若し玉子の品切れとなりし日は、淺野タンク會社石炭運搬の日傭取となり、男に倍して働きぬ▲土州邸に若衆を打倒せし程の豪氣な性質なれば、市中の行商にも、宿屋料理屋等殆んど限なく注文を聞き、一旦は謝絶られても、二度目には必ず賣込み、極めて根氣よく商ひしが、日本橋傳馬町の旅店山田屋の如きは、頻々注文を聞きても、更に購ひ來れざりしが、とう／＼四十八回目に、喧嘩腰の談論の末賣込みしが元にて、今尚花客として出入を續け居たり▲お雪の本願は、一生に一度普通の商人と爲つて見たいといふに在りて、夜の目も寢ずに夫を勵まし、眞黑になつて働き、漸く三十圓を得し頃、長女を產みて其時に十五圓を費消し、產後二十一日經たぬに、又賣に出懸け、稼ぎ／＼て百圓を儲けし時同區東六軒堀の、九尺二間の家を出で彌勒寺橋際に移り、家財とては竈一つ、釜一つ、籠一つの外何もなく、商賣の餘暇には、近所の飲食店に手傳ひ、寧ろ人間わざと思へぬまでに働けば、毎夜十本の指より、鮮血滴たり、傷の癒えたる事なかりき▲此の如きこと十餘年、晝夜草鞋の紐を解かぬと云ふ程、一心不亂に稼業に努め、七年以前に現住所に轉じ、其後も行商を忘れざりしが、過度の働きに、稍々健康を害ひ、四五年來行商は中止し、今は五人の雇人を使役し、數箇の家屋土藏を有し、電話を引き、却々に手廣く商賣し、昨今は一箇年營業高六萬八千圓に及び、七百圓の納税を爲し居れり▲お雪は今日の成功を見たるも、決して以前の苦辛を忘れず、食事衣裝抔は更に以前と變らず、矢張盲縞の木綿服を纏ひ、頭髮は自分に束ねる外、髮結ひを頼みしは臍の緒切つて、只二度他家の婚禮に招かれし折結ひ立てしのみなりと云ふ▲金といふ財產は、死んで持つて行かれるものでなし、私しの眞の財產は子寶許りですとは常にお雪が他人に語る所なるが、實に目出度き兒澤山の幸福者にて、長女いし（十九）次女いと（十八）三女まさ（十三）長男守之助（十二）次男義光（十一）四女こう（十一）三男竹松（七つ）の七人ありて、學年の子は學校へ通學し居れり。

篤行の女丈夫

富山縣西礪波郡松澤村大字小神五百九十二番地平民農宮ノサ子（四九）と云へるあり、家は代々農を業とし、舊高約七白石を有する可なりの財產家なりしが、ノサ子の夫長二は、明治十五年十二月中病死せしより、遺兒長次（今年卅一歲）を保育して、能く家

政を勵み、實母スイ子に孝養に、己れは宮家に未亡人として、最も貞實に働き、夫死亡後約二十五年の間に、尠からざる財產を作り、又近所界隈に於ける模範的婦人として、令名嘖々として傳へらるゝに到りぬ▲戰爭中の女史　如上の氣概なるものから、日露開戰に當つて軍隊の送迎、傷病兵の慰問、遺族の扶助、及び其の慰安、出征軍人家族の見舞、戰死者葬儀への會弔、寢食を忘れて東奔西走、郷黨を擧げて其の至誠に感激せしめたるの事實は、實に左記の美擧によりて知らる可しとは所轄役場よりの所報によれば、左の如し、

▲義勇艦隊建設費に金千二百六十餘圓を寄贈せる事

▲寶丹一萬二千五百袋を　包毎に沐浴齋戒して讀經の上、南無阿彌陀佛の六字を自書したるものを第九師團に寄贈せし事

▲金澤豫備病院收容の傷病兵を慰問し物品の寄贈をなせし事前後六十回

▲國民後援會へ毛布二十餘枚寄贈の事

▲海軍々人に繪葉書一萬六千組寄贈せし事

▲出征軍人に繪葉書二萬枚寄贈せし事

▲國債に應募せし金額毎回金一萬圓宛

▲赤十字社へ金二百圓、石川縣出征軍人家族救助料へ金百圓、富山縣同上三萬圓、自分の郡の軍人奨勵會へ百圓

以上は其一部分を擧げたるものにて、戰爭後の今日に到りて、尚ほ女史の許へ到着する禮狀、謝狀の數日に幾本なるか知れずと云へば其の慈善の程も推察し得らるゝなり▲古戰場を弔ふ　戰爭後は、專ら金澤豫備病院なる傷病者の慰問に力を竭し居りしも尚ほ足れりとせず、遠く滿韓の地に於て戰病死せし忠魂義魄を親しく弔慰せんとて、長男長成氏と與に同縣伏木港より便乘して、日本海を航行して韓國釜山に上陸し、京城、平壤、定州、義州、九連城さては安東縣の方面より、更に旅順に廻り、夫れより北進して昌圖に到り、引返へして歸郷せしは、去る五月下旬のことにて、前後約三ケ月の間、各地の古戰場に硝煙彈雨の迹を濕れて、日夕讀經供養に戰死者の英靈を弔慰せり▲婦人會と女史の家族　ノサ子女史、今は愛國婦人會富山支部の幹事にて兼ねて篤志看護婦人會富山支部長たり、女史の一家は前記の長男長成氏同氏夫人チサト子(二十一)其の長男長眞(一つ)及びノサ子の實母スイ子(七十二)の二男三女の水入らずの外に二三の雇人あり家庭頗る圓滿なりと。

▽小兒と避暑地　九夏三伏の休暇中歐米にては、各小學校が敎師をつけて、生徒の全部若くは一部を、或る適當の避暑地に送り、暑熱を避けしむると共に、地理歷史博物等の實地研究をなさしむるの方法あり、費用の點よりするも、至極手輕にて、中以下の家庭にある小兒も、亦久時熱鬧の衢を離るゝを得、且つ娛樂と趣味ある研究とをなすを得れど、我邦にては未だ此等の方法設けあらざれば、一般の家庭にある小兒の避暑せんは、經濟其他の事情にて、不能の向あらん、然れど小兒一人が避暑せんには、何程の費用にてもなければ、父兄に於て學校に交涉し、敎師の附添を依賴して、同級生の團體をつくり、斯くして暑を適宜の地に避けしめば、健康上よりいふも、其他より見るも體育敎育を兼ねたる、最も有益の事たるべしといふ、

勞働に貴賤なし

照鄕隱士

日本には古來惡しき習慣ありて、成るべく人を怠惰に柔弱に不經濟に虛飾になる樣に勸める仕掛になり居るなり、其は何かといへば、兎角働いて生活することを賤しみ、無爲徒食する事を貴ぶの一事なり、此の惡習慣は男女一般の通弊なれども、殊に婦人就中中以上の婦人に多し、斯る風は長き年月の間、其時代々々の思想につれて自然に馴致した結果にして今正面から斯く言ふのは酷であるか知らねど、現在の事實は正しく其通りになり居ることそ遺憾なれ、勿論古來農なり工なりは國家存立の根本なりとの本文ありて、之を重んじ之を勸める文句も亦多くあり、且つ畏くも古く　皇帝陛下が親しく農夫の揷秧を御覽あらせられ、　皇后陛下が御手づから桑を摘ませられて、農業を勵ませ蠶業を勸め給ひし例もありて、上下擧りて働く事の大切なるを知らざる譯にはあらざれども、其處が時世の弊風で、兎角働く事を厭ふ風を生じたるなり、さて其の勞働を厭ふ風を生じたる原因を考へ見るに曰はく、同じ働くといふ中にも、精神上の働と形體上の働との間には自ら貴賤の差等あり、精神上の働を爲す人は、智識の能力によりて靈妙な功を成す事ゆゑ貴く、形體上の働を爲す人は、智識なく思慮なきゆゑ形體筋肉の力を以て作業する所謂犬馬の勞を執るので、前者に比して後者の劣ること數等で、誠に淺間しき限りなりと、此の考は餘り物を小さく見て、世間を狹く考へたる假見にて大なる間違なり、今少し目を大きくし量見を廣く持ちて、人間を自然の上より考へ見る時は、人は精神も形體も共に働く事が本分となりて出來居る物なる事が了解るべし、早い話が下等動物類は皆自然に衣服を具へて生れ出で、食物も隨意に取りて食へば宜い樣に出來て居るに、人間は然らず赤の裸體で生れ出で、自分で工風して衣服を作り出して被ねばならず、食物でも自然物を取りて食ふにしても、鳥獸の

程無造作には行かず、必ずや心身を勞して汗水たらして働いた結果で漸く生活が出來る樣になり居るにあらずや、又鳥獸類は其の羽毛なり其知能なりが、古も今も同じ事で進步發達する事無けれども、人間は精神も働く程智能が發達し、形體も働く程筋骨が强健となり美しくなるを見ても、働く事が人間の原則なる事が知らるゝなり、若し此の原則に逆ひて働かぬ者は、智力も發達せずして鈍く、身體も發育せずして弱く、動もすれば病に冒さるゝ事は、明な規則となり居るなり、

そこで此の働くといふ事は人間一般の原則で、人々全體に働いた結果で、人間社會の生計が立ち行く事なれば、人と生れたる者は、各々其の分に應じて相當の働きをするのが天然の本分なり、此の本分を怠り働かずして生活して行かんとする者は、即ち價を拂はずして物を持ち行かんとするのと同じ道理といふべきなり、斯く考へ來れば、働くといふ事は人の本分を守り、天意に從つて人世の幸福を進め、社會に對しても務めを盡す譯なり、其の精神上の仕事とか形體上の仕事とかは、其の人の境遇と場合によつて時宜に應ずるので、何れとも貴賤を別つべき者にあらず、苟も正當にして人生自他の益になる事ならば、勞働に貴賤上下の別なく皆一樣に神聖なる者なり、

然るに日本には古來風敎を資くる爲に儒敎を參酌したるに依り、自然と支那の書籍を重んじ、其の文句を以て標準とする傾を生じたるが、其れ等の書中には心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人を養ふとか、君子無ければ野人を治むるなく、野人無ければ君子を養ふなしとかいふ風に、心にて働く方を貴く、形體で働く方を賤しく、君子とか野人とか、餘程の差等ある樣に名稱を附し、又商人は錙銖の利を爭ふとか、小人は利に喩るとか云ふ意味の敎も、其趣意が兎角實利實益を賤しむ樣に取られて居るので此惡習慣の原因の一となりたらんと思はるゝ也、斯かる思想の中に感化せられ敎育せられて、數代數

十世段々繼承し來れる人情なれば、今日俄に之を改めて急に舊慣を一洗するといふ事は、素より行はれ易き事にはあらざるべし、尤地方の農家抔では、男女とも勞働を以て當然の務と心得居り、間々怠惰なる者あらば一般から擯斥せらるゝ風あり、誠に結構な事なれども、此れ多くは質朴なる下等細民にて、是より下賤の勞働者といはるゝことを甘んじ居る徒輩にて、少し位置ある家とか、役人の家族とかとなると矢張り驕に傾き虚飾に流るゝなり、地方の都會にて殊に然り、例之ば縣の屬官とか、郡吏の家位でも、官吏の令夫人たるものが他出するに、下女も連れず獨歩しては品格が下るとか、課長の令孃ともあるものが襷掛けで臺所の用をする抔は、體面を傷ふとか、口に出して言はぬまでも心には斯く考へて、女の手間は十分あるに拘はらず下女を置いて、勝手向其の他を任せ、家人は成るべく手足を働かさず、優遊徒食するを以て自ら誇りとなし居り、又他よりも之を稱して彼のお方は重い物といつたら茶碗位、堅い物といつたら箸位より持つた事のない幸福な身分だとか、深窓の内に養はれて世俗の事携はらない貴い方だとか、兎角怠惰優柔であつて、世事に迂遠なのが貴い幸福な看版となり居るなり、抑今日は如何なる時代なるか、畏くも皇族の姫宮殿下達でさへ、徒歩で學校へ御通學遊はさるゝ位で、それ以下貴族富豪は云ふまでもなく、學校では皆一樣に、讀み書の外裁縫編物等の手藝を始めとし、料理洗濯家事等一切の事までも心掛けて、實地の研究をなし、戸外に日光を浴びつゝ手足の運動を勉め、身體を鍛ひ藝能を練り、一家の爲め一國の爲め、分に應じて力を致す用意に餘念なき有樣にあらずや、之に比べて考ふれば、僅の俸給や職業の收入によりて辛うして衣食し居る者の奥樣や孃樣位の所謂品格や體面は、言つて居られた物にあらず、現に今の佛蘭西大統領の夫人といへば、帝國の皇后陛下なるが、自分で買出に出懸けらるゝ事が一の美談として内外に稱讃せられ居るにあらずや、此等を思はゞ勞働をなす

も下女代りをするも、毫も品格や體面を下る所でなく、却つて美德を增し心身の健全幸福を進むる所以にして、世に對して大に誇りとすべきにあらずや、近時此の點に心を注ぐ人が段々多くなり、東京市中では、先づ中等（といふて好きか）の月收四五十圓位の家にて、下女をも置かず、（或は子守位置いても）主婦自ら炊事其の他一切に任じ、小買物にも自分で出懸くる人多し、間々高貴な身分で獨身買物其の他用達しに出懸る人もあり、此等の人々は、斷へず手足を運動し、又戶外新鮮の空氣を呼吸したり、日光に觸るゝ機會も多く、食物の消化も血液の循環もよく、從つて食ふ物は味好く、身體は健全にて、精神は爽快なり、此れ丈けにても大なる幸福といはざる可らず、其の上一家經濟の上に於いての裨益は言ふに及ばず、早朝より時間を定めて起出で、夜分就寢まで秩序を立てゝ働らき、自ら規律的勤勉を以て家人を導く事なれば、家庭敎育の上に於ても多大の効果ある事は疑ふ可らざる所なり、斯る快樂利益は金錢にて購ひ得べきにあらず、唯勞働の神聖を認め人生の本分を守りて、せつせと働く其の報酬としてのみ得べきものなり、吾人は此の美風が元祿風に代りて、一般に普く行れん事を切に希ふものなり、

桃の實見物の記

愛氷散士

花のよき木によき實なし、とは誰が言はじめけむ、市川は桃の名所なり、その花の美しきをもて聞ゆ、されどいつも花の時におくれて、一たびも杖を曳きたることなし、花うつくしき市川の桃、果してよき實なしや、試みばやとて、七月八日といふに、物數寄にも程こそあれ、兩國の停車場にと急げば、千葉行の滊車は五分の違ひにて乘後れたれば、そこに一時間餘も待つは藝のなき事とて、龜戶までの滊車に乘り、龜戶天神に詣でけるが、さすがに人は正直なるものにて、花なき

藤の下には、茶屋の小女も利益の沸きを啣ち顔にて、ふさ〳〵と垂れたるその實には、誰も目をくるゝものなし、市川の桃の實も思合さる、

龜戸の停車場に引返せば、千葉行の汽車は我を迎へ顔なるに、乘る間程なく發車し、車外の節びたる景色物珍らしく、眺めやりつゝ早くも市川へ着きぬ、時に午前十時を少し過せり、

この驛より桃林へ二町と立札せるを心あてに、停車場より町の突當りを右に曲れば、其處此處に桃の林あり、されどいづれも構ひきびしければ、たゞ垣間見するも興渉し、唯ある茶屋にて桃林の案内を乞へば、知れる家あればとて親切に教へくれぬ、教へられたるは、荒物を賣れる店なるが、その家の主人は、早きは實を採り、晩きは未だ熟せねど、見るだけならばとて、三町ばかりの所を、おのが桃林へと誘ひぬ、思ひしよりは廣からぬ林なれど、せめて一枝は手折らまほしく、實大きく、色づきことの外うつくしけれど、七つばかり實のつけるを乞得たしといへば、それはあまりに多からずや、三つばかりのにてはと云ふ、所がらにも似ず勿體のつきたる言振にいよ〳〵ほしけれど、三顆ばかりの枝にして、その價はと云へば、一顆五錢づゝにては、とさも云ひにくげに云ふ、さては價の心づかひより物をしみせるかと思ふに興もさめて、今一枝をといふ勇氣もなく、そこ〳〵に其處を出でぬ、

されど何となう見足らぬ物足らぬ心地して、道行く人に、此町にて一番廣き桃林を持てる家はと聞けば、淸六といふ人の家なりとて、これもまた懇ろに教へくれぬ、成程見るからに大きなる農家なり、

東京より桃の實見物に來しよしを述べて、桃林の觀覧を乞へば、それはよくこそとて、宛も姻戚の人にても尋ね行きたるやうに、もてなし振おろそかならず、まづこなたへとて座敷へ招ずる騷ぎなり、何は兎もあれ、桃の林を見たしといへば、さらばとて五十ばかりの、内君らしきが五六町ばかりの道を連立ちて案内せられたるに、初めに見し家のとは違

ひて、目も屆かぬばかり廣き林に、今を見頃の桃の實ざかり、得もいはれぬ美しさ、はるばる尋ね來し甲斐はありけり、こゝにても家土産の一枝をと思ひたれど、前の家の勿體振に恐れて、さすがに言出し兼ねたるに、それと知るや知らずや、お氣に召したる枝もあらば、心まかせに折りたまへといふ、得たりかしこし、とわれはいづれにてもいとはず一枝をと乞へば、二十ばかりも實のつけるを、これにてはとあるに、それならば申分なしと答ふ、さればとて同じやうに美事なるを五枝ばかり、すこしの惜氣もなく折り、なほよき枝もあらば折りたまへ、これは見かけより味よければ、枝より直ちに口にしたまへ、など桃の實見物者としては、申分なき扱を受け、且つこれは何、かれは何と、桃の名のいろいろかはれる説明など聞きて、二時間ばかり桃の下道をあちらこちらと眺めあるきて、花ならねども千歳の齡をものぶる心地したりき、

さて別るゝにのぞみ、前の例もあれば、けふの價はと聞きながらも、定めて我等の土産にはそぐはぬ價なるべしと思ひきや、さる心づかひは無用なり、はるばる觀にとて來たまひしを、此上なき價ともせん、といへどなほその心のほども讀めねば、繰かへしていへど、受けつけんやうもなきに、さらばとて強ひて心ばかりの事して、そこを出で、我ものと思へど輕からぬ桃の枝を、肩にして歸路に就けば、見なれたる此土地の人も、よき桃よと褒めそやす聲さへ耳に入りぬ、

さるにても人の心ほどをかしきものはあらじ、この日の桃見、いづれにても一所にて止みなば、市川といふ地の氣風を思ひあやまるべし、洋行歸りのはき違ひたる觀察などのことも思合され、いさゝか興味をおぼえて、かく記しぬ。

桃

三千世經てなりける物をなどてかは
もゝとしもはた名づけ初けむ

女流文學者

大川城山

一　山田龜子

龜子は山田道夢居士の四女にして、寛永七年、丹州桑田郡千年鄕に生る。幼き時より記憶つよく、父の傍にありて、古歌三千首を暗誦せり。二十歳にて、安藤爲定に嫁し、東福門院又は姫宮の御所に伺候して、和歌の御相手仕う奉り『今式部』とて、いたくもてはやされたり。寛文八年正月十一日、年三十九にて身亡りぬ。長子爲賢、次子爲章、共に博學にして水戸光圀卿に仕へて聲望甚だ隆かりきとぞ、家集二卷あり、名つけて今式部家集といふ。

二　井上通子

通子は讃岐丸龜の士、井上儀右衛門の女なり、幼より書を好みて詩歌に秀づ。十八歳の頃、藩侯の母公に侍して江戸に趣く、此時の道の記を東海紀行と名け、九年を經て、歸る折の記を歸家日記といふ。のち三田茂右衛門に嫁して一子義勝（名古屋藩の侍講）を生む。

嘗て盤珪禪師と儒佛の道を論じて、戯れによめる歌

常にゆく道なくばこそ世をうみの、
あまの棄てたる舟もたのまめ。

人間いま常に行ふの道あり、何ぞ必ずしも佛菩薩の力をからんといへる意なり。禪師大に感じて、女丈夫と稱せりとぞ。天和年間歿す。著述は前に掲げし外に、和歌往事集禪機、浪華紀行等あり。

三　灰方丹子

世に名高き播州赤穗の義士、小野寺十内秀和妻は其名を丹子と呼びて、灰方藤兵衛の妹なり。義に厚く、かねて風雅を好み、夫の行に配して、殊にむつまじかりしことは、秀和より贈りし數通の書にも見えたり。復讎のため東行して後、

……………萬一如何様の難義かゝり來りしとて、見苦しき様はしなし被申まじく候又何事もなき世

の中にて候へば、猶以ていかやうにも渡世めさるべく候。心に働おはしますと覺え候故中々心安く存じ、今更思ひ殘すことも無くて、心よくうち立ち候まゝ、そこもとにもせめての本望と思ひ給ひ候へかし。

とあるを見ては、丹子の人がらの程も知られ、又、

……………そこもとの歌、さて／＼感じ入候、涙せきあへず、人の見る目をも思ひ、まことに涙を呑むといふ心にて幾度か吟じ候。奥のかた勝り申候。是につきても、必々歌御捨なくて、絶えずよみ申さるべく候。

とある等あはれにやさしくこそ。此夫にして此婦ありと稱すべし。さて義士の面々首尾よく仇を報じ、秀和及び其子秀富等みな自刄して、果てたれば、丹子も思ひかねてや、數日食を斷ちて身亡りきとぞ墓は京師の本國寺にありて、『梅心院妙薫日性信女、元祿十七年六月十八日』と刻し、過去帳には法名の上に

　つまや子のまつらむものをいそがまし、
　　何かこの世に思ひおくべき。

と辭世の歌をかき、自滅と記しあり。されば刄もて死せるにや。

四　祇園梶子

梶子は京の祇園の茶店の女なり。其性質やはらかにして賤しからず。幼より父母によく孝をつくし、いとなみの暇なきすさびに草子物語などにつきて、立ち休へる人の心ありげなるには、古き歌の意ばへを潜かに問ひ聞きて、いつしか三十一文字の情を知りて、花に月に口すざみぬるとはなりぬ。次第に其道に至り深くなり行きて、遂には其名遠近に聞えけり、家集あり、梶の葉といふ。

五　村上吉子

吉子は村上長治の女にして容貌うるはしく、近衞信尋公の櫻の御所に召し出され、『左近局』とて和歌に名あり。公の女泰姫の源光圀卿に嫁するや、隨ひて水戸に下り、綱條卿の代に至るまで、まめまめしう仕へて、些も過なかりきといふ、詠歌一千首に

上りしも晩年悉く其稿を焚き、僅に三百五十餘首を殘せしのみ安藤爲章これを集て蝶夢集と名けり。正徳二年七十二歳にて歿せりとぞ。

六　園女

園女は伊勢の松坂の人、和歌を好みて、風流の嗜あり。又た泚女の門に入りて俳諧を學ぶ。

夜あらしや太閤樣の櫻狩。
手をのべて折りゆく春の草木かな。
負ふた子に髮なぶらるゝ暑さかな。
ある程の伊達しつくして紙子かな。

後、岡西一時軒の妻となりて貞淑の聞えあり。某年芭蕉行脚して至り、園女が敬恭にして禮あるに感じて、

白菊や目にたてゝ見る塵もなし。

夫死して後、江戸に赴き翁に從ふ。翁歿後は晋子に就きて學ぶ。一年京洛を逍遙し復江戸へ歸り深川に棲み、眼科の醫業を以て恒の產とせり。されど世事に疎く袖うらの紅絹を切りて下緒の鼻緒とし、張文庫の蓋を取りて水ながしに用ふる等の奇行あり晩年佛道に入りて髮を剃りたれど、眞中に十筋ばかりの毛を殘せりとぞ。雲虎和尙に答ふる書に、『法臭き事は嫌ひにて、我平日の行は念佛と句と歌となり。極樂へ行くはよし地獄へ落つるは目出たし。

誰か見ん誰か知るべき有にあらず、
なきにもあらぬ法のともし火。

其才氣すべて此の如し、享保八年六十歳にて、名を知鏡と改め、同十一年四月六十三にて沒す。辭世に

秋の月春の曙見し空は、
夢か現か南無阿彌陀佛。

七　梢風尼

梢風尼は伊賀上野の小河風麥が女にて、同藩友田氏に嫁ぎ、夫死して後、薙髮し俳諧を以て樂しみとす蕉門の上手なり。

名月やもたれてまはる椽ばしら。

句集を木葉集といふ。芭蕉いまだ故園にありて、忠右衛門と稱せし折、衣服の世話など受けられたりきとぞ。

八　捨女

捨女は丹波柏原の久田氏の女なり。幼より風流の志あり。六歳の冬、

雪の朝二の字二の字の下駄の跡。

されば一年或やんごとなき御方より、「萱原にをしや捨ておく露の玉」といふ詠を賜りしこともありき。始め北村季吟に從ひて和歌を學ぶ、俳諧は故ありて後、松堅に因りたりといふ。

雜煮々や千代の數かく花がつを。

うき中に馴れて雪間の嫁菜かな。

日ぐらしや捨て置ても暮るゝ日を。

粟の穗や身は數ならぬ女郎花。

二十歳の春、その一族に嫁し、程なく寡婦となり、髮をけづりて妙融と稱す。若かりし頃、淨土律を學びしも、老いて後、盤桂禪師の法門に入り、草庵を播州網干の里に結びて、不徹庵と號す。元祿十一年八月沒す、年六十五、諡して嶺雲貞閑禪尼といふ。薙髮の折の歌に、

秋風の吹來るからに糸柳、
こゝろ細くも散るゆふべかな。

九　春秋庵永女

永女は江戸竹内氏の女にて、錦鳳堂某の妻なり。常に書を讀み、和歌を善くし、茶道挿花ともに秀で、盆畫歌舞のたぐひ亦通せざる所なし。二十歳あまりの頃は或武士の邸に仕へけるに、一年、正月五日の節分に、鬼やらひとて豆まきの祝ひありたり。その夜この殿の叔父、來りければ、殿、喜び迎へ、酒肴とうでゝ種々もてなし、永女も側に侍り、琴など彈きて興を助けぬ。叔父いたく醉ひ、三更すぎ、乘物にて歸りたり。さて翌朝未明、叔父の方より使來りて申しけるは、昨夜我が主人、酒に醉ひて金子百兩ふくさに包めるまゝ、屏風の傍に置忘れたりとく御渡し下さるべしと。やがて屏風の前後を搜しけるも

更になし。人々に尋ねけるに知りたるものなし、或女のいふ昨夜御酒宴のなかばに、御屏風の側にて何かは知らず、永女が拾ひとりしを見たりと申す。其外の女ども、我も見たり、已れも慥に見たりなどいひて、此罪永女にきはまりし如くなりぬ。殿、永女を召して嚴しく尋ねけるに大に驚き、暫うち考へ居たりしが、徐ろに詞を正し、人々の仰せの如く、御屏風の側に、節分の豆のあまりに多く散りこぼれ候ひし故、見苦しと思ひて、何心なく拾ひとり候ひき、其外のものは更に見候はずと申しけり。されど殿は益疑ひて終日責め問ひけるに、永女は幾度も、始の如く答へて、知らざる由を述ぶ。殿さま〲に責めさいなみて、其次の日は晝の程迄しばしもたゆむなし、永女は昨日の朝まだきより、飯一粒だにたうべず、そが上に、よべに夜をこめて強く責られければ、今は命たえ〲になむ。殿は遂に永女を庭さきに引出して、御手討とぞきはまりける。永女はたゞ泣きになきて、襟に顔さし入れて、空しく死をまつばかりなり。殿は庭に下り立ちて、今ぞかうよと、見えける所に、庭さきの竹の網扉を外よりめりめりと押し明けて走り入りける侍あり。麻上下も塵にまぶれ額に玉の汗して、殿の前に跪き、あへぎ〲申すやう、置き忘れたりと申し候ひし黄金は乘物の中にありけるを、今しも從者が見出し候ひし故、とく行きて永女が疑をとくべしとの仰せにて、息をつかで參りつるなりと述べければ、殿を始め、つぎ〲の女どもも、永女が心の清らかなるを思ひあたりて、かへりて、皆顏うちあかめて居たりけり。殿今は永女をいたはり、さて汝危きを逃れし喜びに狂歌一首よますやと言ひければ、傍の老女、之を留めて、永女は今まで死すべきにきはまりしを、危くも助かりつれば心も茲にあらざるべし、歌などは後にて仰せられて然るべうもやといふに、永女制して、さなのたまひそ、われ一首浮みいで候ひきとて、やがて硯をとりで、一片の紙に、かくぞしたゝめける、

落ちたるを拾はぬ御代に拾ひしは、

今日のいのちと節分の豆。

一座互に顔見合はせて感じ入り、暫くは詞もなくてありきとぞ。

小野寺十内秀和の母並に妻

介洞仙史

赤穂の義士四十七人の内に小野寺十内秀和と云ふ人がある、是は淺野家滅亡の時迄京の御留守居役を勤めた人で伊藤仁齋先生に學び別して念頃にせられた、年齢四十餘身の丈高く他の留守居等とは違ひ衣服其他の物にもかまはぬ質素の人である、扨江戸へ出立の前日に伊藤家へ暇乞に行かれたが折惡しく仁齋先生外出の不在であつたから其子息の東涯先生や蘭嵎先生に面會して、人の死生は計り難きものであるに自分も五十に近く先生は七十なれば今一度貴意を得たかりしが如何にも殘念なり老母並に妻は聖護院の杜にさし置きたればあの邊御通行の事も候はゞおとづれ給はれと頼み置て立歸た、仁齋先生歸宅の上之を聞かれ其後折ふし使を遣り慰問せられた、然るに元祿十五年十月赤穂の遺臣吉良家へ亂入して本望を達したといふこと京都へ聞えたるより、仁齋先生より殊に東涯先生を使はして、小野寺方へやり、賀詞を述べられたれば、母氏も妻室も誠に喜び顏色にあらはれ、手の舞足の踏をも知らざる有樣であつたといふ、其翌年二月十四日に四十七人切腹仰付られたるに付き、又吊慰の爲め東涯先生同家を訪問せられたれば母氏出迎へ、悴事多年學問心懸候しるし仁齋先生へ幾重にも御禮申たし、人は子におくれてははやく死にたがるものなるが、私に於ては子が本望を遂げた故世上面白く人へ顏もむけよくおもひます、是から達者になりて悴の位牌へ膳をも供へ、吊ひつかはすべしと挨拶され、哀戚の色を見せなかつたといふ、仁齋先生へ御禮申たしと述べた口上などは、凡人の詞にあらず武士の母として誠に立派な事である、其後母氏は其弟が大和の龍門に僧とな

りて居る方へ行き其所で死去し、妻室は尼となり林丘院の宮といふ比丘尼御所に仕へ、伊藤家へもたえず音問れましたが、妻室は至て和歌をよくし良人秀和と贈答多かりしことは、秀和の書簡に見ゆるけれど、其歌集の世に傳はらぬは、誠に惜しむべきである、或ゆかりの方に殘れる中に、なき人の墓に詣でゝと言書ありて、

きのふまで問ばこたへし言の葉に
　聞こそかふれ松のしたかせ

春風の題にて

咲そむる外山の櫻匂ひきて
　人おどろかすはるの朝かせ

秀和歿し子息孝右衛門秀富は遺髪を賜へる後、おもひかねてや、數日食を斷て身まかつたといふ、墓は京都本國寺の塔頭了學院にありとして、戒名は梅心院妙敬日性信女、元祿十六癸未六月十八日と刻してある、又其過去帳には法名の上に、

つまや子のまつらんものをいそがまし
　何か此のよにおもひ置くべき

と書き自滅と記してある、されば刀に伏して死だのであらう、此の母氏の事は關嶋先生の著はされた見聞叢談にあるから、正確の事實である、又古學詩集に秀和母の賀詩があるを見れば仁齋先生と交際の程も推察される。大石良雄が仁齋先生の門人であつた事は、世人のよく知る所であるが、小野寺十内の事蹟は知る人が少い樣であるから、此に抄出して讀史家の參考に供します、

瓊子內親王（四）

三島江月

十一

隱岐の小島には春來ても、なほ浦風冴えて浪荒く、渚の氷も解けがたき世の景色なるを、御心ほそき御住居にて、年さへ隔たりぬると、いと哀れにも都の方のみ戀しう思し結ほれさせ給ひつゝ、徒然なる

をり〳〵は、廊めく所に立ち出でさせ給ひて、遙に沖の方を眺め給へば、蜑の釣舟など、ほのかに見えて哀れなれば、

心ざす方をとはゞや波の上に
浮きてたゞよふ蜑の釣舟

かくて今年閏二月の初めつ方より、とりわきて密敎の秘法をのみ試みさせ給へば、夜も大殿ごもらせたまはぬほどなりしを、日數經て流石にいたう御疲れさせ給ひけむ、露まどろませ給へる曉方の御夢に、後宇多院ありしながらの御面影、さやかに見えさせ給ひて、御行末のことゞも告げさせ給ふこと多かりければ、帝うちおどろき給ひて、夢なりしかといと哀れにも、また賴母しうも、いよ〳〵御心づよさもまさりきて、都よりのたよりを待たせ給ふほどに、大塔の宮よりは蜑人のたよりにつけて聞えさせ給ふことも多かりけり。

さるほどに、警固し奉れる武士の中にも、御心に從ひまつる者もありしかば、今はと同じ月の二十四日の夜半ばかりに、ひそかに假の御所をば遁れ出でさせ給ひ、知夫里の港を船出して、何處をはてともしら波の大海原に漂はせ給ふこと五日ばかり、からくも虎口の難を遁れて、伯耆の名和の港にぞ着かせ給ひぬ、此の地の豪族長年は、帝の命を畏こみて、一族郞黨引き具して船上山へと守護し奉りぬ。

あはれ名和の一族が船上の一戰にて賊の大軍を擊ち破りしかば、天下勤王の志士先を爭ふて御方に馳せ參るもの引きも斷れず、總勢十餘萬、野にも山にも充ち滿ちたり。

されば、昨日までは、峯の松風小夜更けて、木靈にかよふ猿の聲、いと物すごき瀧の音、それのみならではこと〻ふ人も絶えてなき、かゝる深山の船上にも、都の春のめぐり來て、峯の草木も、今を春べと咲き匂ふなりけり。

斯かる賴母しき世の中ともなりしかば、やがて還幸の詮議ありて、いよ〻五月二十三日船上の行宮を出で立たせ給ふこと〻はなりぬ。

十二

やがて帝は船上の行宮を立ちて都へ還らせ給ふ

と丶なりしが、さるにても先づ思ひ出さる丶は皇女の御事なりけり。げに姫宮は孝養盡し奉らん爲にか丶る侘しき山里に味氣なき世を送らせ給ひつ丶もなほ帝の御行すゑ幸あれとのみ祈り給ひしことの、いと憐れに思し召ものから、一しほ懐かしうおひ見たまはんことの切なれば、疾く勅使をば山市場なる皇女の許に遣はし給ひて、倶に都に還らんことを切に勸めさせ給ひけり。



姫宮は日來の祈願も空しからずして、いよ丶御父君の都へ還らせ給ふよし聞きたまひては、如何ばかり喜ばせ給ひけむ。かつは倶に都に還れとの御仰せをば、いと辱うも思し召し、また都の方の如何ばかり懐しうも慕はせ給ひけむ。

さりながら姫宮は、有爲轉變の道理をとく知し召すものから、數多度ともに都に還れよと促し給ひしをも辭したまひ、永く此の地に留まりて浮き世の外の山陰に、四時おとづる丶花鳥と、空ゆ

く月を友として、み佛に仕へ奉りてぞ、帝の御行末を安かれとのみ祈り奉らんとて、いと心強うもたゞ一人、またもや寂しき山寺に留り給ひぬ。

十三

いよ〳〵五月二十三日船上の行宮を立ちて、山陰を東へ鳳輦を進めさせ給ふ。御前には頭中將行房、勘解由次官光守等衣冠にて供奉し、伯耆守長年は御劔を執て右側に侍し、金持景勝は錦旗を指して左側に候し、其外六軍𨗈く甲冑を着し、弓箭を帶して護衛し奉れり。しかのみならず鹽冶判官高貞は一千餘騎を率ゐる一日先立て先陣を仕り、朝山次郎義連は五百餘騎にて後陣を打ちたり。

げにや、行幸の前後三十里をさゝへて、威勢堂々四邊を拂ひ、朝風おもむろに吹いて、錦旗翩飜旭に映じ、君が代祝ふ萬歲の聲は野にも山にも充ち滿ちたり。

回顧すれば去年の春、思はぬ旅路に出させ給ひしをりには、御涙の催しとなりし山海花月も、今は御氣色麗はしう、松吹く風もおのづから君が千歲をいはふかと樂まれ、鹽燒く浦の煙さへ賑はふ民の竈より立つかと見えて、大御心を慰め奉るなりけり。

かくて長き旅路も安かに都に還らせ給ひしかば、やがて還御の式を行はれ、文武の百官を率ゐて萬機の朝政をみそなはせ給ふいと目出度き聖の宮の大御代とぞなりける。

十四

去年の春、思はぬ方にさすらひて、配處の月をかこち給ひてし宮方も、今はつぎ〳〵に都へ還りたまひぬ。絶えて久しかりし御對面なれば、如何ばかり御懷しうも、盡きせぬ御物語なんどせさせ給ひけむ。さるにても、また、姫宮のみたゞ一人歸りまさぬを、如何ばかり哀れにも思召されけん。

花を見ずて、故鄉へ、鳴きつゝ歸る雁さへも、友のかずには離れぬを、死して幸ある歸路に、恩愛の契り淺からぬわが姫宮のたゞ一人おはしまさぬを、如何ばかり淋しうも哀れにも思し召されけむ、かつ

姫宮の留まり給ひしは、父君の御行末を安かれとのみ祈り奉らむとの御一念なるをも知し召ものから、一しほ憐れに思さるゝにも、今は早や共に都の花を愛でん望みは絶てなく、たゞひたすらに法の教に從ひて空ゆく月をや慕ふらん。さらばよし堂塔伽藍を建立し、心のまゝになさしめんこそ、今はなかく〵誠の願ひならめと、思召しかば、やがて伯耆の國守に勅して、鄙ざかる山市場にも、いと壯麗なる寺院を建てさせ給ひ、會見山西月院安養寺と名けて、勅願寺とはなし給ひけり。

かくてまた、はるぐ〵都より女房を御使として本尊たる阿彌陀如來の像、佛舍利などを始めとし、御形見としては帝の召させ給ひし御衣冠とともに、御親ら鏡に向ひて寫させ給ひける御眞影をもさし添へて、くさぐ〵の物など多く贈り賜はりけるとぞ。

老女村岡（中）

橘 終 子

さるほどに、危機一髮をあやまつて、先に捕はれし正議派の諸士は、いづれも死刑はた遠島流罪に行はれ、ひとり村岡のみ赦されて還さるべきよしの宣告を受けたりけるに、ふかく同志の境遇をいたみて、食喉を通らず、夜はまどろみもえならずして、悲しみに沈みけるを、守り人あやしみて、みけしき只ならぬやうなり、いたく喜び給ふべき日に、何を憂ひたまふ、これなん上よりものしたまひし御祝の膳部なる、とく箸とりたまへかし、抔いふを、さあらぬさまにもてあつかひたる時の心苦しさ、誰かはかくと知るべしやとは、そが折々の懷舊にかたりきこえたまひしといふ。誠にさこそありけめ。

かくて村岡はその故山に厚く送りかへされき。そのかへるさのうたに、

五十三の海山川の旅路より
白洲のうへのこゝろやすさよ

といへるあり、動きなきこゝろのさま見えけり。賴み少なく憂きことを見しその身には、これよりいか

でしばらくも其來し方を忍ばざらん。西郷月照がありしすがた、遠島死刑におもむきし諸の志士のおもかげは、いく度かその夢路に迷ひ入りけん。世の無常をおもふにつけ、心の憂さをはらはんとするにつけては、人皆靜寂を願はぬはあらじ。深くその理りを悟りたる彼は、まづ其かくれ棲むべき境を求めたるに、荒れ果てたる直指庵の遺跡、今若しこれを修めずば、末の世の人いかで語り傳へん、いと口惜しとてやがて、其の荒あとに、昔をしのぶ堂宇を建て田畑さへあまた具して、其亡きあとの末々まで計り置かせたまひしなさけのほど、これも彼れもたゞいと有り難くなん覺ゆる。

これより其閑居に、村岡は餘命をいと心安うおくりたまひぬ。其の始めて此に遁れすみたまひし時のうたに、

雨あられはけしく降れと軒ふかき
我庵はそれときこえざりけり

今の庵主壽仙尼の君は、其姪君にて、此頃より二十とせの間かしづき給ひしとなん。此庵村岡みまかりたまひし後、火の災ひにあひて、ふたゝび建立せられたるが、ことしの夏おのれら此にしばし宿かりて、日々その昔がたりをいと樂しくてきゝぬ、尼君のたまふ、おのれ物事に深く心を留めざれば、此頃此處に尋ね來給ひし人の名も、大方は思ひ出侍らず、

女子の三德

啜臺女史

一家の家政者となりて、夫の愛憐を受け、家族、奴婢の尊信を得るには、三つの必要なる事件あり。其一は『迎意』とて、豫め人の歡を察して、之を迎ふること、即ちプレビナンス是なり。凡そ女主人にして、此の迎意ほど愛憐を惹き、幸福を增すものあらじ、譬へば、少しの行違ひより、其夫怒りて、其妻を罵り叱ること有りと假定せよ。柔和にして如才なき、妻は見ぬ眞似して少しも逆はず。縱ひ其夫の、

何程怒るとも、柳に受けてチッと辛抱し、先きの心の落着くを待ち、夫の歡ぶべき事を考へて、其意を迎ふるなり。妻の注意、行屆かば、夫の機嫌は忽に直るべし。支那人が「微物に於る注意は、德の經濟なり」と云ひしも、こゝらの事なり。又テーリーと云へる學者は『迎意の極意は、夫の氣質を、よく呑み込むにあり、其上にて我が氣質との折合を付け、夫の固有なる嗜好と習慣とを察して、我が嗜好習慣と混和するを要す』と云へり。之を要するに、迎意は幸福を導き、家族の平和を來すものといふも、敢て不可なかるべし。

他の一つは「温顏」なり。人の妻となりて一家の總括をする者は、心を平和にもち、氣に入らぬ事あるも、怒り腹立つ等のことあるべからず。素より種々雜多の家政を扱ふ間には、我が意に滿ぬ事、いろいろ有りて、到底思ひ通りには、何事も行かぬものと觀念し、常に莞爾として笑を含み、怒りし顏、鬱ぎし顏を見すべからず。温和なる顏は、人之を悅び、眉を寄する顏は、人之を厭ふ。顏の温和は、家内和合の好武器と知るべし。男は外に出で丶稼ぎ、家族養育の重荷を負へり。終日稼ぎ疲れて家に歸る時、先づ目に入るは妻の笑顏なり、此の時若し其妻が、家族と爭論にても爲し、甚だ不愉快なる顏して、其理非を主人の前に訴ふる等の事有らば、迷惑ながら其なが〳〵しき辯論を、終り迄聞ねばならじ。主人は之を難儀に思ひ、友人の所、若くは俱樂部等、適宜の處に避け、他に心を安ずるに至るべし。故に妻たる者が此の道理を會得すれば、夫の留守中に、何事があるとも、先は差控へて、見苦しき顏をせず、くだ〳〵しき爭ひ事は聞かさぬやうにすべきなり。左すれば、家内自ら和熟し『夫婦互の信任』の生ずる者なる事を忘る可らず。マダム、カソバンは『婦人の最も必要なる性行は、温和なり』と云ひ、マントノン夫人は『温柔は婦人の爲に理性を有つことの最上なる手段なり』と云ひし如く、温和は家内の女皇に比すべき功德あるを疑ふべからず。之に反して、

怒り易き婦女の内心は、眞の地獄なり、温和の婦人の頭には神宿り、陰惡なる婦女の頭には鬼住むと知るべし、温和に續きて婦女の德を高むるものは、『謹愼』なり。温和と謹愼とは、相伴ひて離れず、温和にて遜讓なる婦女は、常に謹愼なり。此の高尙優美なる德は、總て他の性行を高む。實に謹愼は、婦德の大勢力を占め、眞の婦德は、謹愼に在るなり。夫の虛飾は、徒に其小き精神と狹き本心とを示すに止り、美貌を誇り、高位を誇り、富豪を誇るが如きは、愚昧なる者のすることぞかし。而して此等の婦人少女は、贅澤と粧飾との内に譽を置き、化粧に依りて男の心を奪はんとし、富に依りて世人を畏敬せしめんとするに過ぎず、實に精神なき淺薄なる考なるが故に、謹愼なる淑女の、趣味ある眞の快樂は、遂に味ふことを知らざる者と知るべし。加之、男子は、此等の婦女を悅ばず。吾れは顏に差出で、己の美しきを見よ、と云はぬばかりの、尊大なる女よりは、萬内端にて口數きかず、謹み深き婦女を愛するものなり。温和なれ。謹愼なれ。

可愛娘の一人旅

可愛い子には旅をさせよといふこと、子を思ふ親の慈愛から出た言葉、それも十五歲から二十歲位までの男女ならば、膝許をはなして知らぬ他國へ手放すのは世間有觸れたことなれど、これは漸く九歲の小娘、一人旅を物の數とも思はぬ大膽さに、さすがの父も母なる人も驚いて、舌を卷くこと稀ならぬ少女政子、可愛さの一しほなるにつけ、この子の雄々しい行末の運試しに、思ひ附いたはこの夏の富士登山、小供達の仲間も驚けば、大人の連中も舌を卷き、家庭の話柄に上りつゝある新事實、政子は滿八歲十箇月、四人の子の姊として、生れ付いた男勝り、大阪吉弘茂義氏の娘なり、世の少女とは異れる性情ほの見て、堂島尋常小學校の三學年生とは思へぬしッかり者、母人の病に臥してより折々は、朝とく起きて炊事の業、何くれとなく世話する樣など、到底も世の小娘の眞似がたき所ありといふ、この少女の出發は去る十七日午前七時五十三分梅田發、途中三泊の後二十日大宮の新開道より登山せし由、三四年前には八十餘歲の老翁、單身富嶽に登りたること、世に稀なる壯擧として謳はれしが、これは幼き少女の壯擧、稀有の珍事として後の語り草ともなるべし富士の絕頂に小さい目を輝かす時、小供心に映ずる天の色、雲の形や如何なりしならん、

倫敦婦人の生活

近來英國上流社會の年若き婦人連は、一般に戶外運動に耽るの結果、英國特有として、有名なる家庭の娛樂を無視するの嫌ひありとて、非難攻擊少なからざる由なるが、今各社會における婦人の日課を擧ぐれば、左の如しといふ、

◎倫敦婦人　午前八時起床▲同九時公園にて乘馬▲同十時朝飯▲同十一時午前の散步及買物▲午後一時卅分晝飯（一週二三回はウイリス、リーム若くはサヴチイ料理店に於て）▲同自三時至五時仕立屋行▲同五時茶若くはブリッヂ骨牌遊▲午後七時チペラ若くは演劇行の爲め更衣▲八時晚餐▲同十一時一人の友人に送られ夜會若しくは招待會行

◎狩獵社會婦人　午前八時起床▲同八時卅分朝飯▲同九時八哩乃至十哩の田舍に狩獵▲午後五時歸宅▲同五時卅分晚餐の時刻迄茶若くは骨牌遊▲八時晚餐▲同自九時至十時半晚餐後骨牌遊或は音樂

◎ゴルフ社會婦人　午前八時起床▲同九時パイフリートのゴルフ競技場に向ふ▲同九時卅分ウオタールー停車場發▲同十時廿七分パイフリート着▲午前十一時競技開始▲午後一時競技終了▲同自一時十五分至二時晝餐▲同自二時卅分至四時卅分再競技▲同五時ゴルフ倶樂部にて茶▲同五時五十二分パイフリート發▲同六時五十分ウオタールー停車場着▲同七時卅分歸宅▲同八時十五分晚餐（晚餐後は暫時休憩の後就寢）

以上は先づ上流社會に屬する婦人の日課なるが、更に中流社會及び或る一定の職業を有する婦人の生活を擧ぐれば左の如し

◎中流社會婦人　午前八時起床▲同八時四十五分朝餐▲自午前九時卅分至十一時家政に從ふ▲同自十一時至午後一時買物若くは料理稽古▲午後一時卅分晝餐▲同自二時卅分至四時着物の修繕若くは音樂、テニス▲同自四時至六時訪問▲同七時晚餐▲同自八時至十一時演劇若くは音樂會

◎タイプライター業の婦人　午前七時廿分起床▲同八時朝餐▲同八時卅分鐵道馬車若くは乘合馬車にて倫敦市に行く▲同自九時卅分至後一時勤務▲午後自一時至二時晝餐▲同自二時至四時勤務▲同自四時至四時十五分茶▲自四時十五分至六時勤務▲午後六時歸宅▲同自七時至十一時晚餐散步若くは讀書

◎販賣係の婦人　午前八時起床▲同八時卅分朝餐▲同自九時至午後一時勤務▲午後自一時至一時四十五分晝餐▲同自一時四十五分至四時卅分勤務▲同自四時卅分至五時茶▲同自五時自九時勤務▲同自九時至十一時晚餐戶外運動

香色の關係

紫董女史

凡そ花には色あり香あり、色香倶に備はり、その實も亦味佳きは、これ其の樹の眞に善なる者なり。斯く人も、心内に備はりて、外に亦行あるべし、行の果は則ち德の實を成す。花にして香もなく、實もなからんか、その色美しく、その姿優しと雖、眞に愛すべく、慕ふべきものにあらず、人にして德なからんか、嗟、何處にかその人の人たる人格を見ん。

春光爛にして百花正に開く日は、花といふ花に色なきはなく、秋露濃やかに置く園の千草の均しく笑み綻ぶ時は、草といふ草に美はしからぬはなし。其の香の最も佳く、其の馨の最も深き所には人々心を寄す。彼の桃李ものいはず、下自らにして蹊をなすとかやいへる語の如く、人はその色の美しきのみならず、その香の薫ずる所に隨ひて樂しむその瞬時の榮をだに、これを競ひ之を希ふにあらずや。想念茲に到れば、意強く、行著しく進歩して、德の隆盛なるは、自ら人の行くべき軌道を指し示すなり熾ならずや德の果、善ならずや行の實、あはれ慕ふべきは、眞に香ある花なる哉。纖手たをやかに摘む路傍の紫花は、小やかなることその指邊に隱るゝばかりなり、されどその一片だに尙棄てがたき香の宿れるを、少女や愛づるならん。今日在り明日爐に投げらるゝ野の草、しかもソロモンが榮華の極に於ても、その衣はこの花の一つにだも及ばざりき、と至上者の宣言したまひたるも、これその色を類ひられたるにはあらで、活きたる花の精、即ちその香を併せ得ざるを稱せられしならん。

可憐なる花の微笑、楚々たる花の淸姿、一顧一眄に値せざるもの蓋稀なり。たゞその花に悉く皆慕ふべき香の存するをば認め得ざるぞ心飽き足らぬ。

人は萬物の靈長として造られ、婦女はまたそれより別たれて、その善美を輔け遂ぐべき者とせられたり

されば女は、その性の嬌艶、かつその清姿の外に表れたるものゝ上に、善以て其の美を修飾すべき義務を有す。智あり情ある人の血湧き、意識なる時は、何れか皆花ならざる、誰か一顧一眄の値なくして止まんや。彼の葉に茎に刺ありて、わがころもの裾の觸るゝをだに忌避すべき紫薊の花も、温かき日を負ひて野邊に彷徨する時は鈴菜、菫の花の間に交りて、優に春の美を競ふに似たるを見る、これ素より朝に咲きて夕に枯るゝ一植物の一根茎のみ、殊更に言ふを要せざれども、彼等は尚その一瞬時の榮もてその天分を盡し得たるものなり。惟人の美は、かゝる瞬時のものたる可からず、一枝の優、一瓣の嬌、一顧の値をもて滿足せらるゝものならず、生を更へても尚且つ不朽、不散、不褪、不變なる德の馨香を以て、その美を更に善に進むることを要す。花の尊しとする所はその香にあり、忘られざる香の記念にあり。人に於てはその正しき自覺に在り、自覺して强行するにあり。蓋人はよく自我を知る、知ると雖正しく知るを得ざるなり、否正しく知るを得ざるにあらず、正しく行ふ事を能くせざるなり。されば人は先づ己を正覺して、しかして後、行を實になすこと肝要なり。

知りて行はざるは、これ萬物の靈長たるに缺くる所神明の賞罰を免れざる所にして、人格の高卑、人分の大小一に、茲に分たる、故に人自我を知るは、個人の幸福なり、知りて行ふは、更に人分の榮なり、榮辱はたゞこれ行ふと行はざるとに因由す。努めよや、わが黨の諸姉、徒に褪せ行く花の一瓣となりて香なき形骸を斯の穢土に遺さんより、寧ろ花の清莖となりて、濁々たる世の潮流に秀で、清く水平線上に馨り出でん。現世の智者ソロモンとならんよりは如かず彼の世の爲の强行者アンドレイたるに、華美を是衒はずして、眞に天の寶藏に摘み容れらるゝ嘉果、王の婚莚に飾らるゝ芳花、不朽の樂園、天堂の清庭に咲き出づる眞に馨香ある花たれ。

征露紀念の地藏尊

花の上野に其名もかをる櫻木町淨名院境内に、一の銅像地藏尊を建立せられ、さつい頃除幕式を行ひたるが、この地藏尊は、三十七八年の役に戰死したる人々の菩提の爲につくりたるものにて、貴婦人がたの寄附と、もつぱら中山幸子刀自の斡旋によりて設置せらるゝ事になりたり、さて此地藏尊は篤志によつて寄附せる婦人の古鏡三百貫目をつぶして鑄たるものにて、その中には松平慈貞院が秘藏せられし名鏡二面も加はりしよし、その地藏尊の胎内には、大きなる亞鉛の箱あり、これに乃木松村其他多くの戰死者の寫眞を納めあり、この寫眞の數時事新報は三萬と記せり、其數の多きを知るべく、又そを集めし中山刀自の丹精の容易ならざりしを知るを得べし地藏尊の丈五尺三寸、地平線より一丈五尺三寸ありと、なほ除幕後寛永寺の住職等三十四名にて盛んなる供養ありし由、

女子判任官制定

遞信省に於ては女子を判任官と爲すこととなれり、大道遞信大臣秘書官の談話に曰く

▽遞信省に於ては、今度其所管内に使用する女子雇員を相當の條件の下に判任官に登用することに決定せり、抑女子の判任官と謂へば、教職に在るものゝ外は現在に於ては、我國に一切存在せずして、全然創始的の事柄に屬するを以て、夫々其筋の意見を叩き、任用令其他法規の上より差支なしと確定し、茲に始めて智識的の仕事を執る女子にして、優秀なるものに限り、判任官に登用するに省議一決したり、

▽本省所管の各局所に於て現在使用する雇員の數は、凡そ二萬三四千人ありて、其の內女子の雇員は一千五百人に達すべし、

▽現在女子雇員の從事しつゝある職務は、概して謂へば、調査に關する事務にして、例へば鐵道作業局に於ける切符の調査、積荷證書の調査、遞信省及

郵便局に於ける電報調査、郵便爲替の調査及現業局所の窓口に勤務するもの等なるが、其最も煩劇錯雜なるは、特に郵便爲替貯金管理所に於けるものなるべし、彼等は現今に於て殆ど男子に讓らざる成績を擧げつゝあり、

▽女子の通有性たる緻密と服從とは、男子は異り、變化なき趣味なき事務に對しても嫌厭心を發生することなく、從つて錯雜の狀態に在る、或仕事を整理區分する能力の如きは、却て男子を凌ぐに足るものあり、又計算事務の如き、調査事務の如き、比較的簡單なる頭腦の働きと、多大の熟練に依る、指頭の作用とを要するものに至りては、殆んど女子雇員否女子の此の方面に於ける獨占の職業範圍と謂ふも、亦誇張の言にあらず、

▽今試みに郵便爲替貯金管理所に於ける女子雇員の狀況を見るに、明治三十三年始めて女子を使用せしより以來、其成績益良好にして、現今にては本所及支所を通じて、無慮六百餘名の多數を採用するに至り、其從事せる事務の如きも甚だ複雜にして、

イ、郵便貯金拂出並其檢査事務
ロ、郵便貯金受拂金の査算並決算に關する事務
ハ、郵便貯金の預人原簿の計算に關する事務
ニ、郵便貯金利子の計算並檢査に關する事務
ホ、保管證券の受拂並計算に關する事務
ヘ、郵便爲替金及郵便取立金の受拂査算及決算に關する事務
ト、郵便爲替貯金取立金諸式紙記號檢査に關する事務及送金不能の爲替貯金拂戻證書に關する事務

等にして年度決算の時機にも、殆んど男子に劣らざる成績を示したり、

▽右の如く女子技倆の卓絶なることが世間に認識せられし結果、各種の銀行會社等に於ても、競ふて之を採用し、管理所其他所謂お役所向に於て支給する二倍乃至三倍の給料を出すに至り、是に於て平雇員一人定率何程、定員何人と云ふが如き、切詰勘定の官廳に於ては女子採用上尠からざる影響を蒙りたる折柄、日露戰爭始まりて郵便貯金の劇增、交通事務の增加するありて、益雇員の採用に窮し、何とか適當の方法を講究せざるべからざるに至れり、

▽山縣遞信大臣は就任後直に所管局所を巡察して

其執務の煩劇と時間の長きに驚かれたり、而て特に女子は男子と異なりて、全然榮進の途なきを以て、何とか相當の方法を發見すべく、調査を爲すべきことを命令され、爾來研究百端の結果として、遂に今回の如く女子雇員にして、技倆資格共に充分に判任官たるに恥ざる者を選叙して、之を登用するの途を開かれ、女子は始めて男子同様の待遇を得ることゝなり、從つて退官に際しても、退官資金等を得らるのみならず、恩給請求の權利を有し、又叙位叙勳の御沙汰をも拜することを得るに至れり、此一事は以て女子雇員奬勵上必ず好影響あるべきは勿論にして是全く畿に遞相の實地視察に依る賜と謂ふべきなり

▽女子雇員の中には、女子大學の卒業生、高等女學校の卒業生等も亦尠からず、此等の登用方法は、原則として通信手鐵道書記補特別任用令の試驗規則に依り、試驗の上採用せらるゝことなるべしと信ず而して目下の處外部との交渉(窓口を除く)に當らしむることは斷じて之なかるべしと信ず、若し夫れ登用に關する詳細の事柄は不日確定發表せらるるなるべし

○婦人と職業

小學校、高等女學校及び其他諸種の專門學校を卒業したる少女、及び婦人が如何に職業を求めんと熱心しつゝあるかに就きて、さる人の調査したる所によれば、過去六ヶ月間諸方の少女婦人よりある通信社へ就職の紹介方を依賴したる統計は、

一、高等女學校卒業生……七人
二、諸種の技藝學校卒業生……三人
三、高等小學校卒業生……十二人
四、右校第二學年修業生……十二人
五、尋常小學校卒業生……四人
六、出戻りの婦人……十二人
七、其の他……六人

以上五十六名の年齢は若きは十三才と二ヶ月、長けたるは二十七才と三ヶ月となり更に其の細々しき箇條書きは最も注意を拂ふべき價あり、

一、女學校の教師となりたしと云ふもの
二、學資金に限りある故約四ヶ月位の間に十圓前後の月給が取れ得べき學校を撰擇してほしと云ふもの
三、保姆に世話して呉れと云ふもの
四、毎日夜間の仕事にて十錢位つゝ收入ある[職]業を世話して呉れと云ふもの
五、苦學の餘暇を與ふる篤志家の許に奉公したいと賴むもの

右五種の中にては最後の苦學云々の婦人最も多く亞ぎて職を求むるもの多數を占めたり而して右五十六名の中十一名は父母の許諾を得ずして逃亡上京せしものにて其中に一名だけ不品行の爲め郷里の女學校に在られずなり兩親は云ふに及ばず友人その他へも全く無斷にて上京せし者あるを後日に到りて確め得たりと

誌友俱樂部

◎[illegible]　暑さの砌貴社益々御繁榮賀し奉り候、妾は山間僻地の者にて、學ぶに師なく、問ふに友なき折柄、御社發行の女鑑愛讀いたし候に、日に月に日新らしきことのみ、殊に子女教育に御熱心なること最も切に、甚恐切にて、山間に良師を得たる如く、大に喜び居り候、尚前途の光明を祈り上候、猶一つ御願ひ申度は御僻陬の一隅を御載せ下され候はゞ、妾の喜びいかばかりと存じ候、幷に愛讀者諸姉よ、此の雜誌の一字一句を味うて、永く誌上にて御交りあらんことを乞ふ（岡山縣黑瀨政乃）

◎繪葉書交換　皆さん私も本誌の愛讀者の一人であります、どうぞ以後俱樂部上で御交換を願ひます、又私は大の繪葉書狂ですから、交換御賛成の方は下名へ送つて下さいませ、きつと相當なもので御返禮いたしますから（越後國中頸城郡名香山村大石益子）

◎產婦の心得　私は多年女鑑愛讀者にて候が、一寸御伺申上候　懷姙中の心得方、出產の準備、出產の時の心得、産後の養生有何卒御教示願上候（麻布區三河臺町十五佐々木冬子）

◎女の躾方　もし女のしつけ方に就て、何かよい御本があらば教へ下さいませ（長崎ゆかり女史）

◎編物の稽古本　私は片田舍のものに候が、編物に熱心いたし候と共、よき教師これなく候まゝ、獨習の出來るよい書籍これあり候へば、御教へ下され度候（本郷森川町一士田しづ子）

◎女鑑の記事に就て　女鑑第三號百五ページ論說欄中、米國婦人の心得方其の十三に「何事につけ我身を謙りて、善事はすべて他人に讓るやう氣をつけよ」又其十五に善事としらば自ら行ふことを勉めよ」とありましたが、前者の善は好惡の好、後者の善は善惡の善なりや、否や、即ち後者の善其物は、照烈帝？の云はれし「善は小なりと雖も爲さゞる可らず」の善と存じますが、十三節に在る樣致しますと、善と知りつゝ行ふ事が出來なくなりますので、淺學の妾大に惑うて居ります、記者閣下教へよ、次の意義を問ふ、

一、他山の石　一、風馬牛は何故無關係の意なりや、

（上毛桐生町大澤若楓子）

◎東京の女學校　私はこれから東京へ出て女學校に入り度いと思ひますが、何と申す女學校が一番確實でありますか（神奈川柴田英子）

◎古雜誌讓受たし　妾は此度美しい誌友欄の生れたのを喜びます、諸孃の御性名や、御文才の程は誌上にて承知いたして居りますが、御優しいお顏や御筆跡の見えないのは何より殘念です、もし皆樣のうちで、婦人世界と女子文藝と前號の御持の方は御讓り下さいませんか（讃岐國三野郡詫間村安藤みつよ子）

◎音樂史　日本では何と申す音樂史が一番正確なものでありませうか、御伺ひ申ます（橫濱大谷愛子）

◎女子教育家の投票　貴誌上で、女子教育家の投票を成さつては如何ですか（大阪田中靜子）

◎御住宅はどちら　時々貴誌上で御目にかゝります、大塚楠緒子樣の御住宅はどちらでございますか（芝中山芳子）本鄕西片町十番地であります（係）

◎女學生の言葉　近頃女學生の言葉が耳だつて厭はしく聞えますがあれは文明世界ではあゝいふ言葉でなければならぬのでございませうか、さうしますと、日本もこれから文明の度を進めて行くといふ計でありますが、この上言葉が變つて來ますと、女學生外の人には通辯が入るやうになるでありませう（淺草黑石せつ子）

◎我田に水　お醫者樣の御說が時々女鑑へ出て居りますが、たまには斯ういふ病氣には斯ういふ藥を用ひよといふことも出して下さい、どれほど助かるかしれません（芳梅女史）

◎此欄への投書　風俗に關して、本誌の品格を落すことでない限りは、本誌の讀者諸孃にて盛んに使用せられたし、但し物の質問とか讀者相互の交詢用の外は、可成趣味のある投書を願ひたし（係）

新刊紹介

◎門の草　小山内八千代氏著

近時女作家として其名高き著者の文には、その構想の妙と、その運筆の美を本書に於て見るを得べし、唯篇中其題目に於ても曲者、駒平太、などある如く、文も少し奇に傾ける如き觀あるは如何にや、但しそれが大家の大家たる所以ならんか、今左に本書のはしがきを抄錄し、其文の見本ともせん

共に遊べと招かるゝとも、親なき子雀の身は悲しや、力なくもやう〳〵近づくを、つと立たれて赤目ざるゝも是非なし、いつもいつも無駄に口開く烏の雛子、遠喩ならぬ下手際、うとましさはこれとにも同じものにおぼし給はめ、されど後には木綿ながら新らしく頁ふ衣も候、これは今脱きすてし古き一つの、せめては瀬き紺の香なりとも愛で給はゞうれしとて、

裝幀は久保田米齋氏の筆になれるものにて、凝りにこりたる美本なり（定價五十錢、日本橋如山堂發行）

◎玉虫　河井醉茗氏著

卷頭に流行の「此書を故郷なる從妹に與ふ」などいふ文學を印刷し其裏に俳諧歲時記中の一節を抄錄して、玉虫の說明、これだけにても著者が今世風のエラキ人なることを知るを得べし、短文と新體詩を一ッ違いに組んで合計六十六篇、著者得意の物より順に並べたるやう、文は姉妹、渡り初、詩はをさな草紙、夕燒などはじめの方殊におもしろし（定價六十錢、京橋女子文壇社）

渡り初め　節

お梅は怜悧な女ではなかつたけども、戀の爲にかしこくされた自ら稼いで身自ら貯つて、橋架ける代を積まうと思ふた、お梅が橋を架けやうと思ふた所は恰當、兩方の岸から一枚岩が物目ひさうに突出で、それを聞かうとするかの如く、水の流れの靜かな所であつた、水嵩がまさうが、減らうが、ゆるくならうが、早くならうが、少しも頓著せず、今に〳〵と胸にかけたる戀の中橋、いつしかとゞろ〳〵と馬の蹄にさへ渡り易さうに踏みならして、「お梅の橋」は架けられた、併しながらお梅がこゝを渡る時分には、もう昔の春は過去つたのであるけれども、「四十九ちやもの花ちやもの」、戀はいつまでも年の初めのやうに若がへつた、

◎オセロ　戸澤姑射氏譯沙

沙翁全集の第四として刊行されたるもの、よく原著者の作意をうつして、而も文章に譯臭味なく、舊劇式の鑑賞にて、流暢に書き現はしたる、この著者にして初めて出來る藝なり、中には『破長刀もカラコブシ（空拳）には優る道理』などいふ、少し間勝手のわるい調もあれど、重箱揚枝は見合はすべし、卷首に此悲劇の解說もあれば、好劇家は是非一讀を經べきものなり、製本も極めて美くし（定價八十五錢、大日本圖書會社發行）

◎通俗治療法　糸左近氏著

本書は子宮月經通なる著者が、婦人病に重きを置き、胃腸病、傳染病呼吸器病、神經系病、皮膚病、花柳病の治療法を通俗に記述したるものなり（定價二十八錢、博文館）

◎火災豫防　芳賀惣治郎氏著

火災も現に災といふ、類燒等不慮の事なきにしもあられど、自家より火を出す如きは、注意の行屆かぬより生ずるものにて、あらゆる場所に於て火を取扱ふ上に、失火の憂ひなきやう、數々の注意を與へられたるものにて、各家庭には必ず一本を備へ置き、下婢敎授科目中には必ず加へざるべき火災豫防の好書なり（警眠社發行）



女子教育の一注意

男爵 細川潤次郎

凡そ修身の必要なるは、人類一般の事にて、貴賤老幼男女の別ある者にあらず、然るを今玆に女子修身の必要を説く所以の者は、女子に於ては男子よりも更に必要なるべき理由の存するに由れり、偖其理由如何と云ふに、男子は社會萬般の業務に當るを以て其功を以て過を補ふことを得べし、此れ謂ゆる大行は細瑾を顧みずと曰へる古語の如く、偉大の事業を爲す者は、其勢力自ら小廉曲瑾を顧るに遑あらざる可く、從ふて其私行上の過失をも恕すべき者あるべし、然るに女子に至りては、家事を整理して、良人の補助を爲すに止り、世上の公務を執るの機會なくして偉大なる公益ともなるべき功を立つるの資格なく從つて、過失を補救するの料となるべき者あらず、其の私行上に於て、一の過失あるときは、社會の耳目忽之に集り、謗議沸騰して、遂には人に歯せられざるに至るべし、且又男子は少年の節、或は行檢を敗りたる者、或は怠惰にして學藝なき者も、一旦悔悟して大に奮勵し、行爲を謹愼して、善人となり又は學藝を勉めて知識を磨き、有用の人となる者も亦少からず、此等の例は和漢西洋とも傳記に出でたる者枚擧に遑あらず、女子に在りても同樣なるべきやうなれども、決して然らざる者あり、其故は、女子は成長して嫁期に至るときは、良緣を求めて結婚の禮を擧げざるべからず、其の最早き者は十四五の年齡より、已に此事あり、其の良緣を求むるに方り男子の方には其の父兄親戚より聞合と曰ふことありて緣女の品行材能等精密に探訪するを常とす、此の如く精密に探訪するは、實に當然の事にして、修身

の配偶を定むることとなれば、愼重に愼重を加ふること、固より已むことを得ざるに出づ、啻に男子の方より女子の方を探訪するのみに非ず、女子の方より男子の方を探訪することも亦同樣なりとす、然らば此一點に於ては女子修身の必要と、男子修身の必要と同樣なるべけれども、是亦然らざる者あり、如何となれば男子の婚期はいつも、女子の嫁期より晩きを以て、其の晩き丈けの時間は、從前の過を改め、善に遷るの餘地あれども女子は之あることとなし、假令へば其の男子と女子と婚嫁の時、十年の違ありとするときは、此の十年は男子の過を改め、善に遷ることを得る餘地なれども、女子の爲には此の餘地なければ、一たび仕出したる過は、又打消すことを得ざるべし、殊に女子の爲に迷惑となるべきは、其の謂ゆる過失と曰ふべき者の中、曖昧疑似の間に在る者少からず、曖昧疑似の間に在る者を、眞の過失なりと斷定することは、女子の爲に、寃罪となることもあるべし、此即迷惑至極のことなれども、此の曖昧疑似の過失の風評一たび傳播するときは、之を聞く者の爲には、曖昧疑似の件を必無の事なりと斷定するよりは事實なりと假定すること便利なるを以て緣談の始りたる頃、評議に懸くるときは事實の有無は姑く問はず、品行に闕失あるが如き風評あらば、直に其人を擯斥して、他に候補者を求むること、人情の常なるべし、此等の有樣を考ふるときは、女子の爲には修身の必要なること、男子よりも甚しと曰ふことを得べし、實に恐懼戒愼せざるべからざる重大の事なりとす、一體世人の男子を責むること寬にして、女子を責むること頗嚴なるに似たり、同一の人類に對し、之を責むるに寬嚴の差あること平等の道理を缺きたる樣なれども、前述の次第なるを以て、殊に女子の細行を苛酷に論ずるも、亦已むことを得ざるに出づる所以なきに非ず、我國古來中等以上の社會にありては、女子は深窓の内に養はれ、力めて嫌疑を遠ざくるの風習なりしが、近年に及びては其の風習漸く變遷し、支那朝鮮の女子の如き、閉

居主義を用ゐずして、歐米の如き交際を模倣するに至り、從ふて嫌疑を遠ざくるの方法と、率ね嚴格ならざるに由り、曖昧疑似の說も生じ易き有樣となれり、此の如き社會に處して、中にして倚らず、和して流れず、端莊靜粛にして能く女德を完成せむことを望む、

華族女學校問題

華族女學校は、過般學習院に分併し、同院女學部となりたり、同校はもと學習院より分離したるもの、初め何が故に分離したるや、既に分離して今日に至る、何が故に今併したるや、先に分離したるは獨立して規模を大にせん爲に、今合併したるは元の如く規模を小にせん爲か、或は等しく華族學校として聯絡上に便せん爲か、一改革の名の下に教職員を一新せん爲か、學制を改正せん爲か、記者は先づ下田歌子氏を訪ひて、同校の大改革に就て其意見を叩きたるが氏は曰く、予は當局者なるが故に、口を開くとすれば勢ひ改革したる點に就て辯ぜざる可らず、その改革たるや予は大に好結果なるべきを信ずれども萬一失敗に歸する如きことあらば、今日言をなすも行はれざりしといふに終るべければ、暫らく實踐して、所思を發表すべしとありたり、それより柳原伯德川伯、三島子、福岡秀猪諸氏に就て、その高見を求め、幸ひに聞得る所多かりしがこれ亦暫らく發表するの時期にあらざるべきを思ひ、更に後日を待つて掲載することゝし、今はその一二を掲ぐるに止めん、

華族女學校の必要

子爵　秋元興朝

私は今華族女學校へ通はせるやうな娘もないから自然今回の改革に就ても、冷淡と云ふではないが、研究する所へまでは行かぬ、

併し私は華族女學校も以前の學習院も、帝國大學

と同じ位置にするか、さもなければ、華族女學校だけにして置きたいと思ふ、

英國でも獨逸でも、多くの大學が設立せられてあるが、日本では其數が至つて乏しい、故に華族中で是非一つの大學を建てたいと思ふ、それは華族の子弟のみを教授する場所でなく、たゞ華族の資金で拵へたいと思ふのである、而してそれが出來ねば女學校だけでもと云ふは、女子の方は、一足飛びの進歩はむづかしいから、どうしても特殊の女學校が必要である、英國などは家庭で教育して居るのが多いやうであるが、日本では子供のうちはよいが、少し成長して行くと、何もかも家庭で教育するといふことは容易でない、島津家の如きは、家庭で旨く教育せられて居るやうであるが、そんな大業なことは、華族の中でも二三十家をよりぬけば、まづむづかしい話であるから、どうしても今の華族社會には、華族女學校の必要がある、さて初め學習院より別れた華族女學校が、再び學習院に合併した理由は、私には更に解らぬ話である、

華族女學校の改名

文學士　伊藤南陽

單に人としては、華族も平民も異ることなく、更に親といひ子といふも別つたことはないのである、併しさう十把一束に見たならば、社會は無價値なもので、犬を人の目から見て、あれは黑であるとか、白であるとか云ふ位なものに過ぎない、社會には何うしても階級の必要がある、亞米利加にあつては、大統領も野に在りし時は一平民に過ぎない、即ち國民は皆平民である、然るに自分等平民を統御する人の必要上、其の仲間から大統領を選擧するといふ事になる、既に選擧した以上は、平民以上の尊敬を以て向はねばならず、選擧された方も平民以上の責任を持たねばならぬ、殊に日本の如きは、皇室の事は申すも畏し、華族と稱する身分の人にしても、皇室の

藩屏とし國民の儀表として、一般平民からは景仰せられて居るのであるから、華族の行動は甚だ謹慎せねばならぬ、殊に今日の如き女學生の風聞のあしき時は、猶更に華族の子女には特殊の教育を施して、少くも上流から濁水を流さぬことにいたして貰はなければならぬ、故に今の日本には、華族女學校の必要がある、既に其の目的でさへ行けば、名は必ずしも華族女學校でなければならぬといふ事はないのである、華族女學校設立の最初の動機は、單に華族の子女を教育するといふ如きものではなく、或目的の爲に、十人か二十人かの華族の子女を養成するにあつたのであるが、意外にも入學志望者が多かつた爲に、目的が一變して、學習院の一部として、専ら華族の子女を養育することになつたとの事である、最初は下田歌子氏等の一私立學校として建てられたのが、宮内省直轄學校といふものになつたので、下田氏は何處までも附いて廻らねばならぬ因縁を持つて居る、同校はいはゞ下田氏が畢生の事業で、下田氏の力によつて、今日の盛大を見るに至り、盛大なる華族女學校によ



つて下田氏は女子教育界に飛ぶ鳥も落すばかりの盛名を博するに至つたのである、

初め學習院より分離して華族女學校となつたのは、華族の子女の爲に大に喜ぶべき、一大發展であつた玆に於て下田氏はます〳〵其敏腕を揮うて、同校の爲に力を盡して今日の如き堂々たるものに仕上げたのである、もはや華族女學校は、華族の子女教育所として、大に成功したものである、

下田氏は同校には、當初より學監として立ち、校長は他の人の任用せらるゝことになつたのであるが、歷代の校長、唯其空位を守るのみで、實權は下田氏が握つて居るといふてもよい程であつた、其他教授連も、いづれかといへば、二十世紀の女子教育に適するほどの人に乏しく、寧ろ華族女學校の教授としては、あまりに不適當の人が多かつたのである、然も其成績は著しく擧つた所を見ると、華族女學校を下田氏一人に背負つて立つたものとしても差支ないわるく見れば、華族女學校に於ける下田氏は、檐の下の力持と同じ有樣であつた、そこで實權の上より名の上にも校長たるべき希望を持つたのではあるまいか、校長として、其人格が直ちに衆生の範となることであれば、下田氏の人格は決して卑いものではあるまい、去ながら華族女學校の校長となるには、あまりに好ましからぬ評判のある人で、下田氏の才智を以て、今日まで他の校長を戴いて居つたのは、多少その邊に遠慮せられたのではあるまいか、而して今日はその遠慮を不必要としたのであらう、それには從來の校長も廢せねばならぬ、その後を引受くるとすれば教官も一新せねばならぬ、それには在來のまゝにてはと云ふ所より。學習院に合併して女學部となし、その部長となる運動が成功したのであらう、故に再び、華族女學校として其校長と稱すべき時期が來るであらう、刮目して其成績を見たいものである、

二週間に五拾圓の報酬

仙臺市の慈善事業團體仙臺婦人會にては龜井知事夫人を首め、前第二師團長西男爵夫人、其他同地上流の婦人三十名が申合せて、此夏期の間に是非割烹講習會を開かんと相談一決し、其講師として適當なる人物の選擇方を、本郷弓町なる女子美術學校の割烹專修科へと申込みたり、尤も講習期間は二週間、報酬は五十圓、外に滯在費用等は一切婦人會にて負擔すべきは云ふまでもなく期に臨み特別の報酬をも呈すべしとあるに、學校の方でも滅多な者は遣られずと、彼れか是れかと商議の末、遂に京橋區築地一の二安田貢氏の令妹田鶴子(二十)が其選に當りたり、田鶴子は本年四月同校の日本料理科を卒業し、最も斯道には堪能なる婦人にはあれど、兄の貢氏は海軍少尉として、昨今音羽艦乘込みの評判よき若士官、また其家庭とて、別に金錢に自由を缺くほどの身の上にもあらぬ上に、また女學生々活の終りしと云ふでもなき分際で、然る、立派な報酬を受けて行くは、餘りに唹滸がましき次第なりとて、固く辭退に及びたるも、是非に／＼と勸めて、漸く家人の承諾を得仙臺市に出發せしめたるは、三四日前の事なるが、其後同人より學校への來狀によれば「知事樣の十疊の一間を私の居間にあてられ、婦人會での割烹教授を終れば、直ぐ知事樣の宅に歸り、更に知事樣の奥樣と料理の研究をし、朝、晝、晩とも副食物は大概私の獻立の下に相成り居候云々」とありし由、

◎和洋料理教授　第三高等女學校教諭富田花子女子は神田區西小川町一丁目四番地にて、先頃より實用速成にて、和洋料理法を教授し居りしが、意外に成績良好にして生徒の數一日々增加する如き有樣なるより、今回規模を擴張し、盛んに料理法の教授をなすよし、因に目下同所に夏期講習會を開始し居れりと、

高等女學校の現況

中等教育並に各種技藝を敎ふる女學校は、全國を通じ數百を以て數ふる程なるも、設備整ひ、規律能く行はるゝ公立學校數は、九十二にして、一縣少きは一にして、多きは五を超えず、學級數は合して本科五七九、補習科五四、技藝科一一〇、技藝補習科二專修科四、計七四九、生徒數は本科二一七、七五四、補習科一、六三八、技藝科一二、一七九、技藝補習科一四、專修科五二、計四一、六三七ありて年々一百萬三千八百三十九圓の經費を使用しつゝ、校長以下千四百三十四人の職員にて、之を敎養し居れるが、近來一般の傾向として、入學者は本科、補習科よりも寧ろ技藝科、同補習科、專修科を選ぶ者多數なりと、

東洋女藝學校の發展

前號家庭欄にて紹介したる、美しき家庭の主人高橋菊太郎氏校長の下に設立せる東洋女藝學校は、技藝敎育の好果を歩一歩に奏すべく、目下刺繡、造花、裁縫の三科に重きを置き、刺繡は菱沼安子、長谷川岩吉の兩氏、造花は吉岡男成、同房次郎の兩氏、裁縫は臼井田鶴子、藤本のぶ子の兩氏熱心に敎鞭を執り、生徒も一意專心に之を學び、其成績極めて著しと、

右の外家政學、敎育學、看病法、作文、習字等女子に必須なる學科を敎授し、且つ校長は常に諸名家の說を介して、常に生徒に婦道を說き、自ら監督の任に當つて、そを些時たりとも實踐躬行するに力められ、技藝の上は、矢田部じゆん子氏顧問として大に盡力せるよし、

すべて同校は家庭的に敎育し、校長は生徒を見ること自家所生の子女の如く、其監督敎授共に周到にして、師弟の間極めて圓滿なりと又同校は營利を第二としたる事とて、希望者ありて生花點茶を敎ゆるに至るや、直に日本式の座敷をつくり、無月謝にて敎授する等、月謝主義の學校にては見るを得べからざ

る事二三にして止まらず、教師に對しても、永く其職に安んずるを得るやう、其待遇に就ても大に他校と異るものありと、以上同校關係者より聞けるまゝをしるす

支那留學生の卒業

清國女留學生二十名下田歌子女史の校長たる、實踐女學校に入學せしは、恰度昨年の今日なりき、内或は他に轉學し、或は病氣の爲に中途にして歸國するの止むを得ざるに出でたるものはあるも、右二十名の中、左記十二名の婦人は、此に卒業の榮譽を擔ひ去る二十日を以つて何れも共に其の證書を受領したり、

▲速成師範科

黄憲祐(四十五才)
王　勤(四十四才)
李樵松(二十四才)
黄國厚(二十三才)
許　馥(二十二才)
許　璧(十九才)
陳光[illegible](十八才)

▲速成工藝師範科

王昌國(二十九才)
許　徽(二十四才)
呉　雙(十八才)
黄國巽(十八才)
胡懿瓊(十五才)

扨て右十二名は殆んど一家族の卒業團とも見る可きものにて、黄憲祐の老女學生は黄國厚(三十)及び黄國巽(十八)兩女の實の姉に當り許璧(十九)は憲祐の實の娘許馥(三十)許徽(二十四)又た實の姉妹にて呉雙、胡懿瓊の兩女また同校に通譯たる人の婦たり妹たりと云へば、殆んど一家族の留學とも見る可きものなり、扨て右十二名の婦人が能くも斯る短日月にて教育心理を始め、普通師範學校にて授くべき十二科目を速成的に攻究せしかと云ふに、其の

◉教授法の苦辛こそ聽く可き價われ、同校は右女學生の爲めに、更に左記の清國職員を有せり、

一、學生總監督……苑源廉
二、學生世話掛……劉善[illegible]
三、學務協商……吳家駒
四、金錢上協商……劉頌虞
五、漢文教授……卓行[illegible]
六、教育心理漢譯……揚昌濟
七、理科漢譯日本語法教授……陳介
八、心理通譯……熊巢照

以上の八氏は、第一高等學校其他各種の學校に通學

中、男留學生(苑氏を除く)にて素より校内に詰切りのものにはあらず、阪寄みつ子、松本晴子の二女史等が、夫れ〳〵教案を作りて教授し(勿論通譯を介して、旋て是れを如上の揚昌濟其他の人に手渡して更に其教案を漢文に譯して、いち〳〵謄寫板刷りとなし、そを各生徒に配付して、而して教科書となさしむると云ふ實に手數のかゝつた教授の致方、さてこそ斯くも早く卒業するに至りたるなれ、扨て一同が

◎在學中の成績　奈何と聞くに、何んにせよ親子姉妹打ち寄りての留學のことゝて、彼國女學生に能く聽く郷里を想ふなどのこと更になく、何れも日本留學前に、充分の素養をつけあることゝて苦もなく難問を咀嚼し、數學の如き理化學實驗の如き、頗る趣味に富めるあり、東京府師範學校乃至高等師範學校幼稚園に實地授業參觀の際の如き、いづれも共に共に、深き興味を有し、妾等歸國の上は那の如く云々試さんなど言ひ居るもあり、

◎歸國後の女學生　は如何にするか、何れも來月早々歸郷(多くは湖南湖北)の上、夫れ〳〵女學校の教師となる可く、中には新に女學校を創立せんと云ふもあり、一旦は錦を郷黨に飾るも、本年中には更めて日本に來り、他の一學科を專攻せんと云ふもあり兎に角渡來早々學窓に閉ぢ込みて、更に東京を知らざれば、姑くは彼等十二名に對つて、自由に東京市中を見物さする筈とは、青木校長代理の實話なり

◎其他　二十日の卒業式當日は、清國公使楊氏も多分出席されし筈、同校には右十二名の外實踐女學校の中學部とも云ふ可きに十五名の清國女留學生ある外、聽講生に一名あれば、總て廿八名にて卅七年七月卒業の深彥安(二十五)錢豐保(二十)の兩女史を第一回となし、今回の卒業は第二回目なりと云ふ、

女子大學卒業生

前後三回に三百八十六名の卒業生を出し居る、小石川目白臺の同大學に就いて、同生其後の狀況を聽

くに、

一、主婦となりたる者　六十一名
二、社會教育に從事する者　五名
三、教育に從事する者　六十一名
四、同校內設備の實業部に從事する者　五名
五、同校校友會刊行の雜誌編輯其他に從事する者　二十一名
六、修學を繼續せる者　三十四名
七、家庭補助者　百九十七名
八、死亡者　二名

の統計を示し居るが一の主婦となりたるものとは結婚を示し、二の社會教育に從事する者とは、工場の女工教育若しくは慈善會其他の團體機關に働けるもの、七の家庭補助者とは、母姉の許にありて家政を助け居るものにて、平たく言へば家庭にあるものを意味すとなり、扨て同大學の卒業生と言へば、二十三歲以上二十五六歲までの間なるが多く、既に充分の婚期を有しながら、三百八十六名の卒業生中、僅かに六十一名の結婚數を示し居るは、チト考へものなる可し、

女子教育の發達

二十七八年の日清戰役前後と、卅七八年戰役前後とに於ける、我國女子教育界の變遷を觀るに、其間僅かに十年に過ぎざるに、其の進步の程度驚くべく、之れを前戰役の當時に比すれば、女學生の數に於て優に八倍以上に達せり、即ち明治廿八年全國の女學生は、僅かに一萬九千百七十六人なりしが、九年後の三十六年に到りては、拾萬一千百二十三人を數ふるに至り、之れを細別すれば、

二十八年度

▲高等女學校生徒數　二千八百九十七人
▲各種學校生徒數　一萬六千百七十人
▲專門學校生徒數　百九人
以上合計一萬九千百七十六人

三十六年度

▲高等女學校生徒數　二萬五千七百人
▲各種技藝學校生徒數　五萬〃千百七十四人
▲實業及專門學校生徒數　一萬六千二百四十九人
以上合計十萬千百二十三人

と云ふ次第なりしが、其より九年後の統計を見るに約六倍半の增加を示し、卅七八年戰役前後に入りては、更に三萬の數を加へて、十二萬以上に達せるは

確かなることにて、此事實は明治二十八年の高等女學校數が、僅かに十五なりしに係らず、九年後の三十六年には八十一となり、三十七年となりては、九十五の多數を數ふるに至りしに看ても知り得べし

女教師の光榮

高輪御殿に在ます、常宮周宮兩殿下が總ての事に新進の御教育を受けさせ給ふとは度々漏れ承はる處なるが、お側近く召し使せ給ふ侍女の如きも、御養育係の撰擇最と嚴かなれば、御奉仕を仰付らるゝは此上なき光榮なり、然るに先頃より御殿へ奉仕を命ぜられたる一女史あり、

◎素性　岡山縣淺口郡車島村亡三宅莊左衛門氏の第三女松子(三十)と云ひ、同地の高等小學校第二學年を卒へて、廣島市の山陽女學校に入り、普通學を修め、才媛の名高かりしが、卒業後一旦他に嫁したるも暫くにして破鏡の歎を抱き、卒業間際卅六年十二月上京し、翌年一月より帝國婦人協會附屬なる女子工藝學校に入學し、昨年四月成績最優等を以て同校を卒業して、協會附屬實踐女學校及び女子工藝學校の裁縫女教師として、衆望を屬され居たり、

◎宮仕　本年二月高輪御殿より御召あり、專ら兩内親王殿下の御召物を裁ち縫ひするに堪能なる婦人をと、女學校への御沙汰ありたれば、校長下田歌子學監時任たけ子の兩女史が、撰擇の上學才と云ひ技倆と云ひ、松子女史適任なるべしと御沙汰の程を傳へたるに、中々に及びもなき事なりと辭退じたれども、他事なく勸められ、遂に宮仕するに意を決し、御殿へ罷りけるは、去ぬる二月中なりと、

◎御氣に入る　一意專心勤めたるまゝ兩陛下の思召に叶ひ、裁縫の役より更に進んで御侍女となり、御召物の召替へ御食事の御給仕など奉仕し、何れへ御成りあるにも、御供申し上ぐる身となりぬ、

◎一家　父なる人は此世を去り、六人兄弟の中二人の姉は郷里にて他に緣づき、長兄碩夫氏は辯護士と

なりて　京橋區銀座に開業し、次の弟廉士氏(三十)は伏見聯隊づき歩兵大尉其次弟誠意氏(二十六)は神戸高等商業學校に在學し近く卒業す可く母文子(六十)は昨今辯護士方にあり一族何れも榮え居れり、

◎松子の氣質　至極快活にして、言語また頗る明断なり、身體も健全にて御殿へ奉仕以來　私用の爲め外出したる事更になく、忠實に勤め居れるよし、

幼稚園界の大立物

這般日本女子大學附屬幼稚園主任として、新に招聘せられたる甲賀藤子女史(四十九)は、我國に於ける幼稚園事業の先覺者にして

○其の閲歴　を聞くに、素と攝州三田藩士の娘にて十七歳の時神戸女學院に入學し、今の金森通倫夫人山鹿旗之進夫人等と共に、第一回生徒となりまた修業中の身を以て、米國に渡り、桑港の小學校に就て、夫れ〴〵研究の歩を進むる中、年長けたる黑人の多くが、小學生となりて勉强し居る實狀を觀て大に感心し、將來教育家となりて、國家に盡すべき覺悟を定めて歸朝し、神戸女學院を卒業の後

○再度渡米　して、シンボーリス孃の監する幼稚園に就き、斯學に二ケ年間の研究を費し、更にボストン市に有名なるローラーフイッシャー孃の監する幼稚園に就て、專ら攻究を重ね、約三年間にて兩者とも卒業するの榮を得たる當時は、亞米利加の斯界も洵に微々たるもの「母の會」と云ふものは、漸く其の當時各地に創始されたるほどなりき、明治二十四年歸國後神戸市に有名なる、ハウ孃の頌榮女學校に教鞭を執ること約一ケ年間、夫れより今の廣島女學校の招きに應じて、同地に任に赴き、矢張幼稚園の創業に力を盡し居る中、明治二十七八年の戰役は開始されたり　折柄今の幼時保育場なるもの丶必要を認め、單身これが經營の衝に當り、專ら出征軍人の幼年少女を預りて、开が保育の任に當れるとは、同地方人の能く知れるところなりし明治三十年に至り、布哇なる白人婦人の組織に係る幼稚園よりの招聘に

應じ、此に具さに同事業の辛苦と經驗とを積み、三十七年の七月

○三度目渡米 にて、再びフイッシャー孃に會見の上、孃の薦めにより、ボストンの師範學校附屬幼稚園に就き、所謂舊派の幼稚園教授法に就て、大に攻究する處あり、更にシカゴー大學中の模範教育部に助手として奉職し、殊にアーレン孃に就て大いに得る處あり、越えて去る五月中歸朝早々、女子大學の招聘に應じて、其の幼稚園主任教授となりたる次第なるが、氏は素より成瀨校長とは、舊知の間柄にて是よりして、大いに理想的幼稚園を創むる考なりと女史は語られたり、更に女史の談片を左に記すべし

○**布哇の日本兒童** は何れも共に日本語を解せざるもの多く、お母さんは？と尋ねても、更に其の何の意たるを知らず、パーパー或はユアーマムマ？など言へば、直に英語にてスラ〳〵と答ふる有樣なるより、女史在職中は可成日本語を教授するやう努めたりと

○**歴史の實物示教** シカゴーの模範學校の如きは、歴史の講義終れば、直に教科書を携へて、別房のステージに移り、歴史中の活人物を現はして、是れを生徒に示し居る事、昨今我國に流行せる活人畫に類するものあり、役者はすべて生徒をあて嵌め居れるが、上級に進むに從つて、随分複雜なる悲劇喜劇も少なからず、言語の明晰、對話中の態度、さては其の時代に於ける人情風俗などを十分に寫し得て、史學の教授上非常に有益と認められ、幼稚園にも實行し居れりと、

夏の女學生

暑さの酷しいのと、蒸れ臭いのとの關係から、日本風結髪の本場たる、學習院女學部の生徒すら、束髪に結ふもの多くなりし程なれば、他の女學校生徒等は概して皆束髪なり、されど其形は以前の如く膨れたる廂は、稍や廢れ氣味となり、眞なしで一文字に輪前髪を潰し揃へた根を三つに折つて捲き上げ、三

枚櫛を周圍にさし根の正面か眞後に平結びのリボンを飾ること大流行なり、女學館式のマカレートやお下げは、暑中の爲めか目下甚だ少く、リボンの蝶結びも早や過去の行流となりたり▲此頃の流行はブローチで襟元を締ることにて、襟飾針と見擬ふばかりの石入り、小形のものが好まるゝやう見えたり▲殊に目立つは懐中時計なり、高等女學校程度の通學生にて、時計を持たぬは耻の樣に心得居り、以前は派手な染色の細リボンを紐にしたものなれど、近來は兎に角に金色の鎖ならずば氣が利かず、磁石下げの枝鎖りには何かしら美術品をぶら下げ居れり▲袴は追々改良して、近來は洋袴式を加味折衷したるもの流行し來れり、左れど腰より下の寸法短き日本婦人が如何に焦心てか姿好くは見えず▲靴下はリヲン絹製の外に、昨今レース透し編の靴下流行せり▲襦袢の筒袖口に襞とりたる改良服は、今は見捨てられ、此頃は極窄きズンドウの筒袖に絹レースを縫ひ付けたるもの流行し居れり、

◉**圖書敎育者大會**　師範、中學、高女各學校の圖書敎授法を研究して圖書敎育の普及發達に勉め其統一を圖らんが爲め今回文部省に於て圖書の夏期講習會開催の機を利用し圖書敎育會委員總代岡田秀氏主催となり八月一日より五日間東京美術學校に於て第一回全國圖書敎育者大會を開き圖書敎育上に關する事項を討議研究する由

◉奈良高等女學校の會話語矯正　左の標準語を設けて、野卑なる方言を改正しつゝありと、

方言	標準語
アリヤシマセン アラヘン	ゴザイマセン
アリヤヘンダ	ゴザイマセンデシタ
何々シマヒヨー	何々シマショー
歸ンナハッタ 歸ラハッタ	オカヘリナサッタ
シテヤンガー	シテ井ルジヤアリマセンカ
早クキーヘレ	早クイラッシヤイ
アンタシー	アナタナサイ
イカハレ。イキ子ー	イラッシヤイ
タベハレ	オアガリナサイ
早クシヤハレ	早クナサイ
何々タンガ子ー	何々デスカ子ー
コッチキー	コッチヘイラッシヤイ

詞藻



文學士　男爵　千秋季隆君選

朝顔

天

はかなしと人はいへどもつき〲に
　さくも久しき朝がほの花

東京　廣瀬健子

地

秋ぎりの立こめにたる柴の戸も
　しぼむにはやし朝がほの花

東京　照内清子

人

おこさんもうたてうつろひゆくもをし
　あはれ我脊子あはれ朝顔

備後　杉原衣子

選外秀逸

○

水そゝぐゆふべよりしてたのしきは
　さくらむあすの朝がほの花

東京　五十嵐清子

○

はかなしとたれかいひけん朝顔の
　花にやどかるつゆもありけり

東京　林艶子

○

くちはてし庭の袖垣ときめきて
　さきよそひけりあさがほのはな

東京　入江菊子

○

垣のそとに今朝めづらしき朝顔を
　となりの人にまつ見られけり

備後　石井妙子

○

やれかゝろ竹のかきれに白つゆのひかまとたのむあさがほの花

岡山　桂木萩江子

○

賤がやのあれしまがきをよそほひてあさな〲にゑめるあさ顔

酒田　齋藤いし子

○

あすさかん花たのしみに朝がほのつぼみ數へぬ日はなかりけり

秋田　古瀬惟子

○

つちかひしこゝろつくしのあらはれていろさま〲の朝顔の花

東京　田中睦子

○
あさがほの葉末のつゆの光こそはかなきものゝ一つなるらん
伊勢　藤堂しげ子

○
田舎みちふるきみてらのやれがきに露おもげなるあさがほの花
東京　田中千賀子

○
わらんべの手作りにせしやれがきにいろこく咲ける朝顔のはな
埼玉　安部つる子

○
きのふより今朝また花の数そひてさかりうれしき朝がほのはな
愛媛　高橋茂子

○
日さかりもさきいでし色のあせやらではかなげにのこる朝顔の花
岐阜　豊田冬子

○
世のちりにそまぬ色こそうれしけれいまをさかりの朝顔のはな
筑前　山本きく子

○
朝はやくきみがたまづさ手にとりて見るもうれしき朝顔のはな
東京　丹羽みつ子

○
いもとふたり競またばれぬ朝まだきみるもたのしきあさ顔の花
長崎　秋山虎子

○
あかつきの露くまなんとへきるりのさかづき受けて咲ける朝顔
東京　みよ子

○
おほしたてし鉢の朝顔朝な〳〵さきかはるこそうれしかりけれ
熊本　吉住艶子

○
しら露のひるまもまたずしほみけりあはれはかなきあさ顔の花
東京　西村直子

○
やれはてし庭のかきねの露のまをしばしわが世と朝がほのさく
和歌山　谷井清子

○
朝がほはげによき花よ朝いする身のおこたりをいましめぞする
東京　碓井のぶ子

○
千代こめし竹のまがきに咲きながらさかりほどなき朝顔のはな
名古屋　木下鶴子

○
子等起きよけさは一しほうつくしき花咲きそひし庭のあさがほ
伊勢　廣田政美子

○
いきたなき目もさむばかり朝顔の色さま〴〵に咲きそろひけり
伊勢　廣田せき子

○
わが宿のかきねをこえて朝顔のけさはとなりにはなさきにけり
岐阜　山田房子

○
おりかけしにしきあやとも見えにけりさきかさなれる垣の朝顔
東京　高貝子

○
しのゝめのつゆよりさきにおき出てゝゆめさましけり朝顔の花
東京　松本まつ子

○
朝顔も品さだめするみよにあひて花もうれしきいろやみすらむ
東京　原三幸子

○
袖垣のふりしやつれをつくろひて咲きかさなれるあさがほの花
東京　佐野ふき子

○
よみおきしきのふのくれのつぼみにもけさの朝顔数まさりけり
東京　佐野富子

○
しらつゆのひるまもしげきはかくれにさかりなりけり朝顔の花
東京　小島栄子

○
しら露のたまをかざしてほゝゑめるすがたらうたき垣のあさ顔
東京　景浦武子

○
ひにそひてさきかさなれる朝顔にうらおもてなき庭のそでがき
東京　河合象子

○
朝露にゑみてにほへるあさ顔にあさめさましてあさな〳〵見る
静岡　竹内光子

○
としふりし竹のかきねもわかぬまでさきかさなれる朝顔のはな
東京　吉岡鶴子

○
はなしげみ人しらつゆにかくれつゝゆふへまでさくあさ顔の花
東京　山口琴子

○
しら露の玉をかざしてませがきにゑみこぼれたるあさがほの花
東京　高野もと子

○ 三河 永井さい子
おく露のなさけなたのむ朝かほの花のちきりそあはれなりける

○ 越後 松永繁子
朝ねせはわらひやすらむうつくしきまかきのうへの朝顔のはな

○ 東京 渋矢竹照子
朝かほの花にやとれるしらつゆのひろまは花もしほれけるかな

○ 常陸 岡田尚子
朝顔のはひまつはりて賤か家のあれしかき根もおもしろきかな

○ 三重 吉田よしえ子
乙女子のなみたに似たる露のせてあけほの色のあさかほさきぬ

○ 東京 高橋珍子
おこたりのおしへとなりて幼子か寐さめ嬉しきあさかほのはな

○ 東京 永井ふさ子
移りやすき世のありさまをさなからにはなにあらはす露の朝顔

○ 千葉 木村きよ子
人の世のゆめもはかなし朝顔のみしかきさかりなとかうらまむ

○ 福井 岩橋花子
いふせさも花の咲くまはわかさりき賤か垣根におふるあさかほ

○ 肥後 友永常子
はふつるはませにあまれとおく露のひるまもまたぬ朝かほの花

○ 肥後 友永草子
しをり戸にさきかゝりつゝ掛金もはつしわつらふ朝かほのはな

○ 讃岐 安藤光代子
閨の戸をあけかたかけてあさ顔のしはしわか世と咲そほこれる

○ 東京 伊藤ふく子
竹垣にちよとちきりてゆふへまてはかけにさける朝かほのはな

○ 岡山 杉山ふさ子
しのゝめにおきてやみむと心してふすまに咲くか夢のあさかほ

○ 岡山 黒瀬まさの子
宵の雨けさとくはれてあしかきの露にうちゑむあさかほのはな

○ 大坂 池田英子
まちわひし垣のあさ顔さきにけりしほまぬうちに友に見せはや

○ 東京 伊藤竹子
朝顔のはなさきかゝるそて垣はうらおもてなきにしきなりけり

○ 東京 永井さき子
なかきにはあくかならひと聞きつれとせめてひと日は匂へ朝顔

○ 東京 加藤延子
一二輪あさかほさきて我か庭も寐さめうれしくなりにけるかな

○ 神奈川 中島茂子
はかなさは同しこゝろか村雨のつゆのなこりににほふあさかほ

○ 相州 岩谷淺子
とくおきてあすもまた見ん朝顔のつゆのひぬまの花のさかりを

○ 甲府 名取正代子
いかならむ露のそめてかあさかほはあさな〳〵に咲き變るらむ

○ 山梨 風間千代子
怠らて咲くあさかほの花見れはあさいする身のはつかしきかな

○ 新潟 岩本芳子
白露のすゝしくやとるなかゝきにさきかゝりたるあさかほの花

○ 埼玉 小川政子
ちとせへむ竹のまかきにさきなからさかりみしかき朝かほの花

○ 東京 土田八重子
あた人にま見えじとてかおくつゆのひろ間もまたぬかきの朝顔

○ 上毛 大澤雛子
おくつゆにいろうるはしき朝顔のやかてしほむと思ひかけきや

○ 小樽 牧倫子
おきて見れはよへ數へにし朝顔の數もたかへす三つさき出てぬ

○ 岩代 菅野和子
まちにまちし庭の朝顔つるのひてあれ君かへるけさ咲きそめぬ

○　　　　　熊本　大坪かれ子
うなゐこかれさめたのしくおきいてゝ　ゑみかはしたる朝顔の花
○　　　　　熊本　大坪久子
つゆの間をさかりににほふ朝顔を　わか身の上と見るへかりけり
○　　　　　熊本　大坪脩子
さま〱のいろにゝほひて朝顔の　あさな〱にさきかはりつゝ
○　　　　　京都　高丘禮子
よひのまにつほみの数をよみおきて　あしたまたるゝ軒の朝かほ
○　　　　　東京　林　環子
朝な〱おくしら露をいのちにて　さきこそいつれ垣のあさかほ
○　　　　　東京　美矢竹光子
朝な〱はかなき齢をしらつゆと　ともに過ゆくあさかほのはな
○　　　　　山口　村上操子
咲てとくしなるゝものと思ふにも　朝いせられぬあさかほのはな
○　　　　　東京　宵木たま子
なか垣のあなたこなたをまつはりて　へたてもおかぬ朝顔のはな
○　　　　　岡山　小山まつえ子
起出てゝうちとも清めぬ賤か家の　かきほをかさるあさかほの花
○　　　　　下野　井上尚子
露のまのいのちとしりてよの人の　めてはやしぬる朝かほのはな
○　　　　　秋田　鈴木きさ子
ありあけの月さへ空にのこれるに　垣のあさかほいまさかりなり
○　　　　　丹後　旭のり子
赤きしろきいろとり〱の朝顔や　あまの女神か手そめなるらん
○　　　　　東京　伊藤とし子
はなしけみかけにかくれて朝顔は　露のひるまもさかりなりけり
○　　　　　松山　上原のふ子
いろ〱の花はあれとも朝かほは　ゆふへまてさく種なかりけり
○　　　　　松山　田村多豆子

竹垣のちよにまとへとあさか　ほのはなはゝかなき色に咲きけり
○　　　　　東京　神田けい子
手折るとも露の干ぬ間に搴むらむ　さなからに見む垣のあさかほ
○　　　　　薩摩　松原みれ子
かはりたる花さへ咲きて朝ごとに　見るもめつらし鉢のあさかほ
○　　　　　秋田　細矢はる子
あさかほはあさなあさなの花なから　ちる一筋のこゝろにそさく
○　　　　　伊豫　樋口孝子
年をへてやれたる垣をよそほひて　目さむるはかり咲ける朝かほ
○　　　　　東京　瀬藤千代子
あさな〱書讀むまとに朝かほの　色うるはしく咲けるうれしさ
○　　　　　東京　毛田みや子
名にしおふ入谷の里のあさ顔も　つゆのひぬ間ぞいのちなりける
○　　　　　備後　串畑たれ子
露の玉うかへて咲けるあさがほの　花のさかりのうるはしきかな
○　　　　　三重　黒田代音子
よの中のうつろひやすきさま見せて　咲きかはりゆく朝かほの花
○　　　　　神戸　藤木うめ子
こゝろなく露ちらさんもおしければ　へたてゝ語るあさかほの垣
○　　　　　大阪　木村春江子
咲きかへて朝な〱に匂へるを　たかはかなしとうたひ初めけむ
○　　　　　名古屋　不破きみ子
友ならぬ人もとひきてあさかほの　花にかたらふれさめうれしき
○　　　　　東京　和田ひさ子
見せまほしき人をまつ間にはかなくも　垣の朝顔あゝうつろひぬ
○　　　　　東京　和田ひさ子
荒果てしにはのまかきの見にくさも　咲きかくしたる朝かほの花
○　　　　　福岡　大石綾子
染屋なる人に見せはやわか宿の　まかきにさける千々のあさかほ

○　佐賀　尾方やゑ子

なか〳〵にあはれはふかし賤かやのやれかきつゝむ朝かほの花

○　佐賀　尾方綾子

なつかしきはなのすかたにさそはれてぬるゝもうれし朝顔の露

○　備後　石井千鶴子

朝顔のさけるかき根にたゝすめはねくたれ髪のおもはゆきかな

○　磐城　鈴木菊史子

あかつきの露をすゝりにたれこめておくるやいもに朝顔のふみ

○　京都　高丘治子

つかのまの露のひぬまをいのちにてうつくしく咲く朝かほの花

○　東京　古谷花子

葉をそてに口紅かくすたをやめのすかたやさしき花のあさかほ

○　信州　毛利かつ子

つくろはぬ賤か垣根もあさ顔にうらおもて無くなりにけるかな

夕顔

天　京都　都筑田鶴子

わび人のはにふの篷にはひのびて
あはれもまさる夕がほの宿

地　東京　遠山よし子

かやりたく賤か軒端のいぶせさも
わするばかりに夕がほの咲く

人　永井ふさ子

雨すぎし軒ばすゞしくさきいでゝ
星とさゝやくゆふがほのはな

選外秀逸

備後　石井妙子

世の中をへたつ離の夕顔は
道の便りに訪ふ人もなし

○　岐阜　豊田ふゆ子

すむ人はしらぬなからもゆふかほの
花のあるしのなつかしき哉

○　三河　永井さい子

おく露にいろをあらそふ夕かほの
花のにほひそすゝしかりける

○　薩摩　松原みね子

少女子の夏のころもに染めまほし
みかづき匂ふゆふがほのはな

○　東京　高橋珍子

かやり火のけふりも匂ふこゝちして
まとひたのしき夕顔のやと

○　東京　河合象子

住やたれ夕顔かきのしろたへに
よそめゆかしきたそかれのやど
○ 肥後 友永常子

かやりたくしづが軒端に咲出でゝ
ひとりすゞしき夕がほの花

○
このましろ月かと見えて竹かきにしろたへにほふゆふかほの花　東京 吉岡艶子

○
夕顔はたそかれ時のしらつゆにすゝしく見ゆるはるのかずぐ　東京 山口琴子

○
朝がほに劣らぬいろを見せばやとおくれても咲くゆふ顔のはな　近江 金子しげ子

○
夕顔の咲かゝりたるそてがきはやつれも見えすたそかれのやど　静岡 竹内光子

○
光りある蟹かとはかりやまがつのかきれにしろき夕がほのはな　山梨 風間千代子

○
蚊やりたく伏屋の軒にまつはれどすゝけぬいろやゆふかほの花　東京 土田八重子

○
くれそめて賤かゝきれに風さわく葉分にしろしゆふかほのはな　美作 黒瀬さち子

○
ゆふだちの夕殘すゞしきたそがれにしらつゆにほふ夕がほの花　小樽 牧尙子

○
蚊遣火の煙りのひまにほの見ゆる白きはかきのゆふかほのはな　東京 林艶子

○
三日月のかけのかゝれる袖垣にひかりあらそふゆふかほのはな　大和 栗山たか子

○
ゆふ顔はよしありけにも咲にけりむかしの事もおもひ出でつゝ　山口 村上操子

○
賤か家の軒はにたてるけふりにもいろはうすれぬ夕がほのはな　松山 田村多豆子

○
よそめにもゆかしかりけりたそかれに夕顔にほふしづが垣れは　東京 伊藤竹子

○
すゝしけに匂ふゆふかほまつはれる賤か軒はゝいふせかれとも　松山 上原のふ子

○
破れはてし賤か垣根をゆふかほにひかりそへたる花のしらつゆ　東京 神田けい子

○
ともしひの影さへくらき賤かやのかきれにしろしゆふかほの花　秋田 細矢はる子

○
水打ちてすゝしくなりし庭のおもに入日うつらふゆふかほの花　東京 瀬藤千代子

○
ゆふまくれ賤かまがきを過ぬればゆふ顔のみはゑみをもらしつ　東京 毛田みや子

○
夕顔の花のまかきはくれやらで月のさすかとおもひけるかな　埼玉 横田政子

○
卯のはなの雪くえしたるたけ垣にふたゝひしろくさけるゆふ顔　埼玉 横田秋子

○
住む人もなつかしきまでたそがれのまがきににほふ花のゆふ顔　大阪 木村春江子

○
涼しさはいとゝまされり夕かほのきよけき花につきもかゝりて　名古屋 不破きみ子

○
ゆふぐれの空にそれぞとわかねどもほのかに見ゆるゆふ顔の宿　東京 和田ひさ子

○
すゝしさを中にやどしてたそがれをまつまもあらで匂ふ夕かほ　福岡 大石綾子

○
露をおきて月にほゝえむゆふかほの一輪ことにそよくゆふかせ　佐賀 尾方やゑ子

○佐賀　尾方綾子
すが〳〵にみえこそ渡れくれそめし　やみにかくれぬかきの夕顔

○東京　みよ子
春ならておほろ月見るこゝちして　なほなつかしき垣のゆふがほ

○備後　杉原衣子
しづの男が手盛の酒のうまからむ　ゆふがほだなのした蔭にして

○備後　石井千鶴子
夕がほの花のうはつゆかつ散りて　すゝしきかけな三日の月かも

○新潟　岩本芳子
くれそめてかやりたくなる賤がやの　ゝがきれに咲ける夕がほの花

○上毛　大澤華子
あめつちのおのづからなるみめぐみの　露にや咲ける夕がほの花

○東京　林環子
たそかれにそれとこそ知れま白にも　夕がほそ咲くともの門邊は

○大和　栗山倹子
夕月のかげほのかにもうつりけり　垣のゆふがほいまやさくらん

○熊本　大坪脩子
あれはてししづか垣根におのれのみ　心地よけなる花のゆふがほ

○長崎　秋山虎子
あはれ〳〵せこは世になくなさな子と　みるぞさひしき夕顔の花

○東京　青木たま子
やれ垣に匂ひいてつゝつゆおきて　月まつとこそゆふがほのはな

○岡山　小川まつえ子
賤がたく蚊遣のけふりなびけとも　かきねゆかしきゆふがほの花

○下野　井上倚子
椎のきにまつはりてさく夕がほの　露のひかりもたそかれにけり

○秋田　鈴木きさ子
ゆふけたくけふりもほそき賤が家の　のきばにしげく夕顔の咲く

○甲府　名取正代子
月はまださしものぼらぬたそかれの　のきはに白し夕がほのはな

○相州　岩谷淺子
夕へ〳〵露をもまたてさきにけり　しづが垣ねのゆふがほのはな

○神奈川　中島茂子
やまさとのたそかれときにきてみれば　夕顔さきて月もにほへり

○東京　加藤廷子
ところせき賤が伏屋の柴折戸に　さきほこりたるゆふがほのはな

○岡山　河根すき子
うす烟りたえま〳〵にかけもれて　月しろたへに見ゆるゆふがほ

○東京　田淵よし子
賤が家のまがきに生ふる夕顔の　ゑめるすがたのなつかしきかな

○陸前　平間あさ子
久かたの月のひかりもまだうすき　ゆふがほ棚にはなましろなり

○讃岐　安藤光代子
あさ顔のあすさく花を數へ居れば　おなじ垣根にゆふがほのさく

○肥後　友永常子
月かげもかきれすゝしくてりそひて　いよ〳〵しろし夕がほの花

○福井　岩橋花子
かやりたく賤が伏屋にすゝしげに　さきほこりたる夕がほのはな

○千葉　木村きよ子
たそかれは軒もまがきも一ついろに　たゝ夕顔のかすそよまるゝ

○伊豫　樋口季子
ゆふだちのなごりの露の葉がくれに　いまをわが世と夕顔の咲く

○東京　古谷花子
訪ふ人もなきあはら家に床しくも　なに夕がほの笑みがはすらむ

○常陸　岡田萬子
三日月の影ほのめきてしづが家の　垣根ゆかしきゆふがほのはな

○東京　美矢竹照子
たそがれに賤がをとめのかへるさを　笑みて迎ふるかきの夕がほ

○ 越後 松永繁子
ゆふ顔の花さくかどにゑましくもかへりくる子をまちたまふ母

○ 東京 猷浦武子
すゞしげに露をよそひてたそがれを我背がほにもにほふ夕がほ・

○ 東京 原三幸子
さやかにも垣の夕顔さきいでゝたつれまどはぬたそがれのやど

○ 東京 高 貞子
立よりて誰か見さらむよそめにもいろなつかしき夕がほのはな

○ 東京 松本まつ子
かしましくかのなく賤が軒ばにてすゞしくにほふ夕がほのはな

○ 東京 五十嵐清子
かやりたく賤がふせやのませがきにすゞしくにほふ夕がほの花

○ 東京 高野もと子
夕顔の花しろたへのさかりにてくれのこりたるやどぞゆかしき

○ 三重 吉田仲子
君来ますゆふべと軒のゆふがほにあらひ髪してたゞずむを女

○ 東京 碓井のぶ子
あれはてし賤がのきばをゆふがほの花のゑまひに人ぞ問ひ来る

○ 名古屋 木下鶴子
山の端に日かけしつみて賤が屋のかきれすゞしきゆふがほの花

○ 横濱 關谷已子
水うてばほろ／＼落つるしら玉やゆふがほのはな今うつくしき

○ 伊豫 廣田政美子
かたむきし軒にたてたる釣竿ににほふもやさしゆふがほのはな

○ 同 廣田せき子
袖垣にはひかゝりたるゆふがほの色すゞしくも咲き初めにけり

○ 岐阜 山田房子
にほはすはしらでこよひもかやりたく賤がかきれの夕がほの花

○ 東京 西村直子
あれはてししづが軒ばのきりかけにすゞしくにほふ夕がほの花

○ 熊本 吉住艶子
いとゞ尚ゆかしかりけり端居して月まつやどのゆふがほのはな

○ 筑前 上原うた子
こゝろこめしかひはありけり夕顔の今宵も花の咲きまさりつゝ

○ 下野 井上尚子
萬石のしろあとめぐるからたちのところ／＼にゆふがほの咲く

○ 筑前 山本きく子
山ざとの道にまよひてはからずも垣間ほの見しゆふがほのはな

○ 大阪 池田英子
いふせくてとふ人もなきしづが家ののきばににほふ夕顔のはな

○ 和歌山 谷井清子
三日月のゑみのまゆれのすゞしくも匂ひそめたり花のゆふがほ

○ 秋田 古瀬偕子
あれ果てみるかけもなき賤がやのくまおしかくすゆふがほの花

○ 酒田 齋藤いし子
さと川のながれにやどるゆふづきの光りをそふる夕がほのやど

○ 和歌山 植木廉子
吹きわたる葉分の風にあらはれてよめにもしろきゆふがほの花

○ 愛媛 高橋茂子
なにとなくはにふの小家もゆかしけれ夕顔にほふ三ヶ月のかげ

○ 和歌山 高内さくら子
とめゆきて袖もひらけりゆふがほの花のみしろき露のゆふぐれ

○ 神戸 藤木梅子
新月の更け行く軒にすゞしくも咲きにほひけりゆふがほのはな

○ 埼玉 横田やな子
世のつれの竹の垣根もなつされはながめはえあるゆふがほの花

短文

人賞

乳母が宿　下野　井上尚子

葡萄棚の下の据風呂の湯かげんのよいのも、糊のこわい浴衣も、乳母やの心づくし、爺やがたく蚊やり煙は、細く〳〵わら屋の軒を立ち上る、厨屋の方から新蕎麥の香りがする。

評　湯に入つて洗つたる浴衣を着て、蚊を追ふて貰ふて、新蕎麥の御馳走、取り分けて夏は、かゝる乳母の宿に泊りたきものなり

選外秀逸

球磨川の景　肥後　友永常子

水は懸崖の淵によどみて眠るが如く、岩に砕けて白布を晒すが如し。岸頭の松風は早瀬の音にたくひて琴の調とあやまたれ、舟は矢よりも早く下りて落葉の浮ぶに似たり。是日本三大急流の一、球磨川の風景なりとす。

評　壯大の景、この百文字内に収るを得べし、なほ細叙して投稿せられんことを望む

須磨の浦曲　東京　永井ふさ子

松青く、砂白き須磨の浦曲に停めば、沖の白帆も淡路島も、霞みて見えぬ、こゝぞ平氏没落の跡なる、あはれ紅旗の影は、寄せては砕け、砕けては消ゆる浦曲の浪に似て、げにはかなかりき、懐かしき青葉の笛の音は、變らぬ松風の調に比べて餘りに短かゝりしよ、

評　その松風の調べこそ、げに青葉の笛の名殘なるらめ

心地よきもの　相模　柚木とよ子

箒目正しき廣庭に餘り高からぬ松の一株、青き壁に四方の障子、明け放ちたる、軒の風鈴をそよ吹く風の振りならしたる、

評　こと〴〵く異議なし

夏の朝　東京　神田けい子

鎌の如き殘月光を收めて、東天漸々紅になりぬ、朝風心地よきまゝに庭におりたてば、垣の朝顔は早目覺むる計花咲けるを、合歓花は猶眠けに葉開かず、海紅なる花の露を含めるに、蝶はこの甘き香を吸ひつゝ眠りてか、未だ靜かに花の上に。

評　君も合歡花と同じからんには此風情を得知り給ふましきを

夕暮　　　　松山　白露女史

灰色の雲を裂て電光一閃、笠も頬冠も馬の耳も牛の角も一齊に異樣に動いた、忽降る光る鳴る晴れる、やがては卵黄色の雲はさつと流れて、太鼓が森の松の梢には帶の樣な煙が横はつた、橋の栁に月が懸つた頃、大盥かすめて蝙蝠二つ三つ。

評　雨後の空のすがく〳〵しき、蝙蝠の羽袖も自ら輕くなれるなるべし

無名の勇士　　　　千葉　木村きよ子

日露の役終りて、こたび論功行賞の御沙汰あり、曰く勳何等、功何級と、さはれ血と肉とを國に捧げて、しかも功を他に歸し、地下に眠れる無名の勇士なきにしもあらざるべし、

評　常に史家の遺憾とする所也、

蚊　　　　松山　田村多豆子

耳のもとになのれる聲は、ほそけれど、鼓の響きよりもまさりて聞ゆるは、其口ばしのするときを厭ふ心よりなるべし、ひと度かれに刺さるゝ時は、肉はれあかりて、かゆき事限りなし、厭くきはこの虫にこそ、凉しき月に對ふなりも、おもしろき書よむなりも、妨さまたけられて、

評　蚊曰く、君なればこそ、我聲の引合せに鼓のおとを取出したまいて憎まるゝながらもせめてもの心やりなれ、

田舎の朝　　　　群馬　吉田露子

面を拂ふ朝風心地よく庭に立てば、空漿に明はなれ、山寺の曉鐘かすかに響く、やがて東天紅を染め、緑の山は朝霧かゝりて淡墨繪の如し、彼方に昇る農家の煙、そゞろに仁徳帝の古偲ばる、旭光枕頭を射て目さむる人、此趣を知るか、

蝶の行衛　　　　東京　永井さき子

舟漕ぎ出て、漂々たる海原の氣色を眺めて居ると、海面をかよわき蝶が、ひら〳〵と飛び舞て居る、もし疲れでもしたならば、何處に羽をやすめるであらうか、宿るべき花の伏戸も無い此水上を何の目的があつてあの樣に飛びゆくのでせう、

火鉢　　　　東京　土屋八重子

北風肩を刺して粉雪ちら〳〵、何處にてか雪や氷と兒等の聲。かゝる時しも唯一の友と戀ひ親しまるゝは火桶なり、されど花笑ひ鳥唄ふ頃ともなれば、いつしかに打すてられて、顧みる人もなし噫。盛衰の變遷亦斯の如きのみ

最中の月　　　　東京　豐田とよ子

今年もなかば過ぎにけりと歌ふ童の聲聽けば、早や窓の芭蕉に注ぐ雨の音にも、哀てふ事の忍ばるゝを、今宵は親しき友も誘ひ給はれば、とく寐むと枕につくを、誰ぞ門叩くにいそき出て眺ればなげ、とてや、物思はせ顏なる月ぞのぼれる。

熱涙　　　　東京　井口松子

今箱根から歸られた秀樣が、表から走て來て、母の見えぬに氣ぬけがした樣子、母死去の報に依て歸つた私に、おば樣はとの尋れ詮方なく佛壇に飾つて在る寫眞を示せば、寫眞でないほんとのおば樣は、と其顏のいじらしさ、思はず我袖を濡らした。

そゞろごと　　　　群馬　大澤筆子

夏の夕端居凉しく文よむ窓を、ブーンと一聲耳もとに來る蚊、憎

むべき限なり、山里の故にや、蛙の音いつも勇まし、「古池に飛びて翁の目さましたるもよけれど、目近き池の面に浮び上りて、凉しき月を碎きし風情いとをかし、

み寺　　岩代　菅野和子

禅寺の深淵に寂坐するは、樹木なく、錦珀煤々、白蜒ゞ・路傍に人目を忍くより勝る。美栄を術飾するは名利に踊躍して目も尚は足らずを意味す、仄かに聞く入相鐘聲の雲間より響き渡る有難さに如かざるなり。

夏夜月　　福井　岩橋花子

今し月は山の端を出た、けれど、どんよりと曇つて、丁度薄衣をはつた様、聞くともなく田の面から聞ゆる、蛙の聲を聞いて居ると、ふと庭の松が鮮やかになつた、見ると何時雲を出たか月は松のみか、あたりに其涼しい笑顔を放つて居た、

幼稚園　　長崎　坂本たけ子

満面にあふるゝばかりの笑をふくみ、先生お早よー、と入り来れる愛らしの稚兒、今かれの眼中には、保姆より尊く、保姆よりやさしき者はあらじ、あゝ此愛らしき白糸の如き稚兒よ、なれも現世のけがれに逢ひては、赤き黒きに染み行くか、あゝあはれ／＼げに忍ばるゝエミールの生立ち、

田植　　福岡　宮崎増子

雨に濡れ土にまみるゝのもいとはで、早苗を植ゑて居る人に道を問ふた處が、一列に並んで居た饅頭笠が、皆一時に仰向ひた、

あはれ胡蝶　　香川　松永茂子

机上に挿まんとて、垣根に咲きし百合の花を、摘み取りしに、深かき契の結ばれてありしか、一羽の胡蝶、朝な夕なに其の跡に尋れ来りて、つきせぬ思ひを語るが如し、嗚呼、思へば妾は實に心なき、罪深き業をなせしかな。

久ちやん　　大阪　益田益子

朝庭を徜徉し給ふ、祖父様の處へ走つて来た、久ちやん、祖父様彼の白の花と、赤の花と頂戴な、學校へ持て行つてよ、祖父様は此の無邪氣な、久ちやんの顔を見て、お庭の花は、さう切れませんよ、久ちやん、ぬからぬ顔して、太くつて固い、からね。

田舎の夕　　長野　關谷己子

紫紺の雲、漂う彼方の嶺が尾をかくし、細々と立つかまどの烟淋しう、ちぎれ／＼に、立ち登る。袂ふるれば露落ゝ小草の緑いと濃か。賤が手弱女、萌えし草、取りもてゆく。夕日沈む田のほとりに、聞ゆる蛙の啼音をかしう。風涼しうなりて露は、いよ／＼しげし。

山家の樂園　　岡山　黒瀬まさの子

焦んばかりの夏の日も、早黄昏近くなり、田園翁は鍬を肩にして家路に歸る、鳴く音涼しき蜩は、急に耳を驚かす、庭の木の葉をそよぐ風、最も心地よく、夕飯には味噌漬香物で、舌鼓鳴らして一日の勞を忘る、げに山家の樂園は茲に存するか、

新體詩

地賞

十五夜　　埼玉　野川芳子

さらぬだに
月はあはれのふかゝるを

こよひはまして三五の夜
　眺めのほどぞおもはるゝ

三日月の
　頃よりかねてまちわびし
　思ひもふかき今宵かな
　　眺めのほとぞいかならむ

花すゝき
　女郎花などとりそろへ
　ともし火わざと打けして
　　いざこそまためやゝしばし

まつ頃に
　月はいつしかのほりけり
　さやけき色のさやかにも
　　てりそふ影ぞうつくしき

かねてより
　ちぎりおきにし友どちは
　今宵來べきをなどてかく
　　われまたすらん月見つゝ

月かげは
　まつまもあらでいでにしを
　あはれつれなしわが友と
　　ながむる空にかりのこゑ

評　筆の運びすら／＼として、月の影さへ流れの如し

人　賞

孝女　　肥後　友永常子

髪は亂れてつやもなく　身には汗しむ衣を着て
ものおもひげに小娘が　朝な朝なのかみまゐり
故や有むとあるあした　近くまねきて問見れば
かれはまぶたに置露を　紅葉に似たる手に拂ひ
言葉たえ／＼かたる樣　われに一人の母あれど
はるの初にちゝぎみが　やまひの爲にあわ雪と
消えし歎ぞ[illegible]ゝとして　花さきにほふ彌生より
母もやまひに打ふしぬ　初のうちはなきちゝが
わづかばかりも驛遞に　あづけ有たる金をとり
其日其日をおくりしが　わづか斗のたくはへの
いかでいつ迄續くべき　つひに家財も米のしろ
藥のしろとなりはてゝ　今ははにふの小屋住ひ
ほそき烟ぞたてかぬる　斯るいぶせき住居さへ

はゝの病のいえもせば
のきの夕顔ふしながら
夏やせならで肉はおち
かくてわりなば母君の
この御社にひくしめの
祈にこそは來つるなれ
藥せんじてまゐらせむ
森の木陰にかげ消えぬ
さくも涙のたねなりと
一聲血に啼ほとゝぎす

いとへる者か嬉しさを
眺ましてもゑみまさず
眼は日々にくぼまれぬ
病はおもるばかりぞと
たゝ一筋にかみかけて
いざやかへりて母君に
さらばといひて小娘は
あゝ小娘がものがたり
忍ぶをりしも神かきに

評　妙趣奇想といふにはあらねど、筆路共の渋滞なく叙事として申分なし

選外秀逸

夏の暮

大和　栗山俊子

草の葉ごとにおく露の
小野の細道さまよへば
光はなちてとぶほたる
消えんともせぬ其影に

風にみだれてちる夕
星なきそらに二ツ三ツ
誰に思ひのこがるらむ
あはれ愁の色みえぬ

忍び姿

越後　松永繁子

旅にさすらふ若き子が
卯の花かげのほとゝぎす
學びの窓に物おもひ
山と河とのおもかげを
待ちし休みも昨日より
竹の小椽に足さげて
昔ながらにひかれども
快樂なけれど玉小琴
青葉さゆらぎ風さつと
迷ひこしたる螢虫
神のうたげのうまざけの
姉のみたまの虫となり

人の情の薄しとて
血に鳴くが如吾もなく
折につけては古里の
結ぶも嬉しなつかしき
今宵生れのわが草屋
かやりの下に仰ぐ月
姉ゆきまして團居せん
庭を掃ひてかなでしが
吹ばすだれの内かたに
天を下りし星屑が
もれし雰がそもあらで
今宵しのびの其姿

夏の歌

神戸　足立あさ子

○名に流れたる玉川や
鵜縄もながき夏の日の
晴れても空に雲の浪
明日とな云そ神の御田

鮎とり／＼に引よする
あつさはいつか忘れ水
忽ち雨とふるものを
惠みに濡れよ植乙女

をさなご

香川　松永茂子

霞の神に抱かれて
おひさきこもる稚兒の

茅花霞を手にしつゝ　野邊の芝生にまどろみぬ
霞める空に雲雀この　乳添の歌の聞ゆれは
調合すかいさゝ川　石にせかるゝ水の音
疲れし羽根も休めずに　花を離れて飛ぶ胡蝶
清き夢路の關守る　神の使か汝はしも
浮世の塵にそまぬ子の　夢は何所に通ふらん
女神の群るゝ岡の邊か　薔薇の香薫る御園生か
風は吹けども靜かにて　ふり分け髮のなびくのみ
頬を打てども散る花は　夢のわたりをたちもせず
ねむれ幼兒何時迄も　森のあなたに日は落て
夕は朧き野邊をそめ　雲雀は床にかへるまで

古社

松山　白露女史

太古に似たる森の姿、　石徑苔を生じ、
勅額暗く寂し、　松の花散りしく堂に。

○

想夫の鹿の蹄輕く、　横ぎるは堂の前、
戛然と鳴る石疊、　若葉の風そと薫り來る。

○

白鳥は木立を掠め、　裏山の瀧かすか、
雨後の若葉虹を吐き、　高き鳥居は蒼たる古色。

夏月

東京　永井さき子

朧にかすむの夕月の、　影を宿せし青柳の、
糸にめでにし春もはや　青葉がくれにくれはてゝ、
同し檐に今日はまた、　涼しく匂ふ夏の夜の、
月を待つこそなつかしけれ。

夏の夕

神奈川　加藤きわ子

入相つぐる鐘の音　靜けきひゞき傳へつゝ
蘆の葉そよぐ川岸に　夕しほ遠くみちつて來ぬ
ゆめ見る如き星影は　くしき光を放ちつゝ
神のいませる樂園に　導く如くかゞやきぬ

奥津城

長野　關谷巳子

草と草とをわけ入れば、
苔むす寺や古清庵。
風吹かれども散る花の、
靜かに逝くよ眞白百合。
散れば亂れて露や鳴る、
花散る塵に眠れるか。
思ひ出せば袖ぬらす、
知るや知らずやいとし子を。
蝶よ花よと愛でられて、
我家の花は散りにしか。

露で冷たき奥津城の
小川の水のやはらぎに、
そが美しの花の主、
涙は三とせかはかじな、
行く年月をたのしみし、

四ッの緒

大坂　木村春江子

一

玉たれの
小簾卷き上げておばしまに
切なる君か御言葉に
ゆるし玉ひれあゝされど

君と語らふ此夕
小さき胸はもゆれども
うべなひ難きうき身也

二

浮きたる戀にあられ共
語るにつらき我思ひ

今こそこゝに語らんを
ゆめなうらみそつれなしと

三

君もやしらむこの宮の
畏く萎れる森蔭に
居ます目しひの我友を
望の多き人の世に
月雪花も見え分かず
あたらさかりの年頃を
淋しく過し玉ふなる

四

かざしの花を爭ひし
幼な遊びのたはむれに
思ひかけきや我友を
めしひの群に入れんとは
せめて片目と神かけて
いのりし甲斐もあらすして
今は闇なる現しよに
琵琶の調を友として
過し玉へるいとしさよ

五

淨世の塵もかゝられは
にごりに染まぬ我心
語らふ人もあらされば
戀に狂はぬ我心
朝調ふる四ツの緒に
森の梢に鳥啼ひ
夕調ふる琵琶の音に
通ふ松風虫の聲
自然の調相和して
扨も樂しき我身よと
友はほゝゑみ玉ふなり

六

友はほゝゑみ玉ふなり
ほゝゑみ玉ふ我友の
深き心はしられども
われは悩ゆべき想かや
安けき身ぞとの玉へど
探り勝なる起臥の
其いたはりを誰かせむ
めしひの妻と人はいへ
清き心は我ぞしる
あはれの友を背とよびて
心のかぎり盡しなば
いかに安けき我胸や
親の許はあられとも
神にちかひし我心
石に立つ矢のためしとて
いつかまことゝなりもせむ
よしや思のかなはずば
友のあたりに庇して
我れも調べん琵琶の曲
土に語らん極みまで
身は長への乙女にて

七

千束にあまる君の文
安しく捨てし我なれど
上る烟はあゝ君が
うらみの哥か戀の詩か
さすかに堪へぬ心地して
われは幾度泣きにけむ

八

しらでおかせし我罪と
情にあまるみ情に
亂れ亂るゝ胸の中
せめてあはれと思しなば
つれなくてあれ中々に
やさしき君ぞうらみなる

九

露けき曉そむくれば
あなや夕の雲立ちて
森に火影は見えそめぬ
今宵も友の調ふらん
風のまに〳〵響くびわの音

短歌

天賞

旅中聞蟬　　東京　大江鶴子

日は高し行くては遠し蟬の聲
　すゞしき影によりていこはん

地賞

夏月　　美濃　伊藤小百合

涼みする人は歸りて里川の

さゞ波しろし夏の夜の月

入賞

涼風　大阪　木村春江

すゞしさはいろにも見ゆるわか竹の
露ふきはらふなつのゆふ風

選外秀逸

鵜河　常陸　岡田萬子

あらそひて鵜船さをさし大井川
のほれはくたるかゝり火のかげ

松虫　福井　岩橋はな子

ゆくりなく月すむこよひわか庭に
あきをそへたるまつむしの聲

泉　東京　禰津梅子

しけりあふまつの下蔭なかれきて
たにまにおつる水のすゞしさ

夏月　越後　松永しげ子

色ふかき松にかゝりしゆふたちのしつくにやとれる月のすゞしさ

同　香川　松永茂子

しけり生ふ庭のあをき葉におくつゆを玉かと見するなつの夜の月

夕立晴　松山　田村多豆子

降きぬとおもへはゝれて夕たちはなとすゝしさを惜むなるらん

池菖蒲　福岡　大石綾子

たちかたにさけるみきはのあやめ草池のひこひや花によふらん

燕　備後　石井紗子

子を思ふこゝろのやみに五月雨の空あさり行くつはくらめかな

螢　備後　石井千鶴子

山田守るおきなの閣の燈火のもる・と見しはほたるなりけり

同　備後　杉原衣子

放ちやる籠のほたるのみたれてもむくらの垣をはなれさりけり

五月雨　京都　高丘治子

うちしむる木魚のおともほのきこえくろ谷山にさつきあめふる

歸省　神戸　藤木梅子

見るもの・生命ありけに思はるゝはしめてかへるふるさとの路

螢　三重　桑田代音子

蘆の葉をすゝしく渡るゆふかせに露とみたれてとふはたるかな

菖蒲　神戸　足立あさ子

引く人のある身なられとあやめ咲く澤邊にひとりさまよひてけり

早秋聞虫　松山　上原のふ子

夏よりも聲をたてにしその虫をかなしときくや秋にはあるらむ

水邊螢　東京　小池松子

置つゆの玉とこほれてさと川のあし間しつかにたつほたるかな

走馬燈　大阪　桝田益子

ともし火にめくるほ影はいち早く移りゆく世のためしなるらん

萩　東京　瀬藤千代子

露ふくみ枝もたわゝにたまはきのにほひこほるゝ里のあせみち

蛙　東京　毛田みや子

夕立をつくるなるらん雨かはすあを葉のうへにこゑしきるなり

夏月　秋田　佐々常子

ちりの世の暑さもしらてそら高き月のみやこやすみよかるらむ

白百合　下野　井上倉子
世のちりにそまて清けき白ゆりのすがたをおのがこゝろとも哉

失せし我が子　岡山　黒瀬政の子
かれの音は遠くかなたに響きけりうせにしちこは今いつこにて

松蔭　秋田　鈴木きさ子
たひ人もしはし立ち寄るまつ蔭けみなもとのなき清水なかるゝ

泉　常陸　中山鈴子
やまかけに秋をさゝめくいはしみつむすはぬ袖も涼しかりけり

團欒　丹後　旭のり子
隔てなき三人のまとひうれしくて一日のうさもわすれてしかな

夏月　秋田　佐々秀子
そらのうみ夏もよそにそこきのほる月のみふねや涼しかるらむ

百合　薩摩　松原みれ子
かいま見てゆく人おほし我やどのそのゝひめゆり化さきしより

螢　京都　土岐靜子
ゆふことのつきれはふてにくりかへしまなびの友にをくる玉章

別れ　東京　土田八重子
たひころもたち別れゆく愁しさはしのふの袖につゝみあまりて

松虫　群馬　大澤華子
松むしのやとはとゝへはさゝかにの糸につゆあるあき萩のもと

水雞　小樽　牧　絢子
川近きやとはくひなにたゝかれて夢むすばぬもいく夜なりけん

朝顔　岩代　菅野和子
一つより二つ三つ四つ花さきてひともとあさかほ軒をつゝめり

窓夏月　大和　栗山俊子
わか竹の葉わけにやとるゆふ月のかけのさし入るまとゆうち眺

萩　東京　加藤廷子
こけむせる石のほとけのかたふきて萩に名を得しふるてらの庭

朝の海　讃岐　安藤光代子
和田の原ほから〳〵とあけそめてかすまさりゆく眞帆片帆かな

電話　埼玉　横田秋子
ゐなからにかたることはも聞わけて萬ことたる世となりにけり

石面苔　埼玉　横田やな子
山川の小石ましりにこけむしてきよきなかれもゝのさひにけり

隣り鷄　埼玉　横田政子
聲しきるとなりの村の鷄なけとしのゝめくらきあせのひとすち

夏草　岡山　河根すゝき子
あとたえてふみわけかたき玉ほこの道の行手にしけるなつくさ

納涼　岡山　桂木はぎえ子
風そよくならの木かけにたちよれは夏をよそなる心地こそすれ

夕立　東京　永井さき子
木々になく蟬のこゑさへしつまりて一時つよきゆふたちのあめ

夏夜　肥後　友永常子
氷うるかはへのやとのともし火もきえはてぬまにしらむ夏の夜

螢　吉田露子
坐なからに心のたけを何處までも告ぐるを得るは螢のたまもの

梅雨　東京　美矢竹照子
都たにさひしかりけるさみたれを奥やまひとはいかにおもはむ

初雁　東京　古谷花子
たらちねのたよりもかなとしのふ夜にきくも戀しきはつ雁の聲

七十賀　東京　高橋宏子
いにしへも稀なるよはひかされ來てみとりいろそふよろつ代の松

撫子　東京　神田けい子
雨晴れしあしたの岡に咲きいてゝつゆにおき伏す床なつのはな

小楠公　信州　毛利かづ子
さくら花よに惜まれて散るとても其香は千代にかほりこそすれ

水鷄　東京　永井ふさ子
わが宿のきよきなかれに月すみて水鷄なくなりあけほのゝそら

筆　長崎　坂本たけ子
もゝしきやふりにし文の下つ世にのころは筆のいさをなりけり

夏夜　東京　豊田とよ子
鐘楼のつきに立たつむひな僧のはく衣のすそになつの風わたる

みそき　岐阜　山田、房子
つみとがはなかして歸るみそき川たもと輕くもかせやふくらん

月前虫　岐阜　豐田冬子
月のさすしつか馬やのくつわ虫のきはもさらすよたゝなくなり

夕月　横濱　關谷己子
しつか屋の軒端にかゝるゆふつきやおともすゝしき風鈴のかせ

夕立　名古屋　木下鶴子
ものほしのころもわすれて夕立の雨になしくもぬらしけるかな

誕生　東京　碓井のぶ子
みとりなす二葉の小松千代かけて宿のさかえをいろにみせけり

避暑　東京　西村直子
玉くしけ函根のやまのあしの湯に夏のあつさをなかしけるかな

夏夕　大阪　池田英子
雨あれしみ空に月のかけさしてふくかせすゝし夏のゆふくれ

七夕　東京　禰津梅子
くれぬまにあまの川らのわたし守はやふれいたせ君わたるへく

松虫　酒田　齋藤いし子
たつれ行くしるへのかたは堅やみてわけきしみちに松虫のなく

折にふれて　加賀　富田環子
あまの川なかるゝ星のゆくへ見てふるきうた人戀ふるよひかな

俳句

天賞

虫干　美濃　佐藤みよ子
虫干や昔をしのぶ裾模様

地賞

田植　伊豆　横山よう子
田に月を殘して歸る田植かな

人賞

短夜　東京　豊田とよ子
短夜を障子かじるや鼠の子

選外秀逸

○　下野　井上侚子
夕立や局局に灯のともる
空低う雲ちぎれとぶ夕立哉
蚊帳の中の蚊をば氣にする一夜哉
炎天や河原の石のわれんとす

○　松山　山脇白露

たゝ群るゝ蠅に痩せたる思ひ哉
抜け落ちし櫛ひろふときはたた神
蚊やりして田植の足をのばしけり
掛香に浴後うれしき涼みかな
掛香や衣ずれ軽き闇の人

夏三句　　東京　豊田とよ子

涼しさや緋鯉のはぬる五六寸
涼しさや峰の松風瀧の音
短夜や艪も声間の船宿り

夏季　　相州　中御園杉枝子

蚊遣火や飛彈の匠が刻み屑
鮎や大久保殿の年季者
青蓋の塵を拂へば鱶紋かな
打水や岐阜提灯に灯がともる

夏十句　　東京　勝屋國子

夕顔の一とつ咲きけり草の闇
衣更て六波羅武士の活歩かな
梨盗に獣屋集ひぬ　子規
夕顔や都個使の眉若き
藻の花にひゝく観世の鼓かな
藻の花や鯉の尾に立つ　水巴

嗚かすとて唖蟬なぶる小供かな
賽人の銭沈めたる清水かな
青簾や奈良の小鹿の角細工
更科の里の夜頃や　子規

五月雨や晴間に急ぐ田舎道　　京東　永井ふさ子
夕立や分かれ〳〵に雨宿り
蜻蛉や釣する人の竿のさき
嘩せし雨に追はるゝ夏の山
絵日傘のそむ池や水すまし　　松山　岩崎きよ子
水静けく林檎の樹下を流れけり
川に添ふ納涼台や蓮の花
西瓜賣蓬見の船に來りけり
日暮里や音して開く蓮の花
遠からぬ磯のひゞきや月涼し　　東京　浅野よし子
泙の花に灯淡き夜振かな
生節や雨に酒かふ湖來宿
懸瀑の音がたりや不如歸
夕烟る行水の火や夏の風　　東京　山本久子
汗をふく絹ハンケチやすみれの香
初蟬の晴間をなくや梅雨日記
籠枕疑耳に碁の鎚を聞く
傘さしてあぶなき橋や杜若
涼しさや町の暖簾のゆらぎけり　　新潟　石川しげ子
古寺の槐の陰やところてん
螢飛ぶ一ツ家あたり啼啼の聲
破寺をとりまく草の茂りかな
夏衣にも流行元祿模樣かな

清風の二字墨痕の隔かな
野地蔵の一本杉や蝉の聲
野地蔵し汗かいて居る暑さかな

新潟　牧はぎ子

わかれ道小菊や花のほそらして
なさなすの砂に字をかく夏の川

磐城　鈴木菊史子

なく蝉の聲ほそりけり靈まつり

筑前　上原歌子

朝がほの露ほしさうや眞ひる時
ハンモックのつて木影や夏知らず

上毛　大竹しげ子

夕立や門の穂並に風渡る
夕立や雲はいつもの南より
矢文射る城の大手や夕立す
行水や肩に受けたる通り雨
長き夜や泣ゝ兒をすかす女親
蝉なくや森を出てくる小順禮

東京　谷口貞子

乗せて見る爼板小さき西瓜哉
桐道のみとりも添へて青簾
遠くから牛除けて居る日傘哉
初螢一つは竹の雫かな
朝顔や今朝の客には今朝の花
夏草や通ひ路もなき小町塚

神戸　水越美子

蚊を追ふてやる母の手に蚊一匹
夏の夜や蚊を追ふたり追はれたり

福岡　宮崎増子

誰が寝ぞ手向けられたる百合の花

京都　櫻木すて子

朝霧や狂女の顔の白うして
雨晴れて聖堂を包む夜霧哉

東京　加藤延子

氷屋の二階涼しき青田哉
連れを待つ納涼台や公園地
朝顔や今日は白色紫に
朝顔に早く起き冷水摩擦哉

松山　首藤さと子

虫干や戦死の夫の服も見ゆ

筑前　平岡あさ子

五月雨や柄杓もとゝく井戸の水
乳呑子を老に預けて田植かな
子をつれて螢追ひけり田甫道

肥後　友永常子

此里のみは夏なき里か瀧の下
氷屋を出た一二丁元氣なり
月よりも先酒をよぶ涼客

東京　永井さき子

涼しさや見かへる人の亂れ髪
一閣の雨雲寄せて夕涼し

東京　加藤延子

夕風にうちは取られて涼みかな

東京　みよ子

炎天や演習兵の砂けぶり
常磐山夏やせもせで木のしげり
夏ふた荷を松に預けて山清水
夏ふた荷を卸して山の清水哉
炎天や都大路の砂けぶり

新潟　牧はぎ子

一調子はづむ砧や月の前

東京　澤田しで子

下男かと聞いて驚くあるじ哉
ほめられて顔に紅葉を散しけり

黒瀬政野子

董摘む小女はいまだ戀知らず

秋田　鈴木きさ子

五月雨の川になり行く徑哉
五月雨や石滑に奥の院
水沽れし磧を過ぐる夏野哉
心太珠簾の瀧曾て見し
ひろ顔や河原の石にせゝろ水

東京　永瀬しげ子

旅人の足ひきとむる花の村
古松や枝にからまる藤の花

秋田　鈴木きさ子

咲く牡丹庭の狭きを憚からず
おこたりの我が窓に螢來りけり
涼しさや風鈴ゆらぐ新座敷

新潟　石川しげ子

川添の一ッ家涼し夏の月
夕涼やゆらぐゆかたの派手模様
短冊の形にゆかしき田植かな
眼ひや田植に女の人たらで
山吹の後れ咲き見て新茶哉
葉になつて八重一重なき櫻哉
神風に四百餘州の落葉かな
富士山をふまへて立つや雲の峰
天高く海只廣し秋の月
日を追ふて月に追はるゝ田植かな
卯の花や桂の里のうす月夜
夕顔やとほしの洩るゝ片厢
蝙蝠や花散る里の夕けしき
青梅や垣越しに來る隣の子
富士見ゆる窓を塞さし若葉哉
式臺は日傘に狹し女學會
竹取の翁蝦百合大事がる
入梅晴や治水工事の村會議
夜も富士の見ゆる二階や夏の月
見る人に汗握らする競馬かな
戀に泣く閨の戸たゝく水鷄哉
蜘の圍にかゝりし聲や夜の蟬
井に垂るゝ枝結びけり夏柳
いさゝ川滴る夏の綠かな
夕闇にまぎれぬ足の白さかな
瀧の音に耳振る馬や百合のはな
行春や南の山のくもりがち
洪水や湖畔の寺のしらせがれ
夕立に驚く蟻の葉舟かな

長崎　秋山虎子
上州　大竹しげ子
筑前　山本きく子
神奈川　高橋つれ子
神戸　足立ゐい子
神戸　足立あさ子
相模　抽木とよ子
香川　松永茂子

一盃の燒酎にますあつさかな
うた人に名所ゆるさぬ汽車の旅
五月雨や親しき友もしばしこず
吟聲の涼しく聞こゆまつ並木
五月雨や物思ひありて床の内
夕立や緋鯉飛び出す泥の上
川水にかげ走りゆくほたる哉
手ひとつや唄も田植の拍子もの
闇の夜をわがものがほや飛ぶ螢
笠下げて行く人もあり木下闇
打水や遠山の雨ほめながら
つんぼうの聲の高さすゞみ臺
手元から風道のたつ田植かな
夢に見たあすもらひけり初茄子
古郷を思ふ山路やほとゝぎす
つれ〳〵にひとり待夜の蚊遣哉
雲きえぬ山にも立つか雲の峰
立場から立場うつりや肩の蝿
我顔を思はず見たり岩淸水
山川の瀬おともたゆる暑さかな
聞なほす聲なかりけりほとゝぎす
短夜としりつゝ月にふかしけり
ひる顔や木立も見えぬ砂地道
小屋かけた跡もありけり木下闇

松山　上原のぶ子
京都　櫻木すて子
京都　高丘治子
常陸　中山鈴子
東京　山田妍子
東京　岸田倭文子
伊豆　今井よし子
近江　鶴田たつ子
千葉　大崎米子

◎和歌兼題

▽九月　松蟲　女郎花　▽十月　秋月　紅葉　▽十一月　山家菊　時雨

訪へや田舍

狐水庵

夏の休みの來し折に
　田舍もとへや一度は
いさゝ小川に釣もせん
　釣には小鮒鯉うぐひ
飽かば畑ものきぬらせん
　甜瓜や西瓜や玉蜀黍
木陰とならばいざ來ませ
　與作の植の椎の下
目にむづかしき書捨てゝ
むしろの上にころがりつ
賤の乙女の品さだめ
都じまんもしたまへや
夕となれば浴みして
　彌次郎兵衛ならぬ地獄風呂
蚊遣の烟けむたくば
　團扇を腰に河の邊を
ならば妹を案内させ
あちら　こちらと歩まんせ
　可愛い螢が二つ三つ
　もゆるもよしや月もよし
さてねむたくば床のべん
　千代思出す獨り蚊帳
萱のあそびを夢に見て
　明くるも同じ草の庵
　さても田舍のたのしさよ

俄雨

千泉

空は見るまにかきくれつ
　あやしき風は吹あれつ
またゝくひまのいなづまや
　おどろにひゞくなる神や
しのをつがぬる雨すごく
　あはてふためく人多し
早苗とりにし乙女にも
　牛に草かふわらはべも
ぬれじといそぐ背戸の口
　やれ安心も口のうち
またもとゞろくいかづちに
　思はすしらず手を耳に
雲もはだえもあはだちぬ
　愛でたき顔の氣もうせぬ
やがて晴れゆく黒雲も
　風もしづけくいかづちも
あとはすゞしき夕日かげ
　うつる水の面の笠の影
今はすゞしと歌ひけり
　こゑもさよらに聞えけり

海門夜泊

牛分子

楫まくら　入江に近く　舟泊る
うたゝねの　夢打さます　夜半の鐘
見渡せば　月高く　波をてらし
島々の　影あはく　海にうかぶ
いさり火　豆の如く　沖の果にちり
家岡の如く　磯の松に見ゆ
大月　海に沈めば　魚波をやぶり
濱風　舟をさそへば　常耳をかすむ
かへる舟　歌ふ人　皆黒み
磯の砂　海のもや　皆しらむ

乘雲

黄華女史

うすぎぬに堪へぬ人やなと
我をわらへる人あれど
下界のふちをぬけいで
白雲高く乘らんには
重れる塵の添はぬこそ
身もかるがるとよからめ

投書家に希望

本誌詞藻欄に投稿せらるゝ方は、左の書式によりて撰者に便利を與へられんことを望む

兼題和歌（もしくは短文、新體詩等）

題　　府縣名　　姓名

歌ならば二行に、短文新體詩等も天地をあけて、字のあまりつまらぬやうに願ひたし

區郡町村名

右は兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはその以上の名を並べることなきやうに願ひたし、用紙は葉書にても差支なけれど、相成べくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくらるれば殊によし、

投書はすべて女子に限り、以上の希望も、要するに女子らしき投書の仕方は所謂書生流にあらざるを、其の人柄とゝもに採りたきなり、

定價

一册	前金貳拾錢
三册	前金五拾七錢
六册	前金壹圓拾錢
拾貳册	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に金貳錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年七月廿八日印刷
明治三十九年八月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

梅澤清一著 ◉ 清少納言と紫式部 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

澁谷愛著 ◉ 萬國女子風俗 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ◉ 少女讀本 全三冊 定價各金十八錢 郵稅各金四錢

大町桂月著 ◉ 常盤御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

小林雨塔著 ◉ 勾當の內侍 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

濱田慶著 ◉ 袈裟御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

國府犀東著 ◉ 靜御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

長田偶得著 ◉ 顔世御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

杉谷正隆著 ◉ 家庭訓歎 修身百首 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

高瀬眞卿著 ◉ 學校家庭 修身一夕話 全 定價 特六十錢 並三十八錢 郵稅 八錢 六錢

指原乙子著 ◉ 女子文章軌範 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

女學及家庭書類

塚原澁柿著 ◎小牧合戰 全 定價金五十五錢 郵稅金十錢

工藤武重謹著 ◎孝明天皇御遺德 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

山崎忠和著 ◎文久物語（一名寺田屋騷動） 全 定價金二十八錢 郵稅金六錢

少年傳記類

文學士大町桂月著 ◎少年武士道史傳第一編 藤田東湖 定價金十九錢 郵稅金四錢

法學士工藤景文著 ◎少年武士道史傳第二編 山中鹿之助 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士三好物外著 ◎少年武士道史傳第三編 上杉謙信 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士笹川臨風著 ◎少年武士道史傳第四編 本多平八 定價金十九錢 郵稅金四錢

田岡嶺雲著 ◎少年武士道史傳第五編 小早川隆景 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士白河鯉洋著 ◎少年武士道史傳第六編 立花宗茂 定價金十九錢 郵稅金四錢

法學士太田蒼溟著 ◎少年武士道史傳第七編 木村重成 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士中內蝶二著 ◎少年武士道史傳第八編 大石良雄 定價金十九錢 郵稅金四錢

內國通運株式會社編纂 ◎新式大日本里程地圖 洋裝帙入 定價（各參圓五拾錢） 送料荷造費廿五錢 同卅五錢 洋裝帙五十錢 洋四十錢

農商務省御編纂 ◎淸國染織制織に關する意匠圖按 大和綴 正價金五圓 送料及荷造費廿五錢 遞需四十五錢

文部省體操遊戯取調委員
井口あくり　可兒徳　川瀬元九郎
高島平三郎　坪井玄道
諸先生共著

體育の理論及實際

總クロース
菊版五百餘頁
正價金壹圓參拾錢
郵税六錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學の大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは現今本邦中本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戯取調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上並に生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畵を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親く教授を受くるが如し目下暑中休暇に際し新式體操講習に志す人は勿論學校其他苟も體育に志ある人は必一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

女鑑

明治三十九年八月一日發行　毎月一回一日發行　第拾六年第九號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷